

〔重複〕 4号住居跡の北東隅を切り、遺構北東半を東西に走る4号溝によって切られるが、底面の破壊はない。

〔平面形・規模〕 長辺で2.4m、短辺1.5mの北東から南西方向に長い方形を呈する。

〔埋土〕 1層と2層の黒褐色土は4号の埋土で、本遺構の直接的な埋土は3～5層である。3・4層は黒褐色土で粒状のシルトを含むが4層がより多い。5層は暗褐色のシルトと黑色土の混合土で南西壁沿いにみられる堅い層である。

〔床・壁〕 床は地山の褐色砂質シルト、および南西半は黒褐色粘質土面を利用して、全体的に北東から南西に向って、ゆるやかな傾斜で低くなり高低差は約15cmであるが、面的には凹凸がほとんどなく堅くしまり汚れが少ない。

壁の遺存は溝に切られる部分が多く良好ではない。4号住居跡を切る南西壁の一部は、埋土5層からみて貼壁と推察される。壁高は北隅で25cmで最も高く、南東壁では15cmある。立ち上がりは床面近くで直であるが上部は外傾する。

〔その他の施設〕 床面中央近くにP<sub>1</sub>の検出をみた。径22cmの円形プランで深さ10cmの小ピットで、埋土は黒褐色土とシルトの混合土である。

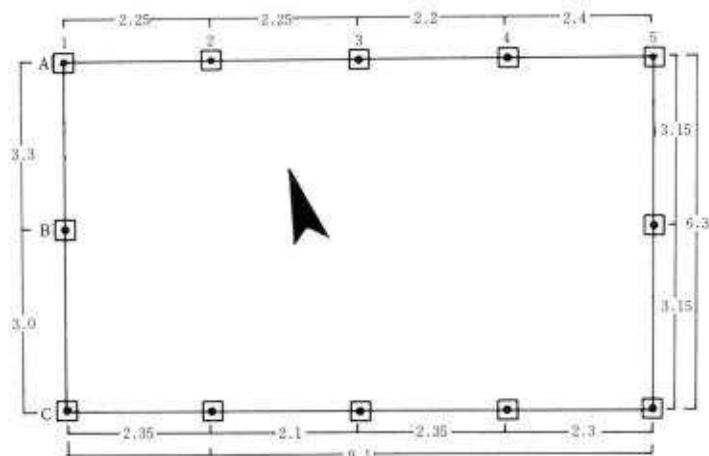
## 2. 掘立柱建物跡

本調査地において、確実に掘立柱建物跡と認められるものは1棟である。

### Aj 21掘立柱建物跡

#### 遺構 (第33・34図 図版11)

2号住居跡の南、および3号住居跡の東に隣接し位置する。5・8号溝状土壤と10号土壤を切り、2・3・4号溝によって切られる。



第33図

Aj 21掘立柱建物跡模式図

— 上平澤新田遺跡 —

建物跡は、東西4間×南北2間の東西棟で、梁行方向で真北に対し18度30分東に傾く。柱掘り方は多少のばらつきはあるが、大概1辺0.6m~0.8mの方形プランで、深さは0.38m~0.78m内で0.45m~0.6mが多い。C<sub>1</sub>掘方を除き柱あたりが認められ、径約30cm~40cmを計り黒褐色土である。壁はほぼ垂直に立ち、埋め土は黒褐色土とシルトの混合であるが、その状態は相互がまだら状、もしくはブロック状に混るものである。

桁行柱間寸法と総長は、南列西から2.35m+2.1m+2.35m+2.3m=9.1m、北列西から2.25m+2.25m+2.2m+2.4m=9.1mで、梁行柱間寸法と総長は東列北から3.15m+3.15m=6.3m、西列北から3.3m+3.0m=6.3m、柱あたりの芯々で計測した数値である。いずれも総長においては同数値を示すが柱間寸法は同一ではない。総長を現尺で尺換算すると桁行は30尺となり、柱間寸法は7.5尺等間、梁行は21尺となり、柱間寸法10.5尺等間が割り出される。

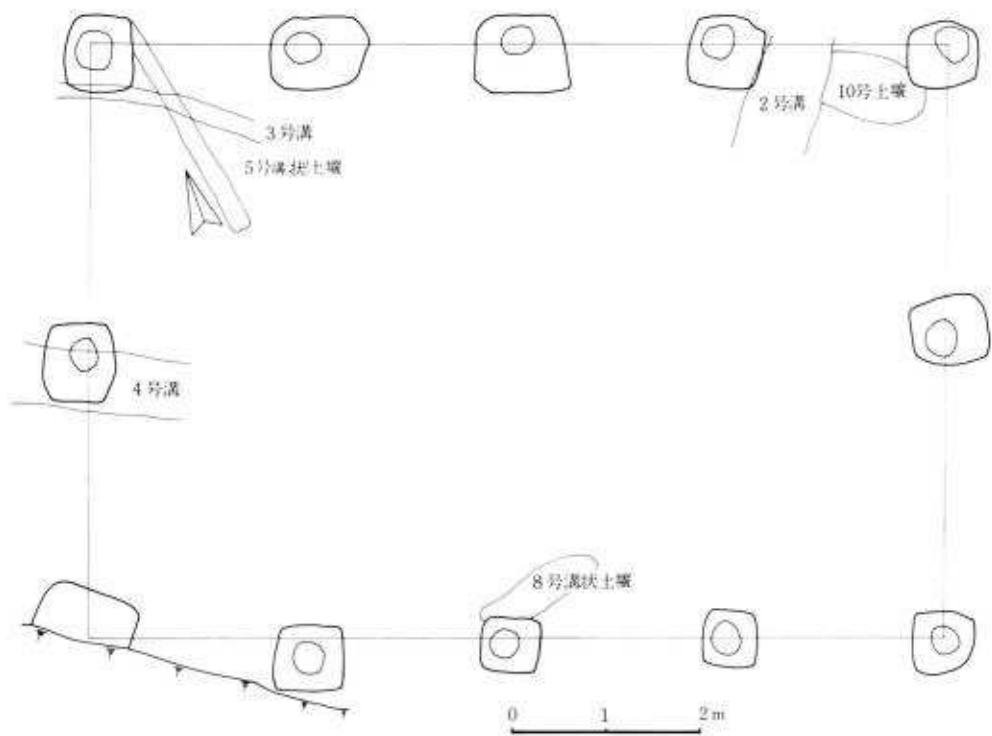
遺 物

A<sub>1</sub>・A<sub>3</sub>・A<sub>4</sub>・A<sub>5</sub>・C<sub>3</sub>の掘方埋土から遺物の出土をみたがすべて破片である。その種別・点数は第1表に示す通りであるが、A<sub>1</sub>出土A類環片中2点は、口縁部でやや外反し、灰色を呈するもの、A<sub>4</sub>出土A類環片1点も前述と類似する口縁部分であり、B類環片中1点は底部で回転系切り無調整、橙色を呈し焼成、胎土とも比較的良い。C類環片は口縁部分で内外とも黑色処理を施したものである。

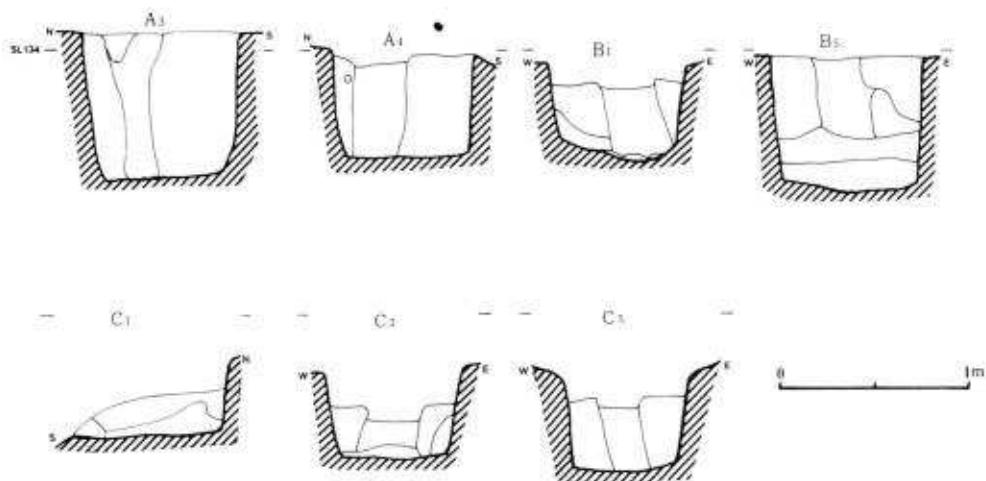
第1表 A<sub>1</sub>~C<sub>3</sub>掘立柱建物跡掘り方関係一覧表

項目 掘り方 内 容	掘り方規模			出土遺物				
	東西×南北 <sup>m</sup>	深さ <sup>m</sup>	柱あたり径 <sup>m</sup>	A類環	B類環	C類環	土師壺	須恵器 or 壺
A <sub>1</sub>	0.65×0.75	0.78	0.40	3				
A <sub>2</sub>	1.00×0.70	0.71	0.38					
A <sub>3</sub>	1.00×0.75	0.75	0.35				2	
A <sub>4</sub>	0.70×0.70	0.55	0.35	1	3	1	6	1
A <sub>5</sub>	0.70×0.60	0.58	0.40		1		1	
B <sub>1</sub>	0.65×0.80	0.50	0.35					
B <sub>2</sub>	0.70×0.70	0.70	0.40					
C <sub>1</sub>	1.00×?	0.38	?					
C <sub>2</sub>	0.70×0.65	0.47	0.34					
C <sub>3</sub>	0.60×0.55	0.46	0.30	1		2	5	
C <sub>4</sub>	0.55×0.60	0.57	0.36					
C <sub>5</sub>	0.60×0.60	0.52	0.32					

\* 柱あたり径は最長で計測。



第34図 Aji21掘立柱建物跡平面図



第35図 Aji21掘立柱建物跡掘方断面実測図

### 3. 土 壤

#### (1) 溝状土壤

本調査地で検出された溝状土壤は14基を数え、その分布は町道より北のA・B区で8基、南のB区で6基、いずれも褐色砂質シルト面(Ⅱ層)の検出であり、C区では検出されない。他遺構と重複するもの7基であるが、すべて他遺構より古く、共伴する遺物は全くない。

それぞれの計測値と長軸方向をまとめると第2表のようになる。以下、概要を述べる。

1号(Ah21)溝状土壤(第36図) A区1号住居跡と2号住居跡の間に位置し、長軸方向は東西に近く平面形は長楕円状を呈し、壁は開墳部に向ってやや開き、長軸東端では開きが大きい。底面はほぼ平坦である。埋土は上層黒色土に砂質シルトと径2~3cm大の礫を若干含み、下は黒褐色土に上層より多くの砂質シルトを含む。

2号(Aj30-1)溝状土壤(第36図 図版12) A区南西端の段丘崖近くに位置し、長軸方向は東西に近く、平面形は長楕円の溝状を呈するが東端を3号溝で切られ、西端は水道管理設溝により破壊されている。現存する壁はほぼ垂直に立ち、底面は西に向って約15cm低くなる。埋土は記録なく不明である。

3号(Aj30-2)溝状土壤(第36図 図版12) 2号溝状土壤の西端に連続する位置に検出され、長軸方向は東西に近く、平面形は2号溝状土壤と類似する。東端を水道管理設溝に西端は4号溝で切られ、現存する壁は西端下部が若干奥に抉り込まれるが、他はほぼ垂直に近い。底面は両端に高い弧状で、上層から黒色土・暗褐色シルトに黒色土混入、黒褐色土にシルト混入の埋土である。

第2表 溝状土壤測定値一覧表

土壤名	開墳部(cm)	墳底部(cm)	深さ(cm)	長軸方向	重複関係	図版
1号(Ah21)	122×48	94×19	52	N-60°-E		
2号(Aj30-1)	180×27	163×16	50	N-60°-E	3号溝より旧	12
3号(Aj30-2)	185×24	179×14	50	N-73°-E		12
4号(Aj27)	179×57	165×24	72	N-85°-E	1号溝より旧	12
5号(Aj18)	265?×19	257×16	70	N-25°-W	Aj21建物 3号溝より旧	12
6号(Aj15)	135×65	144×23	70	N-105°-E		12
7号(Ba15)	135×45	124×14	78	N-82°-E		12
8号(Bb15)	162×62	174×28	50	N-93°-E	Aj21建物より旧	12
9号(Be71)	156×65	155×26	58	N-20°-E		13
10号(Be77)	143×60	156×36	68	N-2°-W	Be65方形周溝より旧	12
11号(Bg68)	166×60	148×15	78	N-13°-E	Be65方形周溝より旧	13
12号(Bg59)	143×37	132×20	60	N-9°-E	6号溝より旧	13
13号(Bj65)	188×33	216×10	62	N-1°-E		13
14号(Bj68)	220×15	243×8	76	N-8°-E		13

4号 (Aj 27) 溝状土壤 (第36図 図版12) 2号溝状土壤の東約1.5mに位置し、長軸方向はほぼ東西を向く、平面形は長楕円の溝状で西端上部を1号溝に切られる。壁の長軸東端は垂直、西端中半で奥に抉り、短軸断面でY字状を呈する。底面は中央から西端に向って若干高くなる。埋土は上層から黒褐色土(1号溝埋土)、黒色土に細砂と小豆大の礫を含む、黒色土にシルトがブロック状に全般に混る、にぶい黄褐色シルト、暗褐色シルト層に大別できる。

5号 (Aj 18) 溝状土壤 (第36図 図版12) 3号住居跡の東南隅から約1.5mに位置し、長軸方向はほぼ南北を向く、平面形は狭長な方形ないし楕円形の溝状を呈し、北端はAj 21掘立柱建物跡北西隅の掘方(A<sub>1</sub>)に、北半上部を3号溝に切られる。現存する壁は長軸南端下部で若干奥に抉り、北端は不明であり短軸断面では垂直に立つ、底はほぼ平坦で、埋土は上層から黒褐色土、黒色土と大別できるが黒色土の中間にレンズ状に、また壁ぎわに若干の褐色シルトと黒色土の混土層がある。

6号 (Aj 15) 溝状土壤 (第36図 図版12) 5号溝状土壤の約2m東に位置し、長軸方向は東西に近く平面形は北辺で外側に弧状のふくらみをもつが、埋土の状況から崩落したもので、本来長楕円ないし狭長な方形の溝状を呈するものである。壁は長軸西端底近くが奥に抉りこまれ、東端上部でやや外に開きぎみであるがほぼ垂直に近い、短軸断面南側は上部でやや外に開く、北側上半は大きく外に開くが前述のように崩落のため、本来南側と同様の立ち上がりとみる。底はほぼ平坦である。埋土は上層から黒褐色土で北壁側にシルトのブロックを含む層、黄褐色土に砂質シルトを含む層、黄褐色シルトが北側から流れ込んで入り崩落土とみられる層、赤褐色砂質シルト層となる。

7号 (Ba 15) 溝状土壤 (第36図 図版12) 6号溝状土壤の南約1mに位置し、長軸方向は東北を向く、平面形は長楕円ないし狭長な方形の溝状を呈し、壁は長軸西端底近くを奥に抉りこみ、東端上半がやや外に開く。短軸断面は底から開墻部に向ってやや開きぎみであるが、上半に若干の崩落があり、本来垂直に近いものと考えられる。底は西端から東端に向って約10cm低くなり、壁近くでまた若干上がる。埋土は上層から黒色土と黒褐色土に砂質シルトを含む層が交互に入る4層からなるが、上から2層めがより多くのシルトを含む。

8号 (Bb 15) 溝状土壤 (第36図 図版12) 7号溝状土壤の南約2mに位置し、長軸方向は東西に近い、平面形は楕円ないし狭長な方形を呈する。南側西半の上半が、Aj 21掘立柱建物跡南列西から3つめの掘方(C<sub>3</sub>)に切られ、北側東半の上半を現代の擾乱によって破壊され遺存状況は良好とは言えない。壁は東西両端とも底近くを奥に抉りこみ袋状を呈する。短軸断面の現状は開墻部で外に大きく開く漏斗状を呈するが、崩落のため本来は底から開墻部に向いやや外開きの立ち上がりとみた。底は東西両端に高く中央が低い弧状である。埋土は大別して2層で、上から黒褐色土、黒褐色とシルトの混土があり、後者は崩落土とみられる。

9号 (Be 71) 溝状土壤 (第36図 図版13) 本調査地を東西に走る町道の南、Be62隅丸方形周溝No.1北辺近くに位置する。長軸方向は南北に近く、平面形は狭長の隅丸方形に近い、壁は長軸両端とも底近くを奥に抉りこみ袋状を呈し、短軸断面は開墾部近くで大きく外に開くが、崩落があったとみられ、本来開墾部に向ってやや外開きの立ち上がりとみられる。底は中央が若干低いが、ほぼ平坦に近い。埋土は上から暗褐色土、黒褐色土となり、その下の暗褐色シルトと黒褐色土が不規則に入る層が崩落土と思われる。最下層に水分の多い黒褐色土がある。

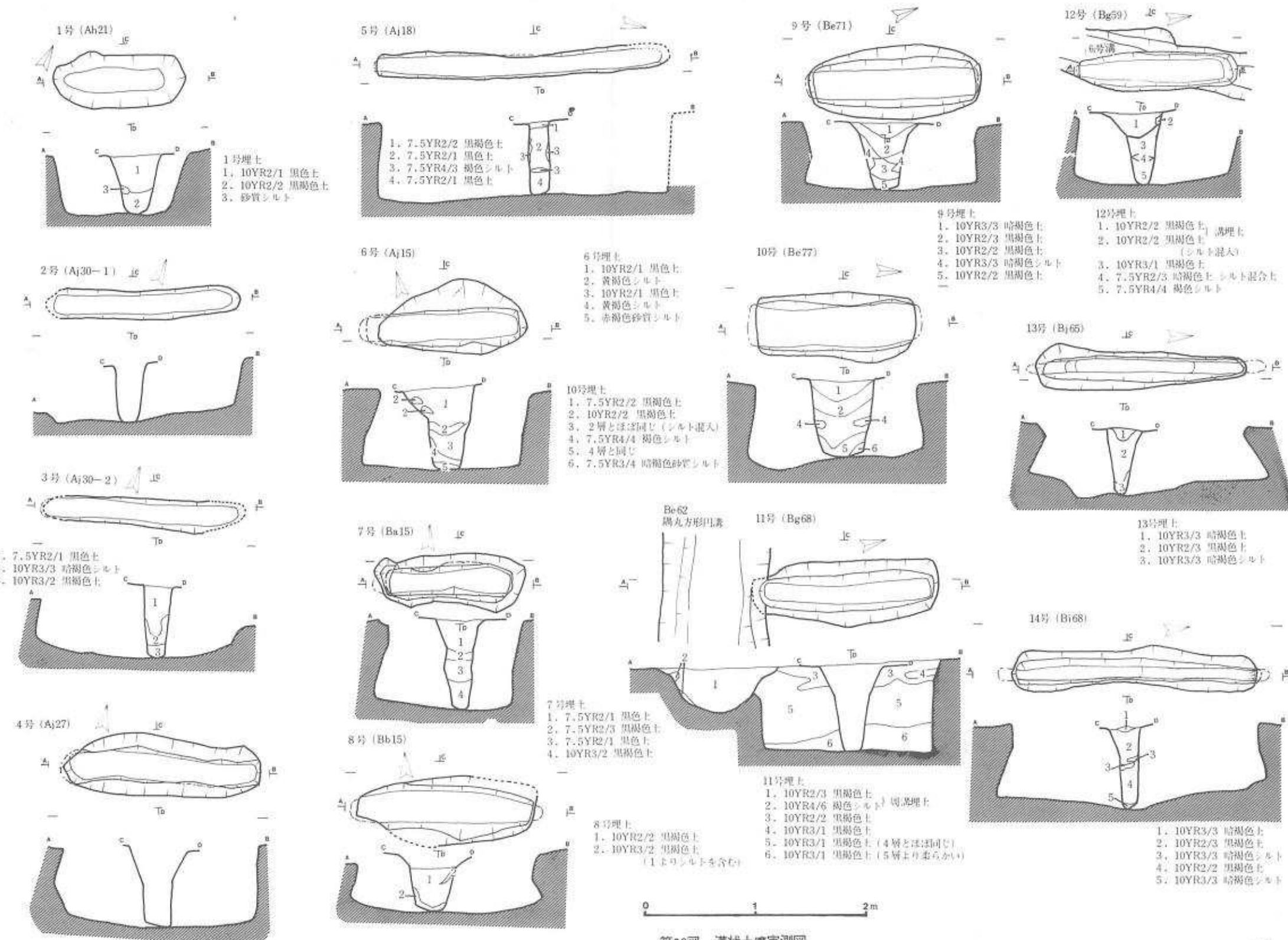
10号 (Be 77) 溝状土壤 (第36図 図版12) 9号溝状土壤の約7.5m東に位置し、Be62隅丸方形周溝No.4の底が検出面である。長軸方向はほぼ南北であり、平面形は隅丸の長方形状を呈する。壁は長軸両端で若干奥に抉りこみ、短軸断面ではやや開墾部に向けて外開きぎみであるが、ほぼ垂直に近い。底は中央でやや高く両端に低い凸状で特に南端が低い。埋土は上層から黒褐色土が3層あり、下層ほどシルトの混入が多くなり、その下層が褐色シルトに黒褐色土が混入した堅い層となる。

11号 (Bg 68) 溝状土壤 (第36図 図版13) 10号溝状土壤の南約5mに位置し、長軸方向は南北に近く、平面形は隅丸長方形の溝状を呈する、南端開墾部をBe62隅丸方形周溝No.1に切られる。壁は長軸北端でほぼ垂直に立つ、南端上半は不明であるが下半は垂直であり、全体は北端と同様と推定できる。短軸断面は底から外開きぎみに立ち、中半から上は大きく開く漏斗状を呈する。埋土は上層から黒褐色土が3層に大別されるが、上層は植生痕が多く、中層はシルトの混入が多い。下層は水分が多く柔らかい。

12号 (Bg 59) 溝状土壤 (第36図 図版13) 11号溝状土壤の北西約11mの段丘沿いに位置し、長軸方向は南北に近く、平面形は長楕円もしくは狭長な隅丸方形である。東側の1部を残し、ほぼ全体が南北に走る6号溝に切られる。壁は長軸南端で内に傾き、北端で外に開くゆがんだ形状を呈する。短軸断面は西側上半は溝で破壊されているが、東側から推定して開墾部に向ってやや外に開きぎみの立ち上がりである。底は南半中央で若干低い弧状を呈する。埋土は上層から黒褐色土(6号溝埋土)、シルト混入の黒褐色土、黒褐色土、黒褐色土とシルトの混合となる。

13号 (Bj 65) 溝状土壤 (第36図 図版13) 11号溝状土壤の南西約7mに位置し、長軸方向はほぼ南北であり、平面形は長楕円の溝状である。壁は長軸両端とも奥に深く抉りこんだ袋状を呈し、短軸断面はV字状で開墾部に向って開く立ち上がりである。底は南に向って低くなり、南端直前で急に高くなる縦じて凹凸がある。埋土は上層からシルト混りの暗褐色土、黒褐色土、黒褐色土混りの暗褐色シルトとなる。

14号 (Bi 68) 溝状土壤 (第36図 図版13) 13号溝状土壤に平行しその3.5m東に位置する。長軸方向はほぼ南北であり、平面形は長楕円の溝状である。壁は長軸、短軸断面とも13号溝状土壤に類似し、底は南端から中央までほぼ水平で、中央から北端に向ってゆるやかに高くなる。



第36図 溝状土壤実測図

埋土は大別して、黒褐色土と黒褐色土シルトをまだら状に含む層の中間に暗褐色シルトが薄く入り、最下層に黒褐色土を含んだ暗褐色シルト層がある。

### (2) 円形状の土壤他

ここでは平面形が円形・梢円形および方形に近い土壤27基を一括している。形態的に幾つかに細分できるが、以下その特徴と合せ各土壤についての概要を述べる。なお、計測値等については第3表を参照されたい。

第3表 土 壤 測 定 値 一 覧 表

土壤名	開 墓 部 (cm)	深 底 部 (cm)	深 さ (cm)	遺 物	重複関係	撮影 回数
1号(AB24)	65×60	70×68	25	繩文(地文)土器片		37
2号(AD24)	95×86	84×71	15			37
3号(AD27)	85×78	70×62	20	繩文(地文)土器片		37
4号(AE24)	90×110?	70×90?	15		新しい掘りこみ	37
5号(AF18)	125×130	90×95	87	繩文(地文)土器片		38+14
6号(AG21)	145×155	110×130	66	繩文後期小形鉢1個体		39+14
7号(AG12)	95×115	75×97	38	B類壺1個体		40
8号(AG21)	125×190	90×146	67			38+14
9号(AH18)	135×135	95×104	15			37
10号(AJ12)	120×84	94×50	30	环片A2-B5-C1、土師壺片14個	2号溝、AJ21建物より旧	37
11号(AJ30)	135?×119	110×100	14		新しい擾乱あり	37+16
12号(Bd65)	110×100	60×58	87		Be65方形周溝より旧	40+15
13号(Be65)	80?×82	56×60	14	B·C類壺各1個体	"	40+17
14号(Bf62)	56×63	46×46	65		"	40
15号(Bf62-1)	70?×84	60?×60	12		16号より旧	37
16号(Bf62-2)	90×90	66×68	20		15号より新	37
17号(Bg77)	120×130	104×116	20			38+17
18号(Bh71)	100×90	58×52	107		Be65方形周溝より旧	40+15
19号(Bh77)	114×120	102×108	22			38+16
20号(Bh74)	112×113	100×86	72			39+15
21号(Ca80)	220×136	183×116	28	繩文晚期小形鉢1個体	新しい擾乱あり	39+16
22号(Cb74)	160×130?	100×90	30	繩文(地文)土師器片		38
23号(Ce68)	方形76×110	66×80	16	炭化物	8号住より旧	41+17
24号(Ce71)	166×176	138×140	15	环片A5-B28-C2、土師壺15個		38
25号(Ce74)	100×88	46×45	35	須恵壺片7·环A5-B14個		41+18
26号(Cd74)	240×140	156×106	24	环片A2-B4-C1、土師壺3、繩文33		39+16
27号(Cd71)	140×82	100×42	48	环片A1-B47、土師壺14、擦石		41

— 上平澤新田遺跡 —

1号 (Ab 24) 土壌 (第37図) A区遺構検出地区の最北に位置する。円形の浅いフラスコ状を呈し底は平坦である。埋土は記録なく不明、底近くで縄文 (地文) 土器片4点が出土した。この土壌は開墾部の径65×60cm、深さ25cmの規模で本調査地では他に検出がない。

2号 (Ad 24) 土壌 (第37図) 1号土壌の南約4mに位置する。円形で浅い皿状を呈し底は平坦である。埋土は記録なく不明で遺物は共伴しない。

3号 (Ad 27) 土壌 (第37図) 2号土壌の南西約1.5mに位置する。円形で浅い皿状を呈し底は平坦である。埋土は黒色土の単層で全般に砂が混り極少の炭を含み数個の川原石をもつ。縄文 (地文) の土器片22点が出土した。

4号 (Ae 24) 土壌 (第37図) 3号土壌の東約4mに位置し、北側が後の搅乱で破壊されている。梢円形で浅い皿状を呈し底は平坦である。埋土は砂質シルトを含む黒色土と壁ぎわに暗褐色シルトと黒褐色土の混土がある遺物は共伴しない。

15号 (Bf 62-1) 土壌 (第37図) B区Be62隅丸方形周溝のNo.1西辺に隣接する。南西を16号土壌に切られるが、円形の浅い皿状を呈し底は平坦である。埋土は黒色土で遺物は共伴しない。

16号 (Bf 62-2) 土壌 (第37図) 15号土壌を切る。円形の浅い皿状を呈し底は平坦であり、埋土は黒褐色土に径1~3cm大のシルトブロックが全般に混入し共伴遺物はない。

以上の2~4・15・16号土壌は、平面は径100cm内の円形を基本とし、深さ15~20cmの浅い皿状を呈する点で共通する。

9号 (Ah 18) 土壌 (第37図) 2号住居跡の北西隅から約2m西に位置する。円形の浅い皿状を呈し底は若干の凹凸がある。埋土は黒色土に径0.5cm大のシルトブロックが散在する単層で遺物は共伴しない。

11号 (Aj 30) 土壌 (第37図 図版16) 2・3号溝状土壌の西に隣接し、東側が水道管理設溝で破壊されるが梢円形の浅い皿状で底は平坦である。埋土は上から黒色土、黒褐色土となり、下層にシルトを多く含む、数個の川原石を認めたが遺物は共伴しない。

17号 (Bg 77) 土壌 (第38図 図版17) Be62隅丸方形周溝No.4の南曲折部に隣接し、ほぼ円形の浅い皿状を呈し底は平坦で、埋土は黒褐色土の単層で底に細長い川原石1個がある。遺物は共伴しない。

19号 (Bh 77) 土壌 (第38図 図版16) 17号土壌の約2m西にあり、円形の浅い皿状を呈し、底は中央に若干低くなる。埋土は黒褐色土を主体にし、壁ぎわにシルト混りの黒褐色土がある。底に2個の川原石があり遺物は共伴しない。

以上の9・11・17・19号土壌は、平面は径115~135cm内外の円形で、深さ20cm内外規模の浅い皿状を呈する点で共通する。形態的には前述の2~4・15・16号土壌と類似するが規模が大き

くなり、2号土壙他を円形皿状土壙A類とするならば、9号土壙他はB類となる。

24号 (Cc 71) 土壙 (第38図) 8号住居跡の東約3mにあり、円形の皿状の呈し底はほぼ平坦で、埋土は黒褐色土、黒褐色土に焼土混り、暗褐色シルトの層に大別され、次の土器片が含まれる。A類壺5片、B類壺28片、C類壺2片、土師器甕15片、須恵器甕3片、縄文(地文)5片である。

22号 (Cb 74) 土壙 (第38図) 24号土壙の北東約3mにあり、北側が擾乱のため破壊されている。円形でやや深い皿状を呈し底は平坦である。埋土は記録なく不明であるが、B類壺1片・縄文(地文)片8点が出土した。

以上の24・22号土壙は、径160~175cm内外の円形、深さ15~30cm内外の皿状を呈し、前述の円形皿状土壙A・B類としたものより大きくC類とする。

5号 (Af 18) 土壙 (第38図 図版14) 2号住居跡の北約5mに位置し、平面円形で、断面の中半が奥に入る袋状を呈し、底は若干の凹凸がみられる。埋土は黒褐色土にシルトが全般に含む層と、壁ぎわに黑色土にシルトがまだら状に入る層がある。底から縄文(地文)1片が出土した。

8号 (Ag 21) 土壙 (第38図 図版14) 5号土壙の西約3.5mにあり、平面楕円形で断面は袋状に近い、北側開墾部が外に聞くが崩落の可能性もある。底は南西側に約50×90cmの不整円形の5cmほどの落ちこみがある。埋土は上から黑色土に径1~5cmの礫を若干含む層、黑色土に径1~2cmの礫を含む層、砂質シルト層、黑色土とシルトの混土層となり、遺物はない。

6号 (Af 21) 土壙 (第39図 図版14) 8号土壙の北約3mにあり、平面円形で断面は南東壁で崩落をみると、ビーカー状と推定される。底は若干の凹凸をみると、埋土は上から黑色土に大豆大の礫を含む層、黑色土に上層より小さい礫と炭化物を含む層、黑色土にシルトを含む層、黄褐色の砂に黑色土を含む層となる。埋土中より縄文(地文)23片と縄文後期初頭に相当する小形鉢(第42図88 図版31)が出土している。

以上の5・8・6号土壙は125~190cmの径をもつ円形もしくは楕円形で深さ66~87cm規模の袋状かビーカー状を呈する。

20号 (Bh 74) 土壙 (第39図 図版15) 19号土壙の西約1.5mにあり、平面円形で断面は壁中半が最も狭く、上は開墾部へ開き、下は奥に抉りこまれるフラスコ状を呈する。底は平坦で埋土は上から黒褐色土に極少の砂を含む層、明褐色シルトに黒褐色土がまだら状に入る層、黒褐色土にシルトがブロック状に入る層となり、遺物は共伴しない。この類のものは他にみない。

21号 (Ca 80) 土壙 (第39図 図版16) 19号土壙の南約7mにあり、平面楕円形もしくは隅丸方形を呈し断面は浅い皿状である。底は平坦で堅く東半部に径50×55cm、厚さ4cmの焼土があり現地火熱をうけている。焼土周辺に白粘土塊がみられ、縄文晩期大洞C<sub>2</sub>相当の小形鉢(第

### — 上平澤新田遺跡 —

42図89（図版31）が出土した。西端小ピットは遺構に属さないものであり、埋土は黒褐色土1層である。この土壤と同じ状況を示すものは本調査地では類がない。

26号（Ca 74）土壤（第39図 図版16）24号土壤の南東約3mにあり、平面楕円形で断面は浅い皿状を呈する。底は若干の凹凸をみる、埋土は上から黒褐色土に礫と炭化物を含む層、黒褐色土に粒状のシルトと礫を含む層、黒褐色土層となる。上二層は共通して礫と遺物を含む、A類環2片、B類環4片、C類環1片、土師器甕3片、繩文（地文）33片を数える。

12号（Bd 65）土壤（第40図 図版15）Be62隅丸方形周溝No.1北辺により切られる。平面円形で断面は開墳部へ若干開くが、ほぼ円筒状である。底は平坦で若干の湧水があり、埋土は黒褐色土1層で遺物は共伴しない。

18号（Bh 71）土壤（第40図 図版15）Be62隅丸方形周溝No.1南辺により切られる。形状、規模とも12号土壤に類似し、底に若干の湧水があり、埋土は上に黒褐色土があり、その下にシルトをまだら状に含む黒褐色土とシルトに黒褐色土をブロック状に含む層が不規則に入る。遺物の共伴はない。

12・18号土壤は形態、規模とも非常に類似する。

7号（Ag 12）土壤（第40図）2号住居跡東壁北半に隣接する。平面は不整楕円もしくは長方形を呈し壁はほぼ直に立つ、底は南半で径50×55cmで5cmの落ちこみがある。埋土は上から黑色土、砂質シルトをまだら状に含む黑色土に大別される。B類環（第42図90 図版30）1個体が出土した。

10号（Aj 12）土壤（第40図 図版17）2号住居跡の南に隣接し、Aj21掘立柱建物跡A・掘方と2号溝に切られる。平面は隅丸方形に近く、断面南北壁は直に近く、東西壁はやや外傾する。底は中央に若干低くなり埋土は黑色土、焼土混りのシルト、黑色土と不規則に入り遺物が混在し人為的なものと推察される。遺物はA類環2片、B類環5片、C類環1片、土師器甕14片、須恵器甕4片が出土した。

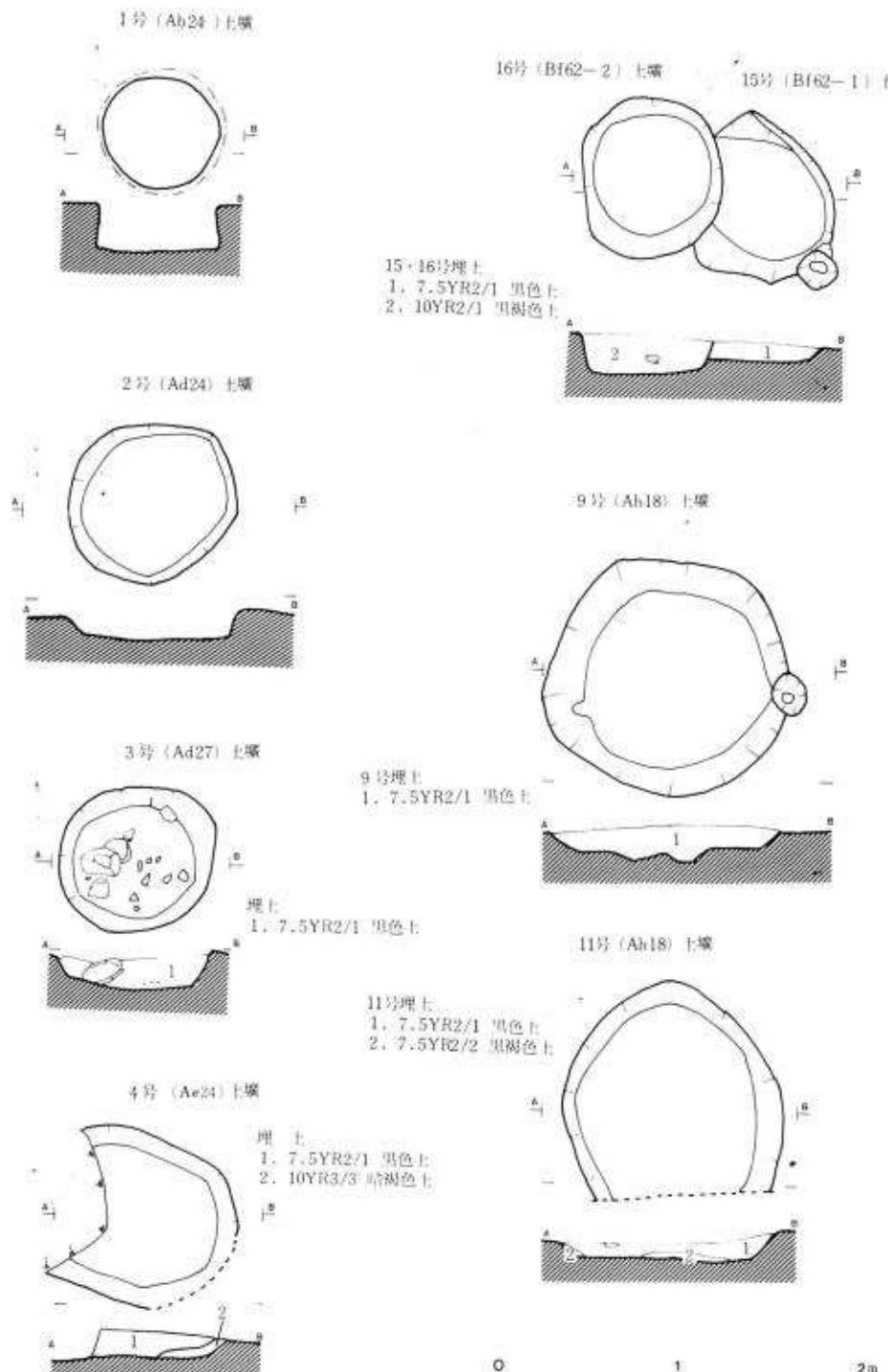
13号（Be 65）土壤（第40図 図版17）Be62隅丸方形周溝No.1の西辺に切られる。平面形は浅い皿状を呈する。埋土は暗褐色土と黒褐色土で、底面から完形のB・C類環各1点（第42図91・92 図版30）とC類環口縁部1点が出土した。形態は前出の円形皿状のA類に似るが、遺物からみて平安期の遺構であることは確実である。

14号（Bf 62）土壤（第40図）13号土壤の西に隣接し、Be62隅丸方形周溝No.1の西辺に切られる。円筒状の土壤で、埋土は黒褐色土と壁ぎわの暗褐色土に大別され、遺物はない。

23号（Cc 68）土壤（第41図 図版18）8号住居跡に切られる。方形の浅い皿状を呈し底はほぼ平坦で、細い炭化物のひろがりがあり、黒褐色土1層の埋土で遺物はない。

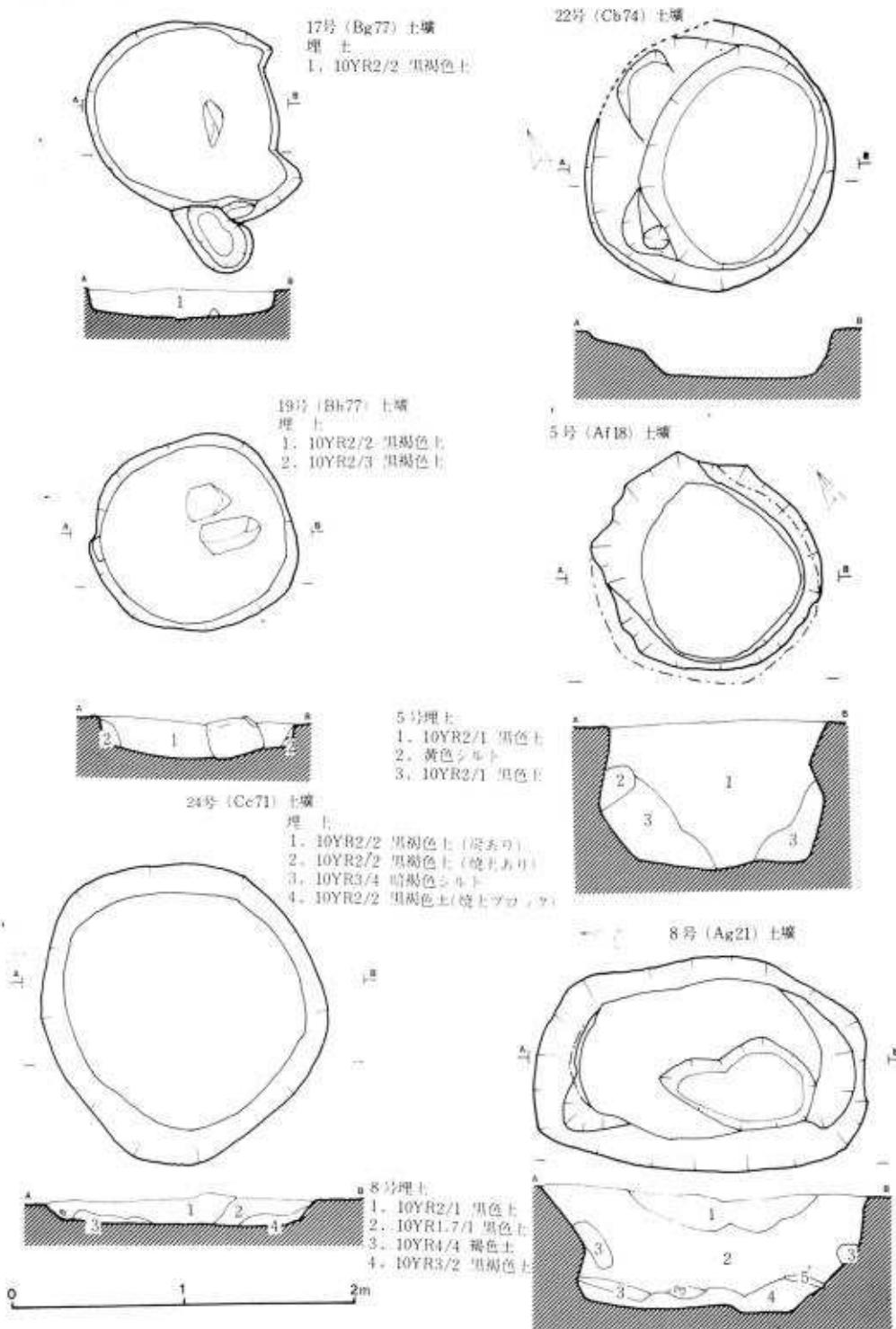
25号（Cc 74）土壤（第41図 図版18）24号土壤の東に隣接する。平面形は不整円形もしく

— 上平澤新田遺跡 —

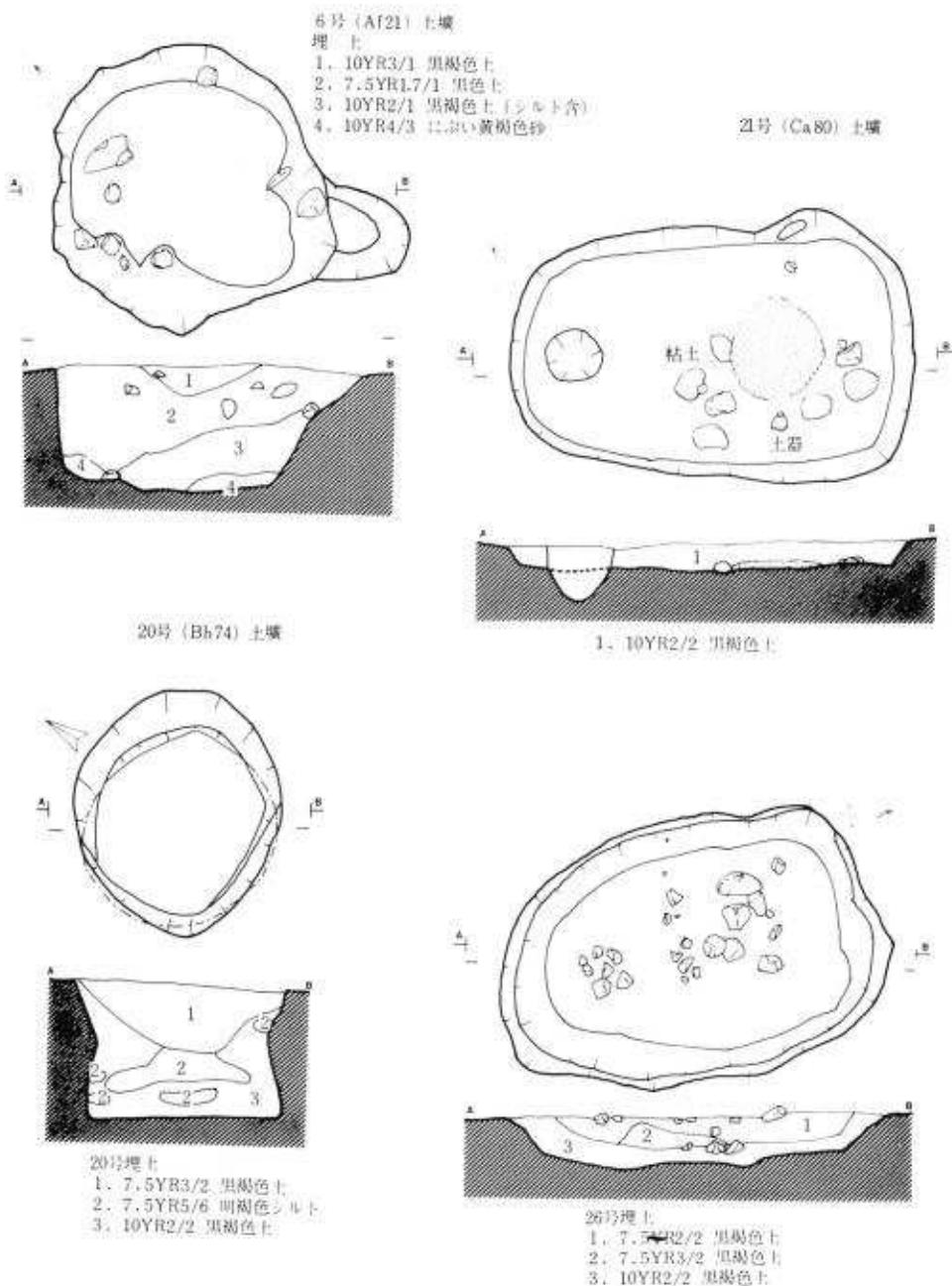


第37図 土 壤 実 測 図

— 上平澤新田遺跡 —

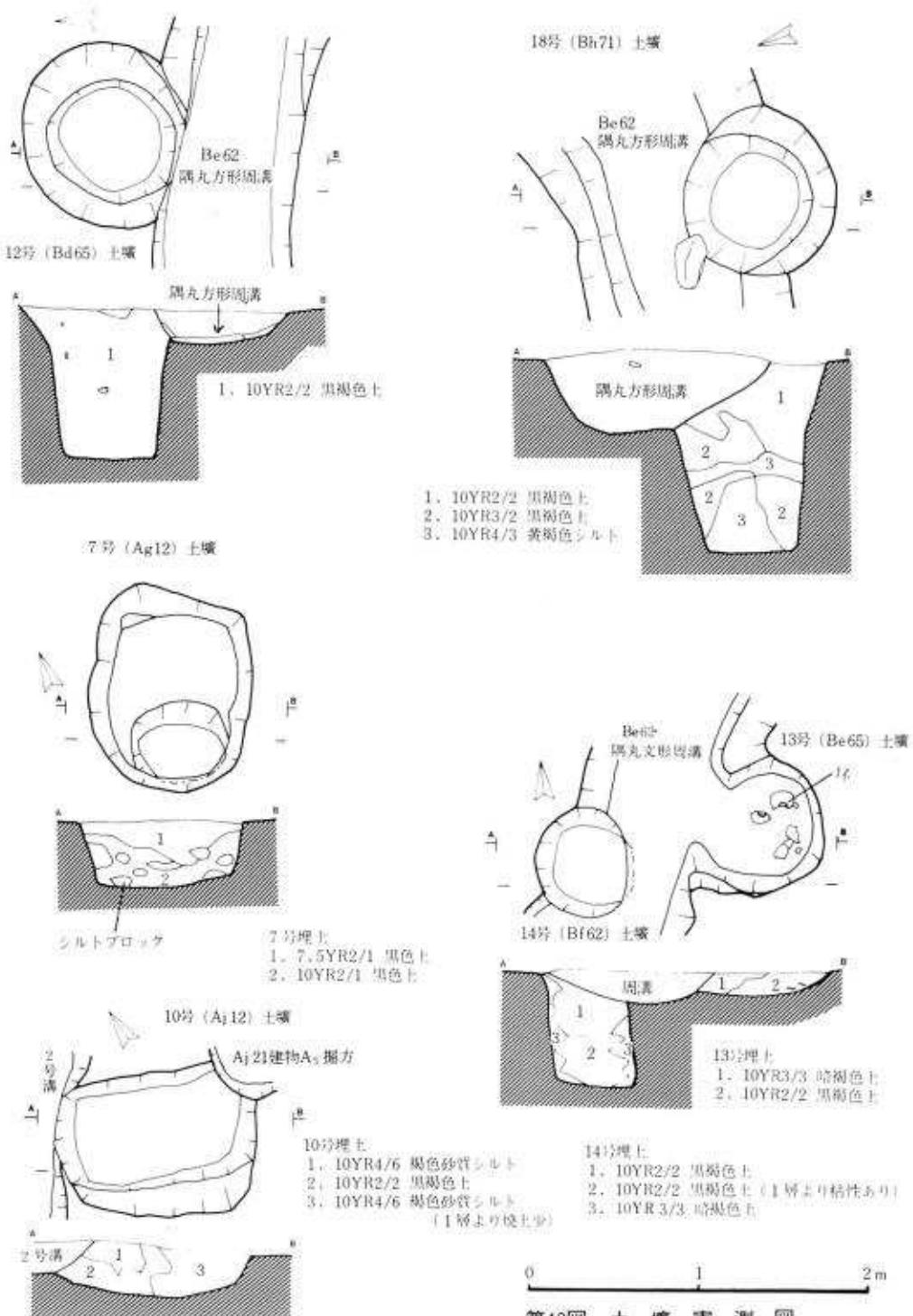


第38図 土 壤 実 測 図



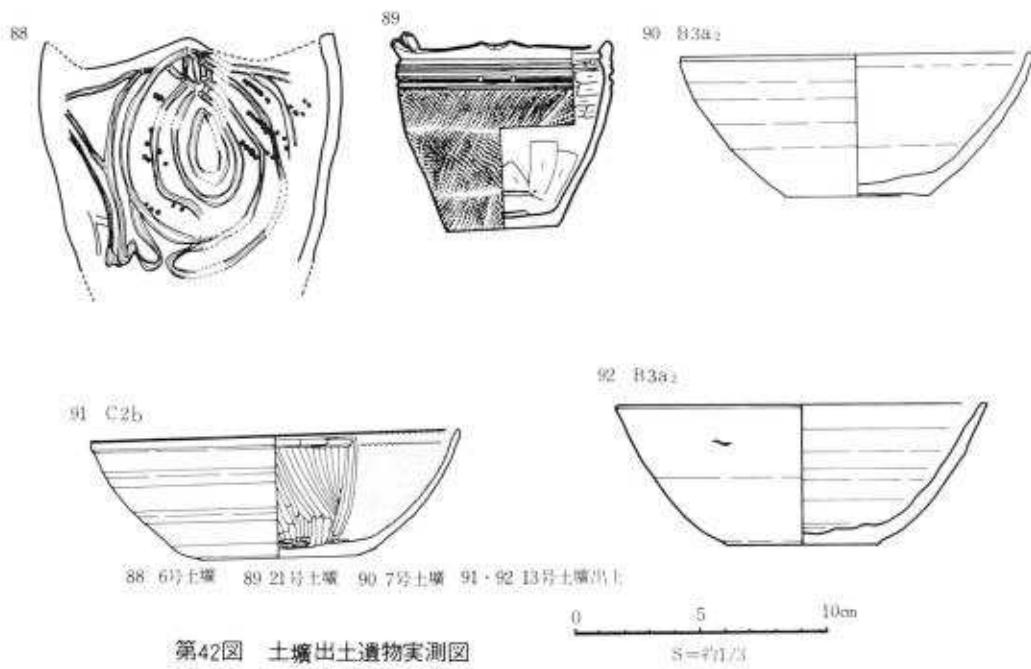
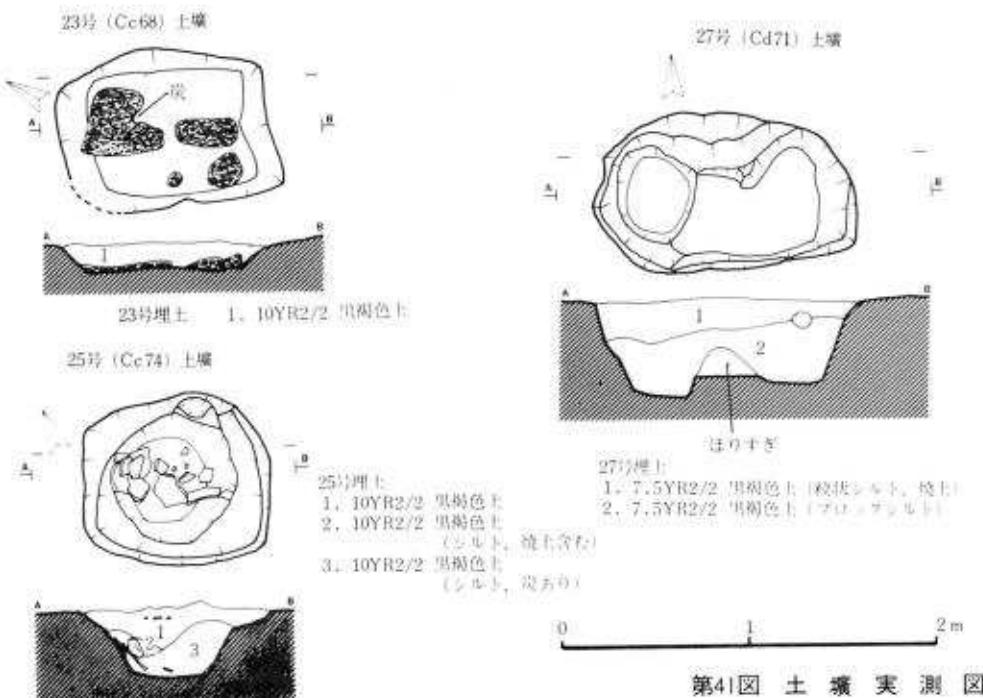
第39図 土 壤 実 測 図

— 上平澤新田遺跡 —



第40図 土 壤 実 測 図

— 上平澤新田遺跡 —



### — 上平澤新田遺跡 —

は方形に近く、断面形は開口部で外開きになる摺鉢形を呈する。埋土は黒褐色土に炭、焼土、シルトを含む層とシルトと炭を若干含む層に大別される。遺物の中に須恵器大甕片7点あり、外面平行叩き目に自然釉があり、内面青海波文の同一個体で、壁沿いに斜めに入っていた状況から埋設甕の残存の可能性がある。他にA類甕5片、B類甕14片、C類甕1片、土師器甕28片がある。

27号(Cd 71) 土壌 (第41図) 25号土壌の南に隣接する。平面楕円形であるが、本来双円状または2基の土壌であった可能性もある。断面は底中央が凸状になり摺鉢を二つ合せたようになる。埋土は上から黒褐色土に炭化物と粒状のシルトと焼土を若干含む層、黒褐色土に径1cmのシルトブロックを全体に含む層となる。遺物はA類甕1片、B類甕47片、土師器甕14片、縄文(地文)2片が出土した。

## 4. 炉跡と円形竪穴

### (1) 炉跡と周辺の小ピット

1号(Ca 71) 炉跡と小ピット (第43図 図版18) 7号住居跡の北東約1.5mで検出され径50×55cmの円形で焼土の厚さは4cmに達し、川原石による炉縁石が主に南半に遺存するが、本来は円形の石囲い炉である。時代を確定づける遺物はない。周辺に径20~50cmの円形の小ピットを認めるが炉跡との関係は不明である。

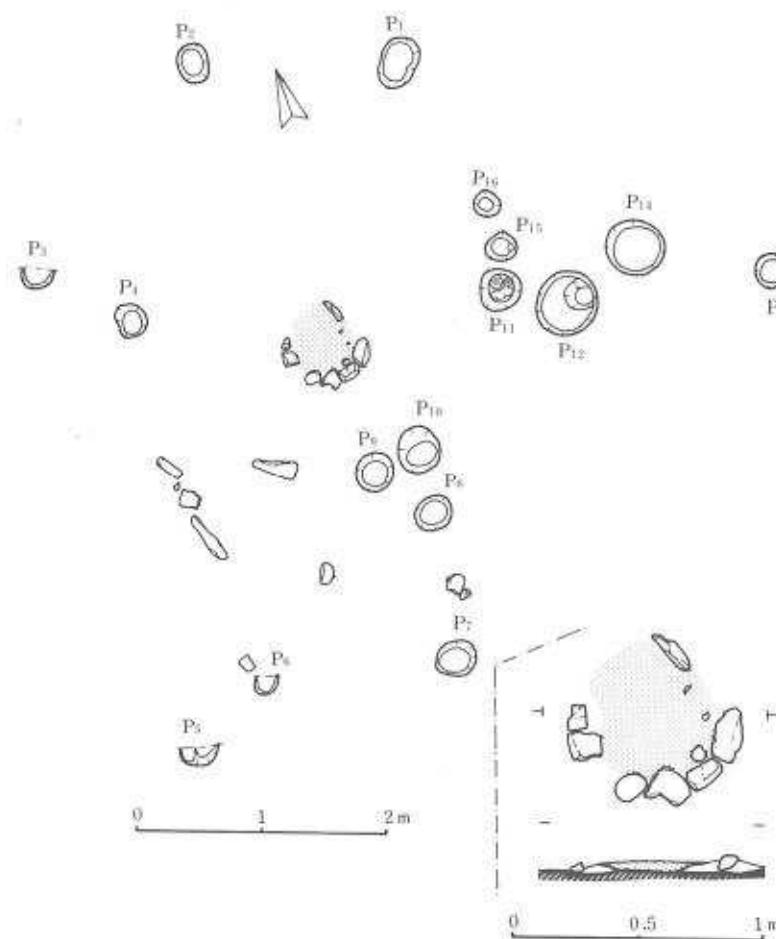
第4表 1号炉周辺小ピット計測値

	P <sub>1</sub>	P <sub>2</sub>	P <sub>3</sub>	P <sub>4</sub>	P <sub>5</sub>	P <sub>6</sub>	P <sub>7</sub>	P <sub>8</sub>	P <sub>9</sub>	P <sub>10</sub>	P <sub>11</sub>	P <sub>12</sub>	P <sub>13</sub>	P <sub>14</sub>	P <sub>15</sub>	P <sub>16</sub>
長径(cm)	40	30	30	25	35	20	30	30	30	35	35	50	25	50	25	20
深さ(cm)	14	16	13	12	9	7	32	9	23	29	11	29	12	17	16	14

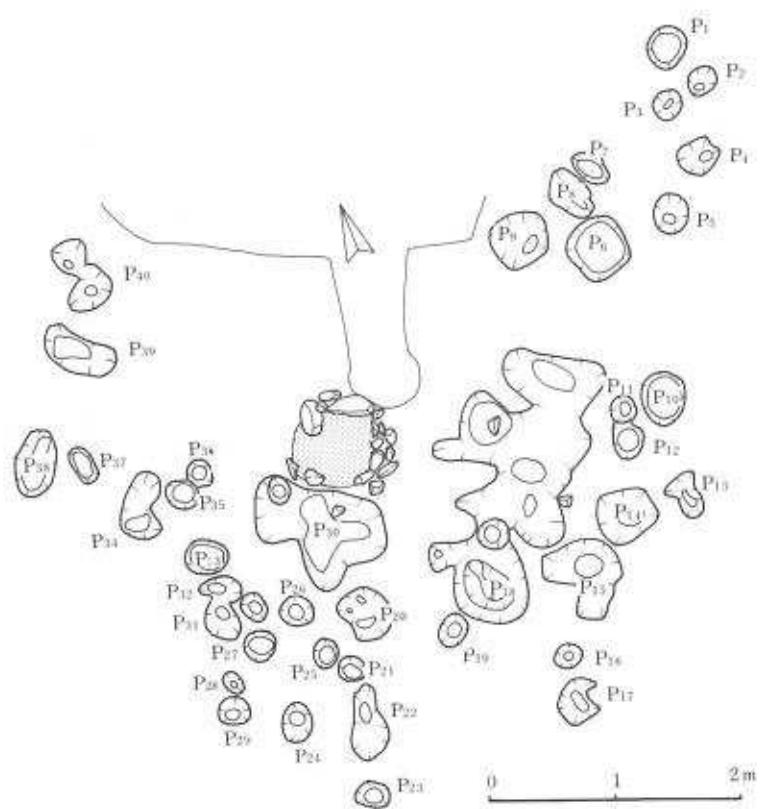
2号(Cb 68) 炉跡と小ピット (第44図 図版18) 7号住居跡のかまど煙出に接する。径55×60cmの円形で焼土の厚さは10cmあり、川原石による炉縁石が南西の一部を除き遺存する円形の石囲い炉である。時代を確定づける遺物はない。周辺に径20~60cmの円形または不整円形の小ピット40が検出された。これらの小ピットは炉跡を囲む様相を呈するが、不整形で浅いものが多く、炉跡と関連する柱穴等とする確証がない。

第5表 2号炉周辺小ピット計測値

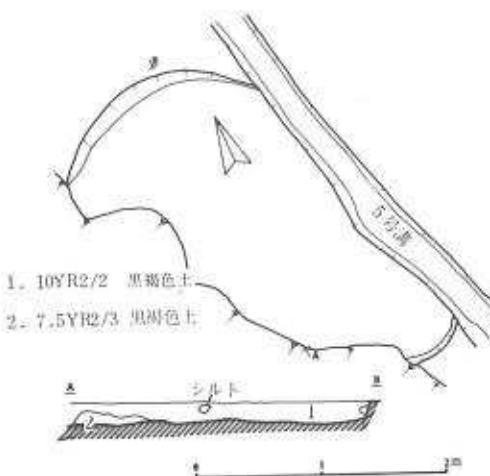
	P <sub>1</sub>	P <sub>2</sub>	P <sub>3</sub>	P <sub>4</sub>	P <sub>5</sub>	P <sub>6</sub>	P <sub>7</sub>	P <sub>8</sub>	P <sub>9</sub>	P <sub>10</sub>	P <sub>11</sub>	P <sub>12</sub>	P <sub>13</sub>	P <sub>14</sub>	P <sub>15</sub>	P <sub>16</sub>
長径(cm)	30	25	25	35	35	50	30	45	47	44	20	25	30	50	65	20
深さ(cm)	4	6	5	5	8	3	6	6	16	4	6	5	9	12	26	6
	P <sub>17</sub>	P <sub>18</sub>	P <sub>19</sub>	P <sub>20</sub>	P <sub>21</sub>	P <sub>22</sub>	P <sub>23</sub>	P <sub>24</sub>	P <sub>25</sub>	P <sub>26</sub>	P <sub>27</sub>	P <sub>28</sub>	P <sub>29</sub>	P <sub>30</sub>	P <sub>31</sub>	P <sub>32</sub>
長径(cm)	24	50	25	34	24	30	27	19	25	23	30	35	35	35	25	24
深さ(cm)	6	10	12	11	10	21	14	9	16	10	12	8	4	16	7	10



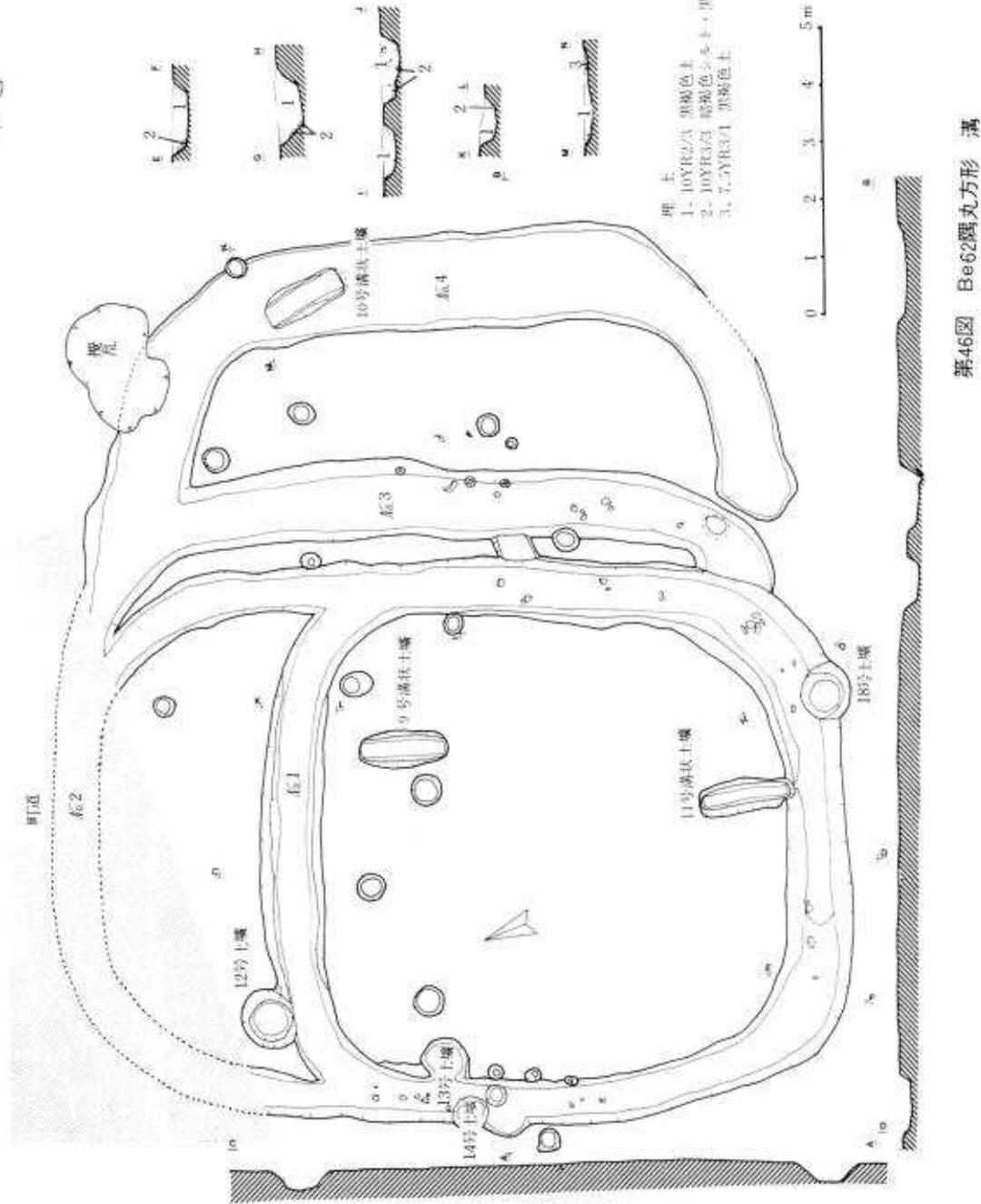
第43図 1号 (Ca71)・炉跡と小ビット



第44図 2号 (Cd68) 炉跡と小ビット



第45図 Bh56円形豎穴



(2) 円形豎穴

Bh56円形豎穴構 (第45図) 5号住居跡の北約7mにあり、東を5号構、西を段丘崖によって切られる。長径3.3mほどの楕円形と推察され深さ15cmで遺存する壁はほぼ直に近く立つ。床面は地山シルトで若干の凹凸を見る。柱穴その他の施設は全く認められない。埋土は極少の炭を含む黒褐色土が主体をなし、床直上的一部分に黒褐色土とシルトがまだら状に混る層がある。遺物の共伴はなく、時期、性格は不明である。

## 5. 隅丸方形周溝

Be62隅丸方形周溝 (第46図 図版19) 東西に走る町道のすぐ南で検出された。町道下に遺存する北張り出し部分については、道路敷を掘きくし遺構検出面でプランを確認したが、完掘精査は実施しなかった。

遺構は独立したもの1基と、それに付帯する張り出し状のもの3基がある。独立したものをBe62隅丸周溝No.1とし、北張り出しをNo.2、東張り出し西からNo.3・No.4とする。

No.1は隅丸方形を呈し、その形態からみて最初に構築されたものと推察できる。各辺中央の溝外縁間の測定値は、東西9.8m、南北10.25mであり、溝幅は上端0.9~1.1m、下端で0.6~0.8mほどで、深さは25~50cmを計り南辺が最も深くなる。溝に囲まれた中心部は平坦であり、本遺構と直接関連する施設はない。

No.2 No.1の東・西辺を北へ約2m延長した地点で東・西に湾曲し、北辺は1号に平行し約6mある。1号北辺中央外縁から2号北辺中央外縁まで3.6mを計る。東辺における溝幅は上端で0.8m、下端で0.5mあり、深さ11~16cmで北に向けて浅くなる。溝に囲まれる部分は平坦で関連する施設は認められない。

No.3 No.1・No.2の東辺に平行し東0.4mで9m走り、南端はNo.1南東隅に、北端はNo.2北東隅にそれぞれ連結する。溝幅は上端で1.2~1.3m、下端で0.8mあり、深さ25~35cmを計る。

No.4 No.3の東約2.4mをNo.1・No.3の東辺に平行し7m走り、南端はNo.3の南隅直前で切れるが本来連結するものと推察され、北端はNo.3北隅に連結する。内側は平坦で関連遺構はない。

平面長軸はNo.1で真北に対し、21°東に向き、他もほぼ同様である。

断面形はNo.1~No.3で逆台形状を呈し、No.4では浅い皿状である。総じてNo.1が深く、No.4は浅い。埋土は各溝大差なく、黒褐色土にシルトブロックを部分的に含む層を主体に、壁ぎわと底に暗褐色シルトと黒色土の混合土がみられる。なお、No.1・2の底にこぶし大の礫が散在する。埋土中の遺物はいずれも破片でB類壺142片、C類壺9片、土師器甕25片、須恵器甕(壺)3片、繩文(地文)88片が出土した。

他遺構との重複は、No.1で9・11号溝状土壙、12・13・14・18号土壙と、No.4で10号溝状土

壙とに認められるが、いずれも本遺構が新しい。特にB・C類の完形壙を共伴した13号土壙より新しいことは、No.1の構築年代の上限を示唆するものである。

なお、本遺構検出面にみられる円形小ピットは、径35~55cm、深さ6~15cmあり、しまりのないバサバサした黒褐色土の埋土をもち、No.4断面M-N(第46図)に示すように本遺構より新しいもので、時期、性格とも不明である。

## 6. 溝、その他

### (1) 溝

6本の溝が検出されたが、類似点は削平等によって完全遺存ではなく、埋土は黒褐色土の單層が主体であり、遺物の包含が少なく、断面は鍋底状を呈すること、重複する他遺構より新しいことである。以下、類似点を除いた各溝の概要を述べる(第47図)。

1号(Ae 21)溝 A区西側に位置し、北東から南西に走り段丘崖にぬける。現存の長さは21m、上幅30~50cm、深さ8~16cmで段丘崖近くが幅広で深い、南西端近く3・4号溝と直交するが新旧関係は不明である。1・3号住居跡、4号溝状土壙を切る。

2号(Ag 12)溝 1号溝に平行しその東25mを北東から南西へ12m走り消える。上幅70~90cm、深さ5~14cmある。南西端近くで3号溝と直交するが新旧関係は不明である。2号住居跡、10号土壙、Aj 21掘立柱建物跡A<sub>5</sub>掘方を切る。

3号(Aj 30-1)溝 A区南段丘崖に平行し、北西から南東に途切れながら22m走り消滅するが、北西は調査地外にのびる。上幅30cm、深さ4~8cmで北西寄りで1号溝、南東寄りで2号溝と直交する。2・5号溝状土壙、3号住居跡、Aj 21掘立柱建物跡A<sub>1</sub>・B<sub>5</sub>掘方を切る。

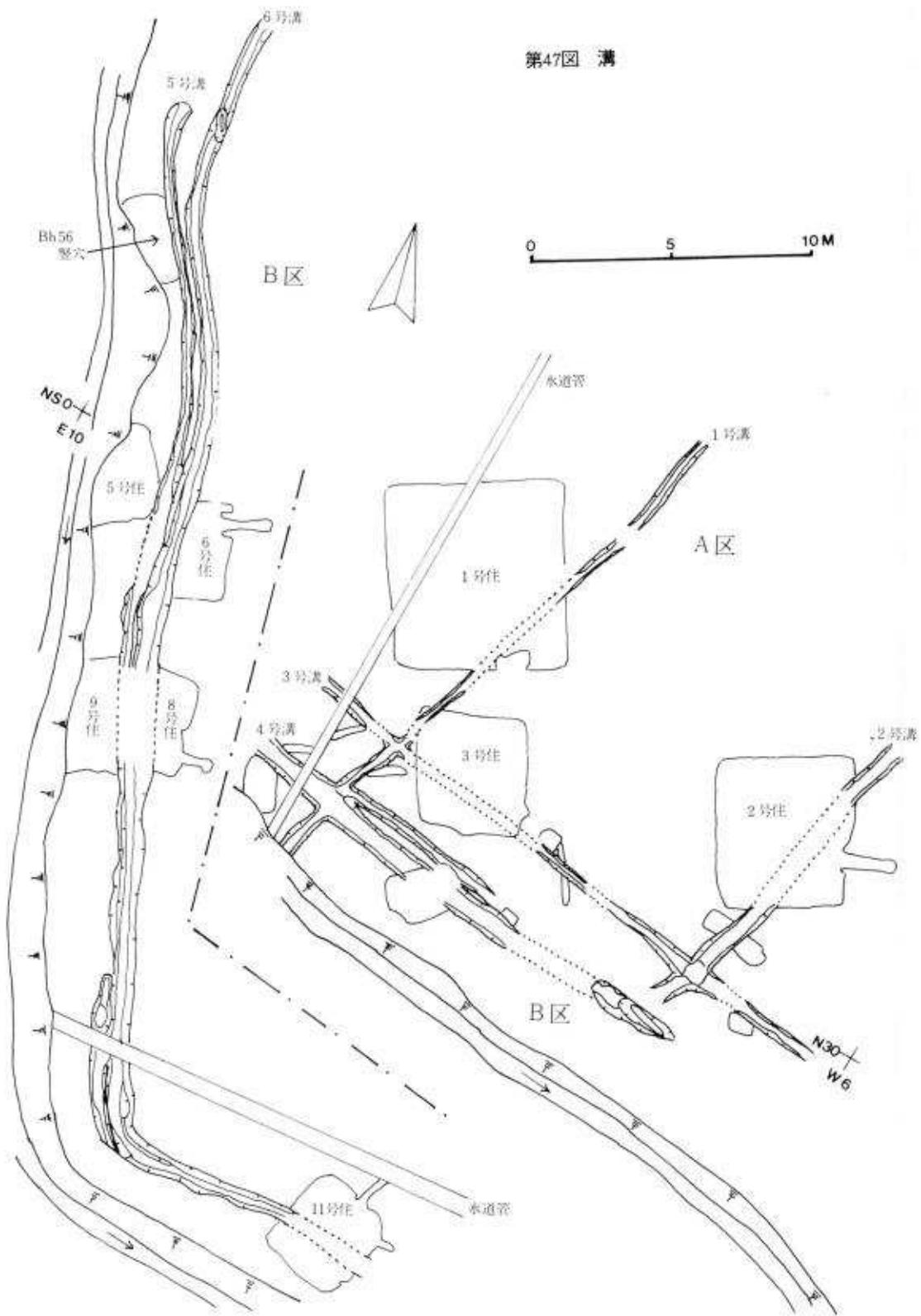
4号(Aj 30-2)溝 3号溝に平行し、その南3mを北西から南東に途切れながら18m走り消滅するが、北西は調査地外にのびる。上幅90cm、深さ5~8cmであり、北西寄りで1号溝と直交する。この地点から枝溝が出て南東に7m走って再合流する。3号溝状土壙、2・3号堅穴遺構、Aj 21掘立柱建物跡B<sub>1</sub>掘方を切る。

5号(Bg 56)溝 B-C区をほぼ南北に走る段丘崖に平行し、南へ22mの9号住居跡付近で6号と合流するものと推察される。上幅30~50cm、深さ15~18cmで、Bg 56円形窓穴、6・8・9号住居跡を切る。

6号(Be 56)溝 5号溝と同様に全く段丘崖に沿い走る。南に40m地点で東に折れ10mで調査地外に出る。前述のように途中5号溝と合流する。上幅45~80cm、深さ6~28cmで12号溝状土壙、6・8・9・11号住居跡を切る。

以上、各溝を概観したが、5・6号が比較的深く途切れはないが、北端は浅くなり削平を受けたものと推察する。段丘崖に沿う3・4号、5・6号が連結したこととも考えられるが確証は

第47図 溝



なく、溝相互の関連と時期差の有無、年代、性格は不明である。

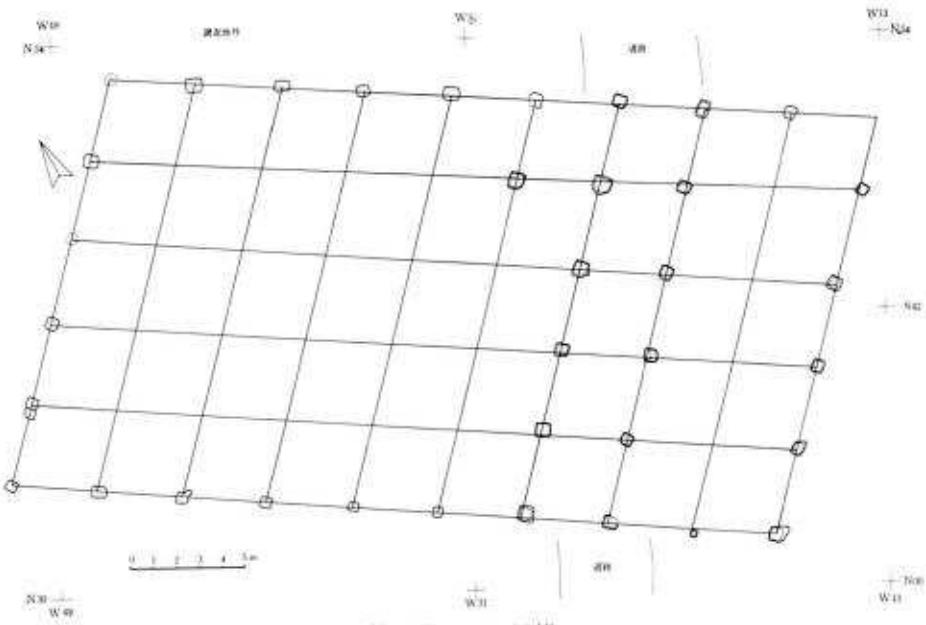
## (2) その他の遺構

**Ad30遺構** (第48図) A区西半から調査地外に及ぶ遺構で、東西33.2m、南北18.2mの平行四辺形の線上に並ぶ土壙と、それぞれに対する土壙を結ぶ線の交点にも土壙が認められる。南北列の東から2列めを除き、調査地外も同様と推察できる。すなわち、ゆがんだ基盤目状を呈するものである。重複関係では1号・3号住居跡、4号土壙より新しい。

間寸法と総長は南北方向で、北から3.7m+3.5m+3.8m+3.6m+3.6m=18.2m、東西方向で西から3.7m+3.7m+3.6m+3.8m+3.7m+3.6m+3.7m+3.7m+3.7m=33.2mであり、1間平均は南北で約3.6m、東西で約3.7mである。内角は北東と南西隅で80°、北西と南東隅で100°あり、南北列西側で真北に対し44°東を向く。

土壙は一辺50cm~80cmの方形で、深さ15cm以内の浅いものであり、埋土は粘性の少ない黒褐色土の単層で炭化物を含むものもある。現在のところ性格と時期については不明である。

なお、調査地外に及ぶ範囲確認調査は、土地所有者浅沼巖氏の好意によって部分掘りで実施した。



第48図 Ad30遺構

柱穴状の小ピット等 111の小ピットが主にA区とC区に集中して検出されたが、疑わしいものもあり、相互に関連し建物等の施設となり得るものは確認できない。

## 7. 表面採集等の遺物

耕作土および遺構検出面で取り上げた遺物を一括した。

### (1) 土器

数点を除き接合不可能な土器片で、第6表にまとめたとおりである。ここでは、実測可能な土器と、特徴の判別可能な土器片を抽出し概要を述べる。

**縄文時代晚期の土器** (第49図96  
図版31)

口縁近くの小破片で口唇部分を欠く。羊齒状文でにぶい橙色を呈する大洞BC式に相当すると推察する。

**弥生時代の土器** (第49図93~95、  
97~107 図版31)

**粗製鉢** 97 平口縁で無文、肩

表採等土器片集計表

種別 縄文(地文)	口・縁		体部	底 部			台	計	備考
	ロクロ 不使用	ロクロ 使 用		へつ 切	かわ 切	高脚 盤			
縄文(地文)			670					670	
褐文 晩期	8							8	
弥 生	27		51					78	
古 壕 A		62	41	22		2		127	
古 壕 B		79	150	31	15			275	
古 壕 C		13	33	4	1			51	
代 土師 瓢	19	11	60	3	13			106	
代 頭蓋(臺)		4	32	3			1	40	頭部1
	計	19	169	316	63	31	1	599	
合 計	54	169	1,037	63	31	1		1,355	

\* 実測可能土器は含まれない。

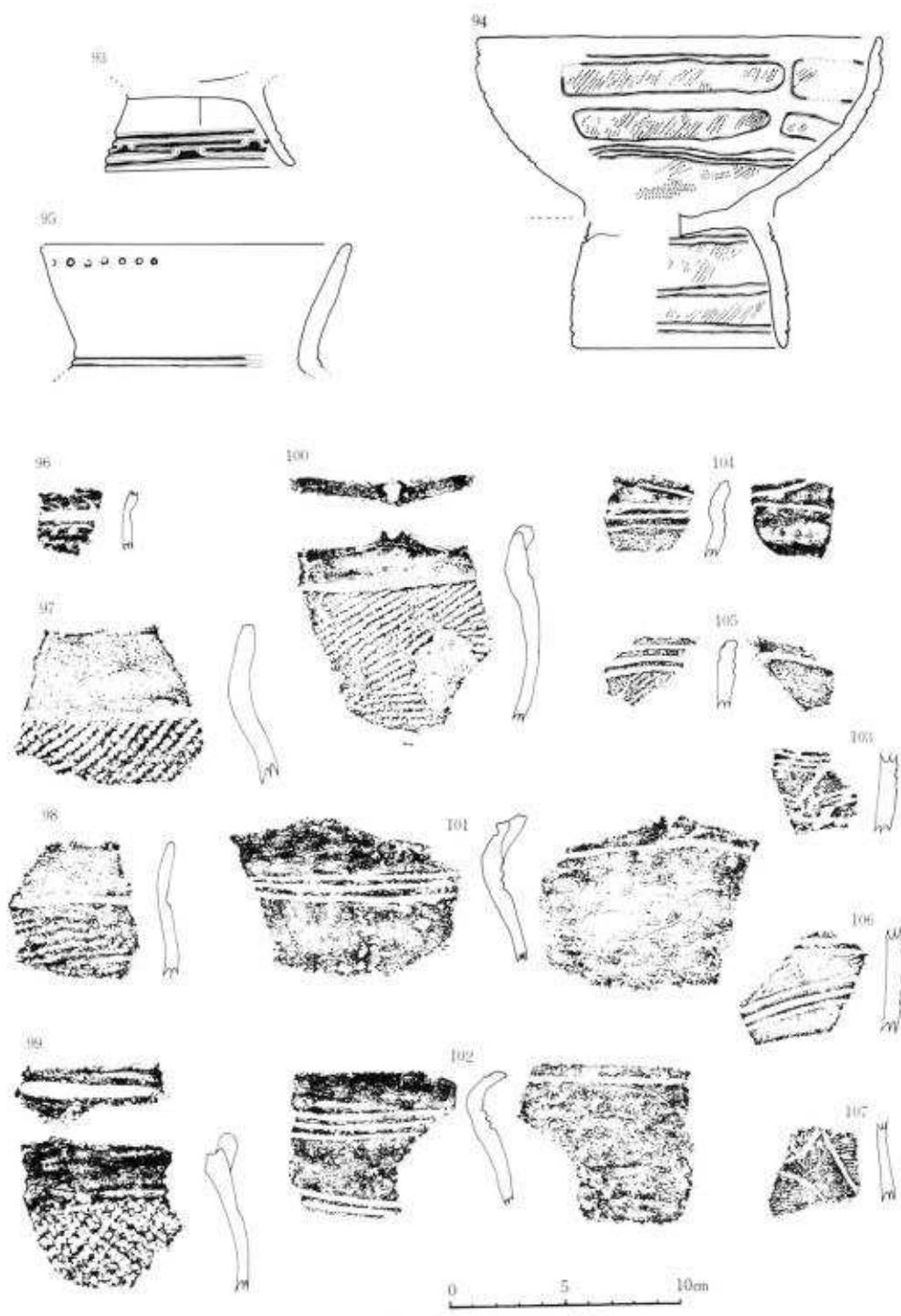
部以下に斜行縄文があり外面灰褐色、内面はにぶい橙色を呈する。98は97と類似するが肩部に1条の沈線がめぐる。99は口唇に小突起と1条の沈線をもちゆるい波状口縁、肩部まで無文で、以下斜行縄文があり外面灰褐色、内面はにぶい橙色を呈する。100 二又状の小突起を口唇につけるゆるい波状口縁で、肩部まで無文、以下斜行縄文で色調は99と類似する。

**台付鉢形土器** 93は脚部で高さ3.2cm径8.1cmで、脚下端に丸字状を呈する変形の工字文が施され、外面黒褐色、内面灰褐色を呈し、焼成・胎土とも良い。

94の土器は、体部にやや丸味をもって立ち上がり口縁は直口する。脚部はやや開きぎみに下がり中半から直になる。平口縁で内側に1条の沈線、外面は細い斜行縄文の地文に口縁から体下端へ沈線で区画される工字形の文が施され、その内帶には地文が残り、外帶は摩消される。文様帶下に2条の平行沈線をめぐらし、脚部上端、中半、下端にそれぞれ2条の平行沈線をめぐらす。口径17.6cm、体部高8.7cm、脚部の高さ5.2cmを計り、脚の径は9.3cmある。

外面色調はにぶい赤褐色、内面褐色でヘラミガキ調整があり、内外面とも黒斑と朱塗り痕が認められる。焼成普通・胎土は良い。A区にてブルドーザーによる耕作土除去の盛土中から発見した土器である。

**無地文に沈線施文の土器** 102は平口縁で内側に1条の沈線、外面肩部に3条の沈線をめぐらし、体部に2条(?)の平行沈線がある。内外面ともにぶい赤褐色を呈する。101 口唇に二又



第49図 表面採集等の遺物

S—約1/3

状の小突起をもつ波状口縁である点を除き102と類似する。103は3条の平行沈線を用いた変形工字文で褐灰色を呈する。

**縄文に沈線施文の土器 104~107** 縄文地文に1~3条の区画沈線をもち、区画の一方に地文を残し、他方は摩消する。104・105では口縁内側に沈線をめぐらし、特に104は口縁外側の沈線に対称している。灰褐色を主体とする色調である。

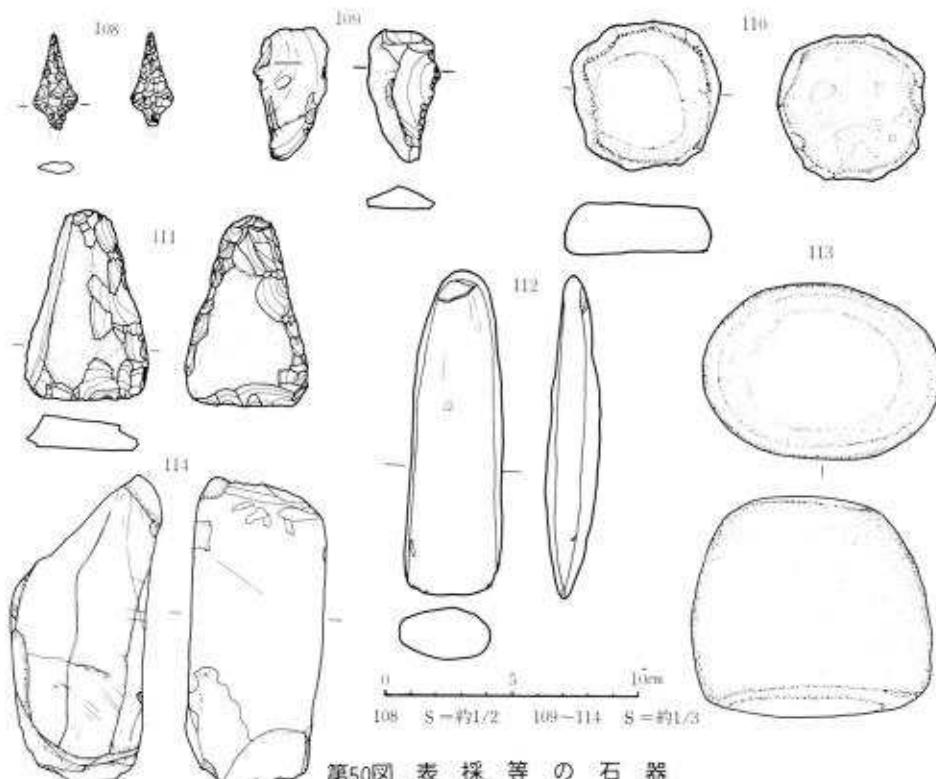
**壺 95** 壺の口縁部で、平口縁に沿い径0.3cm大の貫通孔がめぐり、頸部に鋭く刻まれた2条の平行沈線がある。推定口径10.7cm、残存する高さ5cm、にぶい橙色で朱塗り痕あり焼成、胎土は普通。

## (2) 石 器

住居跡・土壤出土のものも含め12点出土した。その種類および計測値は第6表に一括したようになる。それぞれの記述は割愛する。

第7表 表採等石器一覧表

目 名 類 別	項目	実測図 番号	図 版	高 大 長 幅 機 厚		重 量 (g)	材 質	備 考
				幅	機			
	石 球	108	32-108	2.50	1.35	0.30	2	チャート質粘板岩
22	球 品	109	32-109	5.40	2.80	0.90	12	硬質泥岩
16	-		32-115	10.00	2.80	0.90	22	硬質泥岩
5	円盤状石器		32-116	6.10	5.90	2.00	101	砂質燧灰岩
3	-	110	32-110	5.50	5.15	1.85	82	珪質燧灰岩
4	石塊状石器	111	32-111	7.50	4.65	1.70	55	硬質泥岩
2	-		32-117	9.95	3.90	2.15	95	粘板岩
9	槌 石		32-118	12.20	5.30	4.45	215	安山岩焼岩
11	石 砧	112	32-112	12.95	3.75	2.10	150	硬砂岩
6-60	薄 石	113	32-113	8.55	9.45	7.00	965	安山岩
8	-		32-119	8.80	8.40	7.35	855	石英安山岩
6	砾 石	114	32-114	12.10	5.20	5.15	510	流紋岩質燧灰岩



第50図 表採等の石器

## IV 考察とまとめ

### 1. 遺構

本調査地検出遺構は多岐にわたるが、豊穴住居跡、掘立柱建物、土壙、隅丸方形周溝についてその概要をまとめる。

#### (1) 豊穴住居跡

11棟の検出で、その内容を第8表にまとめた。

第8表 豊穴住居跡一覧表

番号	平面形	規格(東西×南北)	かさと 高さ	かまど			煙道		壁		柱 位置	柱 根元	柱基盤の 種類	住居跡の 変遷
				位置	規模(m)	燒成方法	形態	規模(m)	平底	厚さ(m)				
1号(A4-80)住	方 形	6.4×6.6	不 明	不 明	不 燒	不 烧	直 壁	直 壁	6.0	不 明	不 明	不 明	壁柱無設置	
2号(A4-15)住	方 形	5.1×4.7	高	東壁束手半高	5.0×8.0	燒成方法(已有)	直 壁	4.9×2.5	P1	10×3.5	1	1	壁柱無設置	
3号(A4-21)住	方 形	3.8×4.2	高	東壁束手調查	3.0×7.0	燒成方法(已有)	斜 壁	不 壁	11.0	15.7	10×3.0	10×1.0	壁柱無設置	
4号(A4-27)住	推定方形	5.2×6.7	不 明	不 明	不 烧	不 烧	直 壁	不 壁	6.0	不 明	不 明	不 明	不 明	
5号(B4-10)住	推定方形	6.7×3.0	不 明	不 明	不 烧	不 烧	直 壁	不 壁	6.0	不 明	不 明	2	北壁より移	
6号(C4-62)住	推定方形	3.8×3.5	高	東壁束手調查	3.0×2.5	燒成方法(已有)	直 壁	3.0×1.0	P1	40×3.0	1	1	北壁より移	
7号(C4-88)住	方 形	2.8×2.6	南北 向	東壁束手調查	2.6×5.0	燒成方法(已有)	直 壁	2.3×0.8	P1	50×3.0	1	1	北壁より移	
8号(C4-89-1)住	推定方形	3.0×3.5	南北 向	東壁束手調查	3.0×3.5	燒成方法(已有)	直 壁	2.0×0.5	P1	40×4.0	1	1	北壁より移	
9号(C4-89-2)住	推定方形	3.2×3.5	南北 向	東壁束手半高	3.0×3.5	燒成方法(已有)	直 壁	2.0×0.5	内 P1	40×3.0	1	1	北壁より移	
10号(C4-90)住	方 形	2.2×2.4	南北 向	東壁束手調查	2.0×3.5	焼け付式	直 壁	2.5×1.0	内 P1	32×4.0	1	1	北壁より移	
11号(C4-70)住(1期)	方 形	2.8×3.1	南北 向	束手半高	2.6×3.0	燒成方法(已有)	直 壁	1.8×1.5	P1	40×3.5	1	1	11号 1期 1月始	
11号(C4-70)住(2期)	方 形	3.2×3.4	南北 向	束手半高	2.6×3.0	燒成方法(已有)	直 壁	2.3×1.5	不 烧	不 明	2	2	11号 1期 2月終	

重複 住居跡相互に重複、または増改築が認められるものは5棟で、6号住、旧→5号住、新以下同様に9号住→8号住、11号住1期→2期となる。

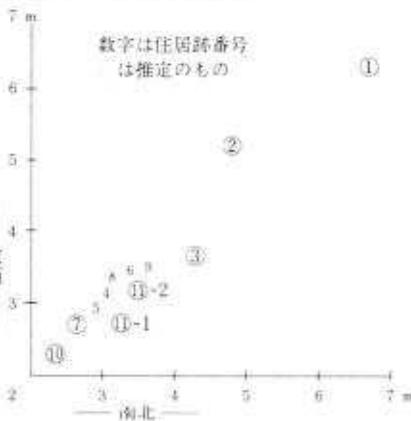
平面形・規模 方形で著しい長方形はない。下表に示すように一辺3~4m近似に集中するが、1・2号が大型になり3号が続く、このことは後述する特殊性と関連すると考える。

床 地表面をそのまま利用するものと、一択掘りこんだ後、黒色土とシルトの混土を埋め固めて構築するものとがある。後者は5・7・8・9・10・11号にみられ、1号は不明である。

柱穴 明確に認められるのは1・2号住居跡のみで、他は確認できなかった。

かまと 1・4・5・9号については不明である。

第9表 住居跡の規模



## — 上平澤新田遺跡 —

2基以上をもつものは8号住と11号住2期で、前者は東から南へ、後者は東から北と移る。

全体的には東壁に施設されるものが6基、2・3・6・8(No.1)・11号1期・2期の各住居跡である。一方、南壁施設は3基で7・8(No.2)・10号にあり、北壁には11号2期住(No.1)があり東壁施設が多い。かまど本体は、黒色土とシルトの混土を貼り固めたものが主体で、2・3・6・11号住(No.1)のように、川原石を芯材として用いたものもある。煙道は溝状に掘りこみ、円形プランの煙出しをもつが、11号1期住ではトンネル式のものを認めた。

その他の施設 かまどに接し貯蔵穴を明確に認めたのは、2・6号住居跡である。1号住居跡でも南東隅にそれらしき土色相の変化部分を認めたが確証はない。

特殊な施設として、1・2号住の壁材施設溝で、板材を矢板状に壁沿いに施設したもので、1号住居跡に現存した炭化材の状況がそれを示している。様相は異なるが、3号住居跡にみられる壁沿いの小穴の連続も、浅いけれども壁施設に結びつく可能性があり、これと同様の施設が、志波城とされる太田方八丁遺跡Sj74住で知見できる。<sup>(1)</sup>

### 1号・2号・3号住居跡について

検出住居跡の概要をまとめたが、更に1～3号住居跡について若干述べる。

前述のように、他住居跡より規模が大きく、とりわけ、1・2号住居跡では抜きん出る。壁材施設溝および柱穴の存在と、その位置もプランの中の南寄りで、南列が壁に沿う点も全く同じである。これと同様の柱穴のあり方を知見するものに、太田方八丁遺跡のRh06住があり、円面鏡が出土、周溝をもつ<sup>(2)</sup>6×6.3mの住居跡で1号住居跡とほぼ同規模である。

また、2号住居跡は炭化材と焼土のあり方から、焼失後整理されたものと推察され、遺存する遺物も破片が多い。一方、1号住居跡は焼失後そのまま廃棄されたもので、遺存する遺物はほとんど復元可能の個体で量的にも多く、いわゆる須恵器の壺、台付壺、甕、大形甕、長頸壺、土師器甕があり、セット関係を把握できる資料であるし、鉄斧、萬年通寶、炭化米も特筆すべき遺物である。2号住居跡では底部が丸く砲弾形で、外面に平行叩き目文と内面はあて工具痕のある土師器甕としたものである。秋田県では、これに類する甕は能代營擬定地、私田柵、秋田城など古代城柵関係遺跡で出土例があるとされるものであり、3号住居跡の甕と双耳壺を含め、1～3号住居跡は遺物面でも特性があって、近隣するAj27掘立柱建物との関連も合せ興味を呼ぶあり方を呈する。

1号住居跡の炭化材の中で崩落した上材の丸太は、トネリコ科のトネリコが用いられ、敷板材は松、その他周辺に植生する立木が使用されている。<sup>(3)</sup>

なお、1号住居跡の炭化材はC<sub>14</sub>測定で、半減期5730年（カッコ内はLibby値5568年）にもとづく計算で、西暦1950年よりさかのばる年数（Years B.P.）として、915±110Y.B.P. (890±105Y.B.P.) の結果が示され、同様に2号住居跡床面落ちこみ中の炭は、1360±75Y.B.P. (1320

±75 Y.B.P.)<sup>5)</sup>となり、前者では西暦1035±110、後者で西暦590±75の年代が与えられ、誤差範囲に含まれる確率は約70%で、この範囲を2倍に拡げると95%となるとされる。参考資料として挙げておく。

### (2) 掘立柱建物

Aj 27掘立柱建物 東西4間×南北2間の東西棟で、段丘崖に面する南面を除き廻は認められず、南面は不明である。現尺換算で桁行30尺、梁行21尺、それぞれ7.5尺と10.5尺の柱間寸法の建物と推察する。

方形の柱掘方には、C<sub>1</sub>掘方を除き柱あたりが認められ、上部加工の有無は不明であるが径35cm前後の丸太が柱の材料であったとみられる。

掘方の埋土から、A・B・C類環片、土師器甕片、須恵器甕片が出土し、同様の遺物を出土した10号土壙をA<sub>5</sub>掘方が切っている。

以上から、恣意的ではあるが、建物の構造は知見する古代掘立柱建物と同様であり、遺物関係においても古代遺構に比定できるものであり、検出された住居跡と関連するものとみたい。ただし、配置上から2号住居跡との関連は考えがたい。

### (3) 土 溝

溝状土壙 14基を検出した。いわゆる「溝状遺構」・「V字状溝」・「V字形溝状遺構」・「陥し穴状遺構」・「T(トラップ)ピット」等の呼ばれ方をする土壙である。

県内では、今まで約50遺跡から800基余の検出があるとされる。その形態も幾つに分類され、更に配置等によってその機能を性格づけられるものと考えるが、その作業は試みなかった。しかし、この類の土壙に対する性格づけとして、けものの陥穴説があり、縄文中期末～後期初頭に属するものとされている。<sup>6)</sup>

円形状の土壙他 27基を大別すると円形浅皿状、袋状もしくはフラスコ状を呈する比較的大形のもの、円筒状、不整縁円もしくは隅丸方形に近く浅いもの等がある。

これらの機能、性格は明確でない。6号土壙は縄文後期の鉢を出土し、21号土壙は、不整縁円もしくは隅丸方形の浅い土壙であるが、現地火焼の焼土ももち、周辺の粘土塊と縄文晩期大洞C<sub>2</sub>相当の小形鉢を出土し、他土壙とは異なる様相である。

また、埋土中の遺物からみて、7・10・13・22・24～27号土壙は平安期もしくは以降に比定できる。これらの土壙中、22・24～27号は集中して位置し、25号土壙は須恵器の甕が埋設してあったことも想定される。13号土壙は、環B・C類の完形品各1個体を伴出し、周辺の小ピットと散在した焼土から削平された竪穴住居跡と関連したものとも推定される。

## — 上平澤新田遺跡 —

他の土壙は、年代を決定し得る資料を伴なわないが、形態等から大筋古代以前のものと考えられる。

### (4) 隅丸方形周溝

Be62隅丸方形周溝No.1～No.4としたもので、No.1を核にその後、順次、北と東に張り出されたものである。周溝内側は平坦で関連施設は認められない。

水沢市南矢中遺跡で「方形溝状遺構」とした類似遺構がある。若干その概要を述べると、「完全に独立するCa15は、東西幅9.2m、南北幅1.1m、溝幅1.2m、深さ0.33mの規模である。連続するものは二つにわけられ、7基と5基とで方形溝の一辺を共有している。いずれも東西方向に連なり、上部構造と思われるものは検出されず、10～11世紀と思われる堅穴住居跡を壊して構築されている」。<sup>(9)</sup>

詳細は報告書をまつとして、以上の状況は、Ca15において本調査地のNo.1と規模がほぼ同じである。また連続する様相も基本的に類似する点が認められるし、年代的にも、No.1が完形のB・C類環を伴出した13号土壙を切っており共通する。すなわち、少なくとも平安期もしくはそれ以降に比定して大過ないものであるが、下限については決定資料に欠ける。

性格についても、今後類似遺構の点検と、更に多くの例をまちたいと思うが、現在の知見では水路的な性格は考えられず、年代的に古墳の周溝になり得ない。むしろ、何らかの領域を区画する性格をもつものではなかろうか。

- 註 (1) 昭和52年度 太田方八丁遺跡現地説明会資料 第1回 岩手県教育委員会  
(2) 前出 (1)  
(3) 小松正夫 「秋田県の土師器について」考古風土記 第2号 1977・4  
(4) 吉田栄一氏 (岩手大学) の鑑定と現地教示による。  
(5) 社団法人 日本アイソトープ協会による測定結果報告書  
(6) 岩手県文化財調査報告書 第31集 東北縦貫自動車道関係埋蔵文化財調査報告書 I 高柳遺跡  
(7) 今村啓爾 「縄文時代の階段と民族誌上の事例の比較」 物質文化 27  
(8) 岩手県埋文センター文化財調査報告書 第2集 都南村 湯沢遺跡 (昭和52年度)  
(9) 昭和50年度 南矢中遺跡調査実績報告書 岩手県教育委員会

## 2. 出土遺物

### (1) 縄文時代の土器

縄文後期の土器 6号土壙出土の小形鉢 (第42図88 図版31) の破片である。ゆるい波状口縁で縄文地文に沈線による核果状文に似た施文が施され、施文様式から後期初頭に比定される推察される。

縄文晩期の土器 21号土壙出土の小形鉢（第42図89 図版31）は、口唇に4個の二又状小突起を対に旋し1個がより大きい。平口縁に沿い3条の平行沈線をめぐらし、突起に相対する位置に2本の区切りがある。晩期C<sub>2</sub>に比定されると推察する。

他に、表面採集土器片中に晩期BCに推察したものが1点ある。

### (2) 弥生時代の土器

弥生時代中期の土器 直接遺構と共に伴するものはない。破片が大半で粗製と精製土器があり、器形は台付鉢形土器、壺、浅鉢、深鉢などが推察される。

口縁は平口縁または波状口縁を呈し、外面文様は無地文もしくは縄文地文に平行沈線を施すもの、変形工字文、丸形文が見られる。

特徴的なものは、平口縁に沿い貫通孔をめぐらす壺の口縁（第49図95 図版31）であり、台付鉢形土器（第49図94 図版31）とともに朱塗り痕をもつことも特記される。

総じて、「谷起島式土器、大泉式土器、山王Ⅲ層式、福浦島下層式土器と併行もしくは若干前後する、その時期として弥生式時代中期前半代が想定される」としている大明神遺跡出土の弥生式土器に共通する要素を多く含み、また、94は宮城県寺下囲の形式に類似することから、本調査地出土の土器は弥生時代中期初頭から中葉に比定されるものと思う。<sup>1)</sup><sup>2)</sup>

### (3) 平安時代の土器

#### 坏の分類

竪穴住居跡を中心に遺構出土の坏は、一部埋土中のものも含み、すべてロクロ使用のものであるが内容は単一でなく、焼成、切り離し技法と調整、形態によって、以下のように分けられる。

焼成は、次の三つに大別される。（下羽場遺跡の分類を基本とした）<sup>3)</sup>

A類 還元焰焼成のもの くすべ色を呈する、いわゆる須恵器と呼ばれる硬質のもの。

B類 酸化焰焼成のもの 赤褐色、黄橙等の色調で、A類より軟質で内外面とも器面調整を施さない。一部黒斑を有するものも含む。赤褐色、土師質土器等と呼ばれるものに比定される一群である。

C類 酸化焰焼成で内面に黒色処理を施すもの 赤褐色、黄橙等の色調で、一般的にB類より軟質で内面にヘラミガキ等の調整のある、いわゆる内黒土師器と呼ばれるものである。

以上の焼成分類に、切り離し技法、再調整の有無、形態からみる。なお、形態については、個々の土器によって法量差があり、体部、口縁形態にも多少の差はあるが、特徴的なもの以外

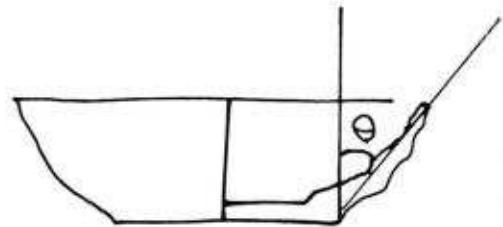
## — 上平澤新田遺跡 —

は、口径に対する底径と器高の指數値（以下、底径指數、器高指數という）と外傾角度（測点は第51図）に主眼をおいた。

### A類（還元焰焼成）

#### A 1類 回転ヘラ切り無調整

- a 体部が直線的に外傾し底径指數が大きい。
- b<sub>1</sub> 体部がやや外反ぎみに外傾する。
- b<sub>2</sub> b<sub>1</sub>より器形が大きく、口径15cm以上。
- c 体部がやや丸味ももって立ち、底径指數が著しく小さい。口径15cm以上。



第51図

b<sub>1</sub>・b<sub>2</sub>は基本的には同形態である。

#### A 2類 回転糸切り無調整

- a A 1c類に類似する形態、口径15cm近い。
- b やや丸味をもって立ち、口縁部はわずかに外反する。
- c やや丸味をもって立ち、口縁部は外反し内側に稜をもつ。
- d<sub>1</sub> ほぼ直線的に外傾し、口縁部がわずかに外反するもの。
- d<sub>2</sub> b<sub>1</sub>より器形が大きく、口径15cm以上。

d<sub>1</sub>・d<sub>2</sub>は基本的には同形態である。

A類の中で、A1c・A2a・d<sub>2</sub>類は焼成、胎土、口径数値等で類似する点がある。このことについて後述する。

### B類（酸化焰焼成）

#### B 1類切り離し技法不明、底部手持ヘラケズリ等の調整を施す。

- a 体下端で丸味をもち、上は直線的に立ち肩に段をもち口縁はやや外反する。底径指數が小さく、器高が高く鉢に近い形である。
- b やや丸味のある立ち上がりで、器高が高く口径15cm以上。

#### B 2類 回転ヘラ切り、底部と体部下端に手持ヘラケズリ、直線的に外傾し底径と器高指數が大きく、外傾角度が著しく小さい。

#### B 3類 回転糸切り無調整

- a<sub>1</sub> やや丸味をもち立ち上がり、一般的に器高が高く外傾角度が小さい。
- a<sub>2</sub> 器形がa<sub>1</sub>より小さく、器高数値が大きくなる。
- b<sub>1</sub> 丸味をもって立ち上がりゆがみがある。口縁部が比較的大きく外反する。一般的に軽質で胎土は密である。

- b<sub>2</sub> 器形がb<sub>1</sub>より大きく口径14cm以上。  
 c 直線的に外傾し底径指数が小さい。  
 a<sub>1</sub>・b<sub>2</sub>・b<sub>1</sub>・b<sub>2</sub>は基本的には同形態である。

**B 4類 摩滅のため、切り離し技法不明**

- a 形態、法量ともB1b類と類似する。  
 b 直線的に外傾し、肩に段をもって口縁部が外反する。指鉢形を呈し口径15cm以上。

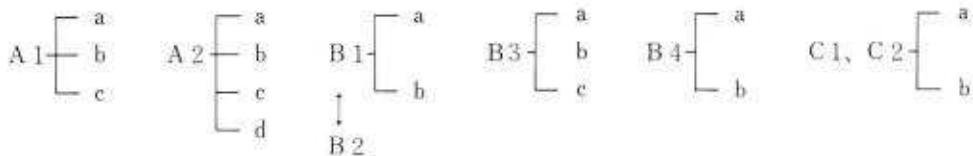
**C類 (酸化焰焼成、黒色処理)**

**C 1類 切り離し技法不明 底部調整(技法は摩滅のため不明)**、体部は丸味をもって立ち上がり、底径指数、器高が高く、外傾角度が著しく小さい。

**C 2類 回転糸切り無調整**

- a 体部は直線的に外傾し、底径・器高指数とも大きく外傾角度が著しく小さい。  
 b 体部は丸味をもって立ち上がる。

以上、細分化に過ぎたが、整理すると次のようなようになろう。



**計数上からみた壺 A・B・C類**

**A・B・C類の比率と傾向**

復元、実測可能な個体数44の中で、A類21個体、B類19個体、C類4個体あり、それぞれ48%、43%、9%の数値を得る。

しかし、A類の15個体は1号住居跡出土の壺であり、それを除くと、総個体数29の中でA類21%、B類65%、C類14%となり、B類の比率が大半をしめる。このことは、第6・14・15表で示した表様、住居跡床面、埋土の壺集計と考え合わせると更に明瞭である。

すなわち、本調査地の壺形土器は、B類 > A類 > C類となり、とりわけB類が多くC類は少ない傾向をもっている。

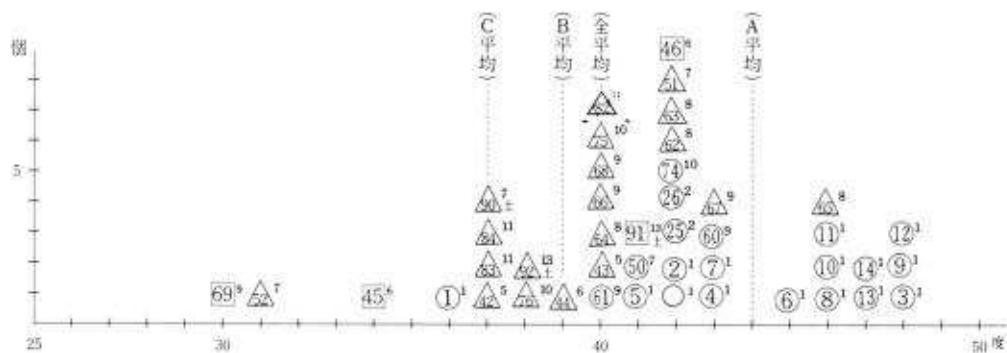
**切り離し、調整技法の比率**

A 1類としたものは、A類総数21個体中の5個体で24%、76%はA 2類である。A 1類は1・2号住居跡からの出土である。

B 1・2類は、摩滅不明のB 4類を除いたB類総数17個体中の3個体で18%、82%はB 3類である。B 1・2類は5・7・8号住居跡から各1個体の出土である。

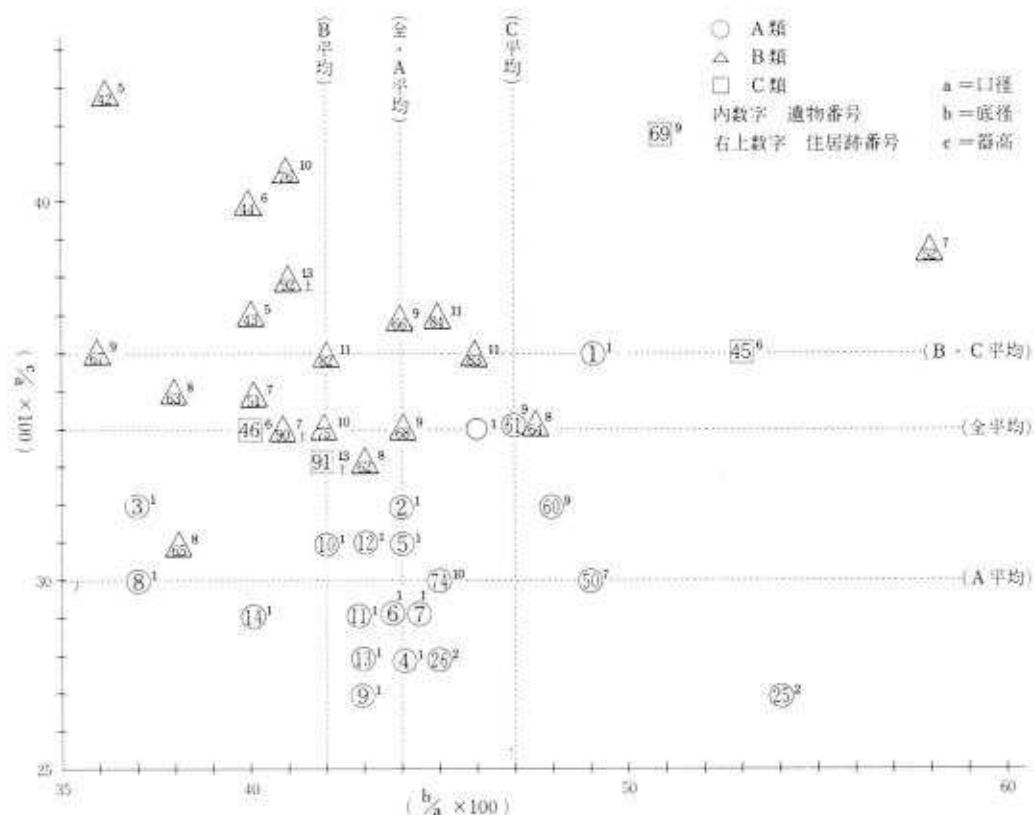
C 1類は、C類総数4個体中の1個体で25%、75%はC 2類である。C 1類1個体は6号住居跡

— 上平澤新田遺跡 —



第10表

坏 外 倾 角 度 分 布 図



第11表

坏 口 径 に 対 す る 器 高・底 径 指 数 分 布 図

出土である。

各類とも、ヘラ切りおよび再調整を施すものが少なく、回転系切り無調整のものが多い。この傾向は第6・14・15表でも知見できる。

### A・B・C類の形態上の数値的相違

各類の形態を数値的に一見し比較するために、口径に対する底径・器高指数と外傾角度による方法を用いた。

前ページの第10・11表に示すように、A類は外傾角度が大きく、口径に対する器高指数が小さい。一方、B・C類では逆の傾向を示すのが一般的である。換言すれば、A類では体部がより大きく外傾し、器高が低く、B・C類では体部の立ちが急になり器高が高い形を示しているが、口径に対する底径指数では、一部を除き50%以下であって、傾向としてはA類に比しB類が小さい。C類は個体数が少なく参考として扱う。

以上のような知見から、A類、B・C類は明らかに数値的に相違があり、そこから来る形態上の相違も認められる。

なお、A類にあっては、1号住居跡出土壺が一部を除き底径指数46、器高指数32以下に集中し、他住居跡出土壺と底径指数で画する様相をもち、外傾角度でも差違を見る。

### 台付壺、台付双耳壺

台付壺は4個体、台付双耳壺は1個体の出土である。法量値については第12表にあげた。

A類台付壺3個体、いずれも1号住居跡出土である。底部からほぼ直線的に急な立ち上がり口縁部はわずかに外反する。相互比較すると法量的に大・中・小となりセット的なものである。

B類台付壺 体部は大きく外傾し比較的高く外反する台をもつ、11号住居跡から出土の1個体のみである。

A類台付双耳壺 形態的にはA類台付壺の小形を呈し、それに双耳が付されたもので、耳部はヘラによるケズリ調整がある。3号住居跡から出土した1個体のみである。

なお、すべて回転糸切り無調整のものである。

### 甕等の分類

還元焰焼成の甕、長頸壺を一括してD類とし、分類は割愛する。ただし、長頸壺、甕、大甕のセットが1号住居跡から出土していることを付す。

ここでは酸化焰焼成のもののみを中心扱う。同様に焼成の差違を推察できるが対象としない。ロクロ末使用のものをE類、ロクロ使用をF類とし、口縁から肩部の破片が多いので、形態的にはそこに主眼をおき、口径17cm以上の長胴形甕等と、以下の小形甕に分けた。調整は特徴的に他と相違するものをみた。

#### F1類（ロクロ不使用 長胴形甕等）

a1 口縁が単純に「く」字に外反し口唇を軽く上方に引き出す。肩部段の形式化したもの。

— 上平澤新田遺跡 —

- a<sub>2</sub> 口縁が外に湾曲しながら外反し、他はa<sub>1</sub>と類似。
- a<sub>3</sub> 口縁が内湾ぎみで外反し、他はa<sub>1</sub>と類似。
- b 口縁が単純に「く」字に外反、口唇に変化なく肩部段は形式化。
- c 肩部での屈曲がゆるやかで湾曲しながら外反する口縁で、口唇に向って薄くなるのが一般的なもの。
- d 口縁が極端に短かく、つまり出したように外反し、口唇に変化がない。

E 2類 (ロクロ不使用 小形甕)

- a 口縁は単純に「く」字に外反し、口唇外側に溜がある。
- b 口縁は単純に「く」字に外反し、口唇を上方に軽く引き出す。最大径は肩部にある。
- c 肩部の屈曲はゆるやかで、口縁は湾曲しながら外反する。E 1cに類似する。

F 1類 (ロクロ使用 長胴形甕等)

- a 口縁が「く」字に外反、口唇を上方に引き出す。
- b<sub>1</sub> 形態はaと類似する。外面中央から口縁部に平行叩き目と下半にヘラケズリを施す。
- b<sub>2</sub> 口唇を上下に引き出す。他はb<sub>1</sub>と類似。
- c 口縁が極端に短かく外反、口唇を上方に引き出す。
- d 口縁が極端に短かく外反、口唇を上下に引き出す。
- e 形態はCと類似、口径値が大きく、外面肩部近くにカキメ状調整、以下は縦位に刻線状のケズリがある。外面に朱塗り痕。
- f 硬弾形丸底、外面平行叩き目文、内両あて工具痕。

F 2類 (ロクロ使用 小形甕)

- a 口縁が「く」字に短かく外反、口唇に変化なし。
- b 口縁が「く」字に短かく外反、口唇は外に薄くなる。回転糸切り無調整。
- c 口縁が「く」字に短かく外反、口唇を上方に引き出す。回転糸切り無調整。
- d 口縁が極端に短かく外反、口唇を上下に引き出す。

調整技法面を概括すると、特に述べたものを除きE 1・2類とも、口縁は内外とも横ナデ、外面は肩部付近に横ナデ、以下縦方向のヘラケズリを施し、体部内面は横位もしくは不定方向の刷毛目が大半である。F 1類でも肩部近くをロクロ調整し、以下に縦位のヘラケズリを施すのが一般的で、F 2類のみは全面ロクロナデ調整である。

出土土器と竪穴住居跡の年代観

甕・甌等の分類と傾向を概観したが、これらの土器が編年上どこに位置づけられるものか、甕を中心に概観し、合せて住居跡との関連をみたい。

A類壺では、Ala, Alb<sub>1</sub>は形態・技法上からは、多賀城研で示した6類に類似する壺で8世紀後半から9世紀後半に位置づけられている。本調査地周辺では、9世紀初頭に創建された志波城跡(太田方八丁)の豎穴住居跡出土壺に同類が知見できる。同遺跡の官衙的性格からすれば、同類壺のこの地方での使用の上限近くを想定できる。一方、Ala・b<sub>1</sub>壺は、2号住居跡で、F1fとした砲弾形甕と共に伴し、秋田城のS1217住居跡の例に類似する。この住居跡について、明確に限定できないしながら9世紀中半以降と推察している。

さて、Alb<sub>2</sub>・A1c類は、ともに1号住居跡出土の壺で、Alb<sub>2</sub>は形態的にはAlb<sub>1</sub>の流れをみるが器高が高い、A1cは底径指數が小かく回転糸切り壺の形態をもつ。これらの壺はA2類とした一群の壺と共に伴している。

A2類は、口縁や体部形態でa~bと細分したが、回転糸切り無調整の壺として一括しても大きな矛盾はない。しかし、1号住居跡出土の壺は、他住居跡出土の壺に比べ底径指數、外傾角度において差違のあることは前述した。しかも器肉が薄く、画一性があることから供給源が同じであろうと考えられる。すなわち、Alb<sub>2</sub>・A1c・A2類は同年代と考え得る要素をもつのである。

1号住居跡の壺が、同一供給源であるとして、それとセットする台付壺、甕、大甕、長頸壺の大半が還元焰焼成土器であり、壺にあっては酸化焰焼成土器が1点も出土しない。これらの組合せの中で、台付壺が、大・中・小と三点セットである点も偶然とは言えず、この住居跡の土器は不特定多方面からの搬入ではない。

以上からして、1号住居跡出土の壺は還元焰焼成土器、いわゆる須恵器生産が、当地方で本格的に行なわれた9世紀中葉から10世紀代の幅に入るものであろうが、回転ヘラ切り技法の壺を共伴する点も含め9世紀中葉以降と推察したい。なお、生産窯は同定し得ないが、本遺跡所在の紫波町内に通称杉ノ上窯跡と堂ノ前窯跡の存在が知られ、杉ノ上II遺跡の住居跡内にロクロピットが確認されており、窯業生産が成立っていたことを物語る。

さて、1・2号住居跡の関連をみると、他住居跡より面積が大きく、構築方法に類似点のあることは既に述べた。しかも、いずれも焼失家屋である。同時焼失との推察も可能ではあるが2号住居跡は整理され、1号住居跡で大量の遺物を残す状況からして、前者が先行し、後者が続ぐとみるのが自然である。出土壺をみても2号住居跡のAla・Alb<sub>1</sub>類は、1号住居跡の壺よりも若干先行するものとみたい。もちろん、同時存在のあり得ることは否定できないが、住居跡のあり方からしても1号住居跡より新しくはならないものと考える。

B類壺についてはB1~4類とし、更に細分をしたが、ここでは一括して考える。B類に比定される古手の壺として、志波城とされる太田方八丁遺跡から回転ヘラ切りで再調整を施すものを主体に出土し、A類とする須恵器に比し少ない。

志波城を9世紀前半とみて、本調査地出土の壺は、回転糸切り無調整のものが大半で、前者

を降ることは疑いない。

沼山源喜治氏による胆沢城址出土の土師器環の編年を参照すると（沼山氏の土師器は黒色処理を除きB類環と解する）第I類Ⓐ～Ⓓとするものと本調査地の環が類似点をもつ。本調査地のものは、器高がやや高く。実見すると細かい点で多少の差違はあると思うが、大筋では同じ様相を呈する。沼山氏の第I類Ⓐ・ⒹとするものはB3a類と、第I類ⒹはB3c類と、第I類ⒹはB3b類と似る。沼山氏は、第I類Ⓐ・Ⓓに9世紀後半から10世紀にかけて、Ⓓ・Ⓓが併出する場合は、より下降するものとの年代観を与えていた。<sup>10)</sup>

また、紫波郡都南村下羽場遺跡の場合は、払田柵址Sk60土壙内出土の底部にヘラケズリ調整をもつ赤褐色土器と、嘉祥2年(849年)銘の木筒の共伴から類推し、回転糸切り無調整のみのB類環であることから9世紀後半から10世紀代にかかるものとしている。<sup>11)</sup>

以上のような、年代観をB1～4類に適応するとき、9世紀中半以降、10世紀代と推察できそうに考える。要約すると、Ala・b<sub>1</sub>・<sub>2</sub>類は、技法、形態的にも先行し、A1c、A2類の図式になり、B1・2、B3類となって、9世紀中葉前後から10世紀代の幅になろう。

しかし、住居跡や遺跡のもつてゐる性格によって、所有する土器の種類、量に相違のあることは当然であろうし、今回の調査結果においても、1号住居跡のような遺物のあり方と、B・C区の各住居跡のようにB類環を中心とするものもある。が、第12・14表でみる限りA類環は6号住居跡(4号住は除く)以外は、量の大小はあっても認められる。A類を併出しない6号住居跡はC1類をもち、叩き目調整の土師器甕を共伴する。一方、Ala・b<sub>1</sub>をもつ、2号住跡でもB類環片を共伴している。

くり返しになるが、遺物の特殊性からすると1号住居跡のA類のみの各器種、萬年通寶、鉄斧、炭化米、3号住居跡の墨と双耳环である。Aj27掘立柱建物跡と関連づけても単なる一般集落としてとらえられるものか、その住居跡の構築方法、規模と合せて1～3号住居跡には他住居跡にない特殊性をみる。志波、徳丹城との関連と律令体制の侵透過程を示唆する遺構・遺跡にも思える。

これらの住居跡に対し、B類環を中心にもつ住居跡間では重複関係にあるものがあり、その前後関係は知り得るが、遺物で組合せたときは必ずしも明確な前後関係差が浮かばない。ただ、B3b類環が重複関係にある8・9号住居跡のみよりの出土であり注目される。

いざれ、1～3号住居跡と他住居跡が、一応考えられる9世紀中葉から10世紀代の幅の中で併存したものか、全く時期を画したものか。今後の課題としたいが、各住居跡のかまど旋設場所ごとに向く方向が、あまりにも一致するのは偶然だろうか。(第3図参照)

#### (4) 土器以外の遺物

**墨** 和墨である。日本で墨を造った記録は、610年に高麗の倭徵によるのが最も古い。奈良時代は中務省図書寮で造墨手によって造られた。平安時代には「延喜式」によると「造墨手4人あり、年間製出量400挺 1挺 長さ5寸、幅8分 丹波、播磨、太宰府などで産した」  
3号住居跡出土の墨は、現存する長さ11cm、幅2.1cmある。

**萬年通寶** 奈良時代の錢貨の中で最も鋳造期間が短かい。我国最初の鋳造貨幣である和銅開珍に次いで、開基勝寶、大平元寶と同じく天平寶字4年(760)に鋳造された改銅貨である。

皇朝12銭中でも大形で、発行後、6年の天平神護元年(765)神功開寶が発行され、31年を経て、延暦15(796)に平安時代最初の隆平永寶が発行され、萬年通寶など旧銭は通用を延暦19年(800)までとし、それ以後廃止された。すなわち公的には約40年間通用したことになる。しかし、実際にはその後も通用した。

政府は、新銭を発行するについては、ほとんど新銭1に対し旧銭10の比率を定めたが、守られず、実際の通用は都を中心に官人や寺が商売に用い、一般は物品貨幣による取り引きが主流をなした。

地方での貨幣所有者は、中央から赴任の官吏や地方豪族で、叙位の目的で蓄蔵されることが多く、実際に通用することは極めてまれであった。

註 (1) 岩手県文化財調査報告書第34集 東北新幹線関係埋蔵文化財調査報告書Ⅱ 大明神遺跡

(2) 須藤隆氏による教示、昭和54年5月11日來訪の際、遺物を実見された。

(3) 岩手県文化財調査報告書第32集 東北縦貫自動車道関係埋蔵文化財調査報告書Ⅱ 下羽場遺跡

(4) 濑田茂弘・桑原滋郎「多賀城周辺における古代環形土器の変遷」 研究紀要】

多賀城調査研究所

(5) 昭和50年度 秋田城跡発掘調査概報 秋田市教育委員会

(6) 前出 (3)

(7) 伊藤博幸「岩手県の古代土器生産について—須恵器とロクロ土師器の素描—」

岩手史学研究 No.61

(8) 岩手県文化財調査報告書第35集 東北新幹線関係埋蔵文化財調査報告書Ⅲ 杉ノ上Ⅱ遺跡

(9) 沼山源喜治「胆沢城址出土の糸切轆轤土師器とその編年的考察」

北奥古代文化 第2号

(10) 前出 (8)

(11) 前出 (2)

(12) 工学博士室谷寛氏によって茶墨であることが判明した。茶墨は紀州、奈良系統にあり、東北では、いわきに青墨がある。しかし、出土墨についての産地同定はできない。

また、材料からみて松煙墨か油煙墨かについても、今後の分析をまたねばならない。

#### 参考文献

世界大百科事典12 平凡社

図録 日本の貨幣 I 原始・古代・中世 東洋経済新聞社

第12表

堅六住居跡出土等一覧表

項 直 横 構 別	種 別	調 査 用 器 器 行 號	分 類 記 号	例 切 り 難 い 部 部	調 査 部 位	探 査 方 法	調 査 部 位	鑿 削 方 法	色	調 査 部 位	鑿 削 方 法	底 部 形 状	底 部 直 径 (cm)	底 部 直 径 (cm) <sub>a</sub>	底 部 直 径 (cm) <sub>b</sub>	底 部 直 径 (cm) <sub>c</sub>	外 観 直 径 (cm)	外 観 直 径 (cm) <sub>a</sub>	外 観 直 径 (cm) <sub>b</sub>	外 観 直 径 (cm) <sub>c</sub>	登 録 番 号	備 考			
									良	中	良	中	良	中	良	中	良	中	良	中	良	中			
16	A	5-1	A1a	回転ヘラ切					良	中	良	中	良	中	良	中	良	中	良	中	良	中	1-17	反転	
16	A	5-2	A1b <sub>2</sub>	回転ヘラ切					組	組	組	組	組	組	組	組	組	組	組	組	組	組	1-23		
16	A	5-3	A1c	回転ヘラ切					善	善	善	善	善	善	善	善	善	善	善	善	善	善	1-4		
16	A	5-4	A2b	回転糸切					良	善	良	善	良	善	良	善	良	善	良	善	良	善	1-16	反転	
16	A	5-5	A2c	回転糸切					良	善	良	善	良	善	良	善	良	善	良	善	良	善	1-3		
16	A	5-6	A2e	回転糸切					善	善	善	善	善	善	善	善	善	善	善	善	善	善	1-5		
16	A	20	A2c	回転糸切					良	善	良	善	良	善	良	善	良	善	良	善	良	善	1-6	反転	
16	A	5-7	A2c	回転糸切					良	善	良	善	良	善	良	善	良	善	良	善	良	善	1-10		
16	A	5-8	A2h	回転糸切					善	善	善	善	善	善	善	善	善	善	善	善	善	善	1-1		
1号住 (Ae30)	16	A	5-9	A2d <sub>2</sub>	回転糸切				善	良	善	良	善	良	善	良	善	良	善	良	善	良	善	1-7	
16	A	5-10	A2d <sub>1</sub>	回転糸切					良	稍	良	稍	良	稍	良	稍	良	稍	良	稍	良	稍	1-11		
16	A	5-11	A2d <sub>1</sub>	回転糸切					善	善	善	善	善	善	善	善	善	善	善	善	善	善	1-12		
16	A	5-12	A2d <sub>1</sub>	回転糸切					善	良	善	良	善	良	善	良	善	良	善	良	善	良	1-13		
16	A	5-13	A2d <sub>1</sub>	回転糸切					良	善	良	善	良	善	良	善	良	善	良	善	良	善	1-14		
16	A	5-14	A2d <sub>1</sub>	回転糸切					良	善	良	善	良	善	良	善	良	善	良	善	良	善	1-15		
合計3A	5-15	21		回転糸切					良	良	良	良	良	良	良	良	良	良	良	良	良	良	1-19		
合計3A	5-16	21		回転糸切					良	善	良	善	良	善	良	善	良	善	良	善	良	善	1-20		
合計3A	5-17	21		回転糸切					長	善	長	善	長	善	長	善	長	善	長	善	長	善	1-21		
2号住 (Ah15)	16	A	11-25	A1a	回転ヘラ切				良	善	良	善	良	善	良	善	良	善	良	善	良	善	2-48	反転	
16	A	11-26	A1b <sub>2</sub>	回転ヘラ切					良	相	良	相	良	相	良	相	良	相	良	相	良	相	2-48		
3号住 (Ai27)	16	B	14-39	A1a	回転糸切				良	善	良	善	良	善	良	善	良	善	良	善	良	善	3-49		
3号住 (B1-39)	16	B	18-42	B1a	不明				善	相	善	相	善	相	善	相	善	相	善	相	善	相	5-53		
3号住 (B1-43)	16	B	18-43	B4b	厚底不明				相	相	相	相	相	相	相	相	相	相	相	相	相	相	5-54		

6号机 (Ca62)	16 B 19-44 25 B3a2 回転糸切	良 鋼 細 鋼 鋼 鋼 傷滅で不明瞭	普通 滅 黄 棒	14.30 5.40 5.65 40 40 39 6-55
16 C 19-45 25 C1 不 鋼 細 鋼 鋼 傷	普通 滅 黃 棒	13.00 6.90 4.65 53 36 34 6-57		
16 C 19-46 25 C2b 回転糸切	普通 滅 黃 棒	15.00 6.60 5.65 40 34 42 6-56		
16 A 21-50 26 A2b 回転糸切	普通 滅 黃 棒	12.95 6.40 3.90 49 30 41 7-63 反転		
16 B 21-51 26 B4a 傷 滅 不明	粗 滅 黃 棒	15.35 6.20 5.30 40 35 42 7-62 反転		
16 B 21-52 26 B2 回転ヘテ切 滅、(棒下端 手持ヘテ切)	粗 滅 黄 棒	12.35(3) 傷 滅 11.90 6.90 4.60 58 39 31 7-61 反転		
16 B 25-62 27 B1b 不 明 滅 ヘテナシ	普通 滅 黄 棒	15.20 6.50 5.00 43 33 42 8-74 反転		
16 B 25-63 27 B3e 回転糸切	普通 滅 黄 棒	12.20 5.00 4.60 38 35 42 8-80 反転		
16 B 25-64 27 B3b1 回転糸切	粗 滅 黄 棒	12.80 6.00 4.40 47 34 40 8-73 反転		
16 B 25-65 27 B3b2 回転糸切	粗 滅 黄 棒	13.10 5.00 4.05 38 31 46 8-75 反転		
16 A 25-60 27 A2b 回転糸切	普通 滅 黄 棒	13.50 6.50 4.90 48 32 43 8-77 増音有		
16 A 25-61 27 A2b 回転糸切	良 良 滅 黄 棒	13.80 6.50 4.65 47 34 40 9-84 反転		
9号机 (Ca68-II)	16 B 25-66 27 B3b2 回転糸切	粗 滅 黄 棒	13.40 5.90 5.00 44 37 40 8-76	
16 B 25-67 28 B3b1 回転糸切	粗 滅 黄 棒	12.40 4.40 4.40 36 36 43 9-81 反転		
16 B 25-68 28 B3b2 回転糸切	粗 滅 黄 棒	14.20 6.20 4.85 44 34 40 9-83 反転		
16 C 25-69 28 C2a 回転糸切	粗 滅 黄 棒	13.00 6.60 5.45 51 42 30 9-82 反転		
16 A 28-74 29 A2c 回転糸切	良 普 ヘテナシ	14.20 6.40 4.20 45 30 42 10-89 反転		
103号 (Ce68)	16 B 28-75 29 B3a2 回転糸切	普通 滅 黄 棒	14.00 5.85 4.80 42 34 40 10-87 反転	
16 B 28-76 29 B3a1 回転糸切	普通 滅 黄 棒	13.95 5.70 5.70 41 41 38 10-86		
16 B 30-82 30 B3a1 回転糸切	粗 滅 黄 棒	14.75 6.25 5.30 42 36 40 11-97		
11号机 (Cg65)	16 B 30-83 30 B3a1 回転糸切	普通 滅 黄 棒	15.60 7.20 5.60 46 36 37 11-98	
16 B 30-84 30 B3a1 回転糸切	粗 滅 黄 棒	14.90 6.70 5.50 45 37 37 11-101		
16 B 30-85 30 B3a1 回転糸切	良 普 ヘテナシ	15.10 6.00 4.90 47(1.20) 40 53 11-100		
13号機 (Be65)	16 B 42-42 30 B3a2 回転糸切	粗 滅 黄 棒	14.70 6.10 5.60 41 36 38 29-106	
16 C 42-91 30 C2b 回転糸切	粗 滅 黄 棒	14.65 6.20 4.90 42 33 41 29-105		
7号機 (Ak122)	16 B 42-90 30 B3a1 回転糸切	普通 滅 黄 棒	14.00 5.70 5.60 41 34 37 22-104	

## — 上平澤新田遺跡 —

第13表 穴居跡出土甕等一覧表

項目 造構	種別	美術 圖版番号	國版番号	分類	計測 値 (cm)				燒成	胎土	色調	登録番号	備考	
					口径	底径	器高	その他						
1号住 (Ag 30)	甕E	6-18	21	E2a	16.70	7.50	15.70		粗	粗	明褐	1-22		
	甕F	6-19	21	F2c	13.00	6.65	10.40		粗	粗	にぶい褐	1-23	回転糸切り無調整	
	甕F			F2e	13.50				粗	粗	オリーブ	1-29		
	甕D	7-22	22		18.00	12.50	33.00	最大径 体中半	29.00	良	普	灰	1-25	
	甕D	7-23	22		欠	13.35	35.00	最高 底半	13.35	普	良	灰	1-24	
	長頸 甕D	6-20	22		欠	9.50	23.00	最高 底上半	19.90	普	普	灰	1-26	台付
2号住 (Ah 15)	甕E	11-28	23	E1a <sub>2</sub>	23.80					普	普	明黄褐	2-42	
	甕E	11-29	23	E1a <sub>3</sub>	19.00					普	普	赤褐	2-43	反転
	甕E	11-30	23	E1c	26.30					普	普	にぶい黃澄	2-33	反転
	甕E	11-31		E1c	26.00					普	精	明黃褐	2-34	反転
	甕F	11-32	24	F1a	25.40					普	普	橙	2-37	
	甕E	11-33	24	E2a	16.60					普	普	黃橙	2-41	
	甕E	11-34	24	E2a	15.70					普	普	橙	2-38	
	甕E	11-35	24	E2b	14.00					粗	普	にぶい赤褐	2-39	反転
	甕E	11-36	24	E2c	15.00	7.20	11.85			良	良	橙	2-35	反転
	甕F	11-37	24	F2a	13.20					普	普	オリーブ褐	2-36	反転
4号住 (Bb 27)	甕F	12-38	24	F1f						良	普	にぶい黃褐	2-40	砲弾形 叩き目
	甕E	16-41	25	E1d	19.40					粗	粗	黒褐	4-51	
6号住 (Ca 62)	甕F	19-47	25	F1c	22.80					普	粗	にぶい橙	6-58	反転
	甕F	19-48		F1b <sub>2</sub>						普	普	橙		叩き目
	甕F	19-49	26	F2d	16.70					普	普	淺黃橙	6-59	反転
7号住 (Ca 68)	甕E	21-53	26	E1c	17.70					普	普	にぶい橙	7-65	
	甕E	21-54		E1c	22.30					普	普	明黃褐	7-67	反転
	甕F	21-55	27	F1c	18.40					良	普	明黃褐	7-66	
	甕F	22-56	26	F2b <sub>1</sub>	22.30					普	普	橙	7-68	叩き目 反転
8号住 (Cc 68-I)	甕E	26-70	28	E1b	24.40					粗	粗	橙	8-79	反転
	甕F	26-72	28	F2b	14.00	7.50	13.30			普	普	橙	8-78	回転糸切り無調整 反転
9号住 (Cc 68-II)	甕F	26-71	28	F1e	29.20					良	普	橙	9-85	朱塗り痕
	甕E	28-78	29	E1a <sub>1</sub>	17.70	77.70	27.10			普	精	極暗褐	10-93	反転
10号住 (Ce 68)	甕E	28-79	29	E2a	15.90	8.20	13.60			普	普	明褐	10-92	反転
11号住 (Cg 77)	甕F	30-86	30	F1d	19.40					普	普	にぶい橙	11-99	
	甕F	30-87	30	F2c	14.30	7.70	13.40			普	普	にぶい橙	11-102	

第14表 壁穴住居跡床面等出土土器片集計表

種別 部位 遺構	环 等																		壁 等								
	A類						B類						C類						土師			須恵					
	口	体	底			計	口	体	底			計	口	体	底			計	口	体	底	計					
			ヘラ	鉋切	他				ヘラ	鉋切	他				ヘラ	鉋切	他		69%	69%	体	69%	69%	他			
1号住	9	5				14	1					1							12			12	12	2	34		
2号住	12	1				13	4	3		1		8						10	5	107	10	132	11	11	11		
3号住																			4		1	5					
4号住																											
5号住		1	2			3	10	14		2	2	28		2		1		3	1	18	6	1	26	2		2	
6号住										14	8				22	2		2	4	1	7	27		3	38		2
7号住	2	2				4	1	2		2	5								1	11		2	14		3	4	
8号住		1				1		5			5												19			19	5
9号住	13	9		3		25	50	38		8	8	104	1	7				8	5	4	62	1	3	75	3	3	
10号住	1	1		1		3	2				2								3	25		2	30	1		1	
11号(2期)住	1	1		1	3															11		2	13				
11号(3期)住	3	4			7														6	13	1	20		3	1	4	
計	41	25		6	1	73	81	71		11	12	175	3	9		3		15	27	16	309	8	24	384	3	39	446

第15表 壁穴住居跡埋土中の土器片集計表

種別 部位 遺構	环 等																		壁 等						繩文 地文	
	A類						B類						C類						土師			須恵				
	口	体	底			計	口	体	底			計	口	体	底			計	口	体	底	計				
			ヘラ	鉋切	他				ヘラ	鉋切	他				ヘラ	鉋切	他		69%	69%	体	69%	69%	他		
1号住	21	7	2	1	31		2		1		3	1						1	14	63	8	85	3	3	32	
2号住		7			7		4				4	1						1	130		130	7	7	27		
3号住		2			2		3				3	2						2	10	10	4	4	4	6		
4号住																										
5号住		3			3	1	4		1	2	8															
6号住	11	6	1	2		20	16		1	17		1						1	4	11	6	21	2	1	27	
7号住	2	3	2		7	10	13		2	25		1						1	5	20	3	28	2	2	20	
8号住		4		5		9	46	54		13		113	1	2		5		8	16	147	8	171	9	9	33	
9号住																										
10号住	6	2	1	1	10	12	30	2	3		47	1	5					6	10	84	13	107	2	2	27	
11号住 1期 2期	5	1	1		7	5	2			7	2							2	5	59	6	70	1	1	3	
計	49	31	2	12	2	96	90	112	2	21	2	227	2	15		5		22	54	524	44	622	30	1	31	145

### 3. おわりに

本遺跡は、縄文時代の溝状土壙、土壙、後期初頭、晩期中葉の土器が認められ、縄文時代中半からと推察される溝状土壙は、近年、本県内はもちろん、東北、北海道で多く検出され、「陥し穴」とする意見が出されて来た。更に類例を検討する中で、その性格を極めなければならぬが、縄文時代の施設が認められ、その活動の場として本遺跡が位置づけられる。

縄文時代晩期に連続する弥生式土器の検出は、造構こそ確証できなかったが、土器のあり方から、少なくとも近隣に造構の存在を推察し得る。弥生時代中期初頭～中葉に生活の場としての位置づけがなされてよいものと考える。

降って、平安時代の竪穴住居跡と遺物の検出は、この時代に入って集落が形成されて行ったことが知られる。特に1号住居跡や2号住居跡における状況は、竪穴住居跡の構築方法について、その一面を示唆するもので、壁材の施設溝は、縦木周溝と言われる壁沿いの溝について、<sup>(1)</sup>その性格の一端を明らかにしたものであるとともに、萬年通寶や墨などの遺物、住居跡の規模や、しっかりした柱穴をもつ住居跡は、集落の核的存在を思わせ隣接する掘立柱建物との関連等も考え合せるとき、志波城・徳丹城との関連の中で、律令体制下の紫波郡地方の集落がどのような形式と変遷をたどるか、今後の検討課題でもある。

いずれ、今回の調査において、その主体になったのが平安期の造構と遺物であった。

平安期もしくは降ると推察される隅丸方形周溝は、性格不明の造構で今後類例をまたねばならない形態と構造上からは、何らかの領域を区画するものとも考えられるが、周溝内部には関連する施設痕も認められない。

途中で断続しながらも、縄文時代から、この地に人間の生活が営まれ続けて来た数々の証が得られた。1号住居跡は、炭化材をそのままに自動車道西側の用地内に埋蔵されている。

本遺跡のすぐ北に宮手遺跡、南に栗田Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ遺跡があり、その一部は本遺跡同様、東北自動車道建設に関連し調査が実施された。間もなくその成果も報告されるが、この地域には、微高地に立地する遺跡はまだ多い。

本報告は調査の事実の報告にのみ終始したが、今後に課題を残しながらおわりとした。

註 (1) 青森県文化財調査報告書 第37集 青森市三内遺跡 青森県教育委員会

三内遺跡でも5棟の竪穴住居跡で確認されており、「壁溝」と呼称している。特にH-44竪穴住居跡の板材のあり方は、本調査地1号竪穴住居跡に類似する点をもつ。本調査地では保存のため精査をせず詳細まで報告できないが、三内遺跡においては板材施設の状況の報告があり、「壁溝」について多くの類例をあげ考察しており、本調査地1・2号竪穴住居跡の「壁材施設溝」としたものと類似する。

## 浦田 (B) 遺跡

### I. 調査地区の位置と立地

本調査地区は、国鉄東北線日詰駅の西約 5 km の地点にあり、バス停「新山神社入口」より南へ約 500m の所である。新山 (562 m) の東麓、丘陵の南面した傾斜地で、標高は南端が 146m、北端が 155m で、南側の西半分が宅地と畠地、東半分が水田、北側は山林である。

調査地区の周辺には、北約 200m に浦田遺跡。南約 400m に浦田 A 遺跡がある。

### II. 調査の経過と結果

調査は、重機による表土除去を行ない、遺構・遺物の検出作業を実施したが、遺構・遺物の発見は皆無であった。分布調査の際、宅地の北側にある倉庫付近から遺物を探集したといわれるが、この付近から南側東半分の水田までは、地山をかなり削平し、宅地付近は地山が露出し、水田は客土をしている。客土に遺物が混入していたか、浦田遺跡から遺物が移入したか考えられるが、明確ではない。

## 浦田 (A) 遺跡

### I. 調査地区の位地と立地

本調査地区は、国鉄東北線日詰駅の西方約 5 km にあり、土館字金田部落内の十字路から西へ約 500m 入った地点で、新山 (562 m) の東麓である。道路の北側が畠地。南側が水田と畠地で、調査地区の東側を滝名川から分流した水路が南流する。標高は 163m ~ 169m である。

調査地区の周辺には、東約 500m に金田遺跡。北約 600m に浦田遺跡。北約 400m に浦田 B 遺跡。西北西約 800m に和山遺跡等がある。

### II. 調査の経過と結果

調査は、重機による表土除去を行ない、遺構・遺物の検出作業を実施したが、遺構・遺物の発見は皆無であった。分布調査の際、遺物を探集したといわれる北側畠地は、地山の削平と、耕作土の客土があったと思われ、分布調査で採集した遺物は、他から移入された可能性もあると考えられる。



# ふん だて 墳 館 遺 跡

## I 遺跡の位置と立地 (第1図)

墳館遺跡は紫波郡紫波町大字片寄字漆立、国鉄東北本線日詰駅の南西約5.4km、紫波町の南西部に位置する。

紫波町西部には第三系よりなる後背山地が控え、その東縁には、この地域で最も高位の石鳥段丘面が比較的顕著に残存している。本遺跡は、その頂部の平坦な丘陵部に立地しており標高は、180m～200mである。南北は、ともに西から東に走る小沢によって画されている。

東部は眺望が開け田園地帯が続いている。

すぐ南には後在所A・B・C・D遺跡、北には、大明神・柳田館の東北自動車道関連の遺跡があり、東方には片寄I～III、四ツ家I～IV、片寄野田等の遺跡がある。

## II 基本層位

遺跡の立地面は、丘陵平坦面の東縁部にあたる山林で、地形としては、西から東にかけて緩かな斜面を形成し、その東端は急斜面になって落ちこみ、南・北側もそれぞれ急斜面を形成し沢へと続いている。緩斜面の平坦面に墳墓があり、斜面の変換点近くに土壘がまわっている。

調査区は墳墓、土壘の構築等人工的な土の移動が広範囲にわたって行われているため、その堆積層は地点によってかなりの相違が認められたが基本的には3層に大別される。

第Ⅰ層 (7.5YR 5) 暗褐色土………腐植土でしまりが悪く、草木根が非常に多く入りこんでいる。層は、調査区全体に広がっており、厚さは10cm～40cmと地域的にかなりの差がある。

縄文時代、平安時代の土器片がわずかに出土している。

第Ⅱ層 (7.5YR 5) 黒褐色土………シルト質土で比較的しまりがよい。草木根による擾乱が少ない。層は自然の状態では墳墓、土壘等の基盤面上や、その周辺等に部分的にみられ、北側になるにつれて地山の明褐色土が、小ブロック状に入りこんだり、褐色土がかった汚れた土等が混じり擾乱された状態を呈しているところが多くなる。また、北側には全く欠陥しているところもある。厚さは10cm～50cmと地域的にかなりの差があり、南の方が比較的厚いところが多い。縄文時代、平安時代の遺物が多量に出土し、平安時代の住居跡はこの層より検出されてい

る。

第Ⅲ層（7.5YR<sup>赤</sup>）明褐色土……シルト質粘土の地山である。溝状土壤や、その他の土壤等縄文時代関連の遺構の検出面である。

### III 検出した遺構と遺物（第2図）

調査の結果、以下の遺構と遺物を検出した。

① 墳墓 9 ② 周溝状遺構 2 ③ 穫穴状遺構 2 ④ 円形土壙 12 ⑤ 溝状土壤 3 ⑥ 住居跡 2 ⑦ 土壙、小ピット群等である。遺物は、墳墓の副葬品としての古銭の他、縄文時代・弥生時代・平安時代の土器片が多量に発見された。

以下、その概略を述べることとする。

## 1. 墳 墓

### 第1号墓（第3・4図、図版2・3・4-1、2）

調査区の南端、丘陵部の南縁部に位置する。墳墓の現状は、裾部で一辺が東西約14m、南北17m、墳頂部平坦面が東西約9.5m、南北約13mの隅丸長方形状を呈し、高さは、裾部から約1.8mを計る長方形台状を呈している墳墓である。

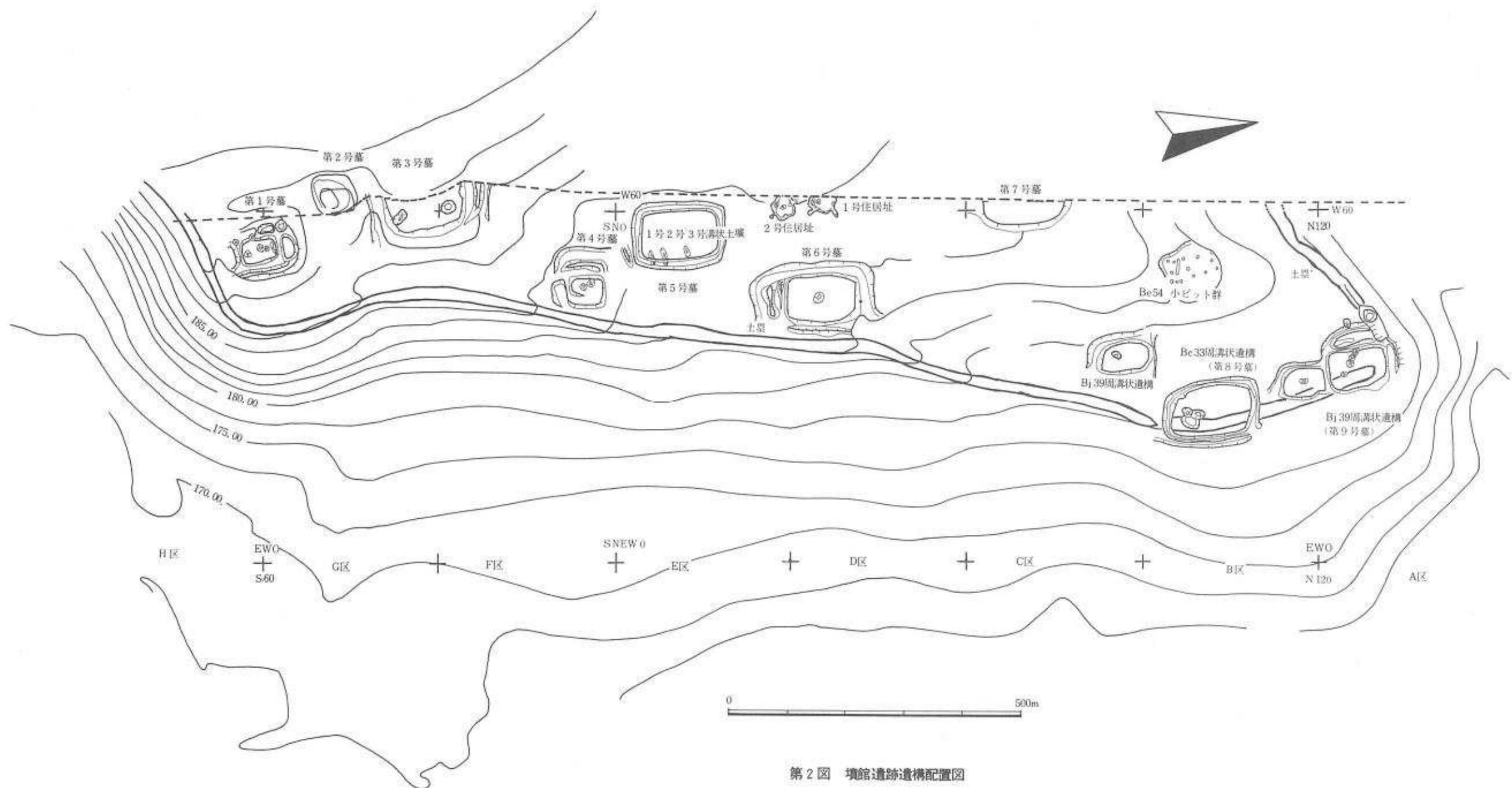
調査の結果、封土は、主としてシルト質粘土の褐色土（おそらく地山の土と同じもの）と黒褐色土を最大約1.4mの高さに、所により版築状に積み重ねて墳丘を形成しているものであるが、西側部分には明褐色土、褐色土のみを積み上げているところもみられる。

周溝は、現状のものには、自然地形を利用して基盤面を台状に削り出しているのみであり、特にまわっていないが、初期の段階では上幅1.8m、下幅0.6mの舟底状の断面を有する溝がまわっていたとみられる。これらの溝は、縄文時代に属するとみられる住居跡状遺構、土壙等を切っている。

墳墓の施設としては、墳丘の平坦面第2層上面に約0.8×0.4mの長方形状の石をはじめ、大小の石が、一部に集石された形で、或は、墓石風に立てられた形で、南北にわたって幅広く散在していた。中央部や、東寄りには地山まで堀られた円形の土壙があり、その底部より人歯牙が3本出土した。土壙の規模は、後世において、この部分が堀られているため不明である。また、火葬骨が埋葬された平面形が円形で、断面が半月状の小土壙が第2層及び第4層（表土



第1図 墓館遺跡地形図



第2図 墓館遺跡遺構配置図

下約0.3m～0.6m)より32基検出された。これらには、火葬骨の細片と炭化物(主として小枝状や塊状の木炭屑)、黒色土が混じっている。埋葬されている火葬骨は全体的に少なく、一體分と思われるようなものはない。大部分が炭化物や黒色土中にシモアリ状にボツボツ見える位のものが多く、中には、炭化物や黒色土のみのものもある。(10基)

これらの小土壤中には納骨器のようなものは見当らず、また、その形跡もない。その他4層の明褐色土中には、直接火葬骨の置かれているところが、南西、北東部分に各1ヶ所存在した。

火葬骨の範囲は約0.3m四方で厚さ約0.05mとうすい。これらの土壤の配列は上部の石の配列とやや似たところがあり、不規則であるが南北にはほぼ二列にわたって設けられている様相を呈している。

火葬骨の納められた土壤と、中央の土壤のいずれからも副葬品は出土していない。ただ、封土中より磨滅の著しい縄文土器片が多量に出土し、その他、石鏃3点、石皿3点、円盤状石製品3点、不定形石器13点等石器が出土している。また、表土からはキセルが出土している。(第16図)

なお、墳墓の構築された地山面や溝中より縄文土器片の多く入った土壤(1～4号土壤)や住居址状遺構が検出されている。

#### (少考)

第1号墓は、かつて縄文時代の生活の場であったところ(遺構のあったところ)に周辺より土を盛り上げて墳丘を形成したものである。この墳墓は、当初は周構のまわった南北約9m×東西約7m、高さ約0.8mの比較的小さな墳丘を形成し、その後、北、或は西側に拡張し、封土も以前のものよりも高く現状の規模のものにしたものと推察される。しかも、北側は版築状に、西側については褐色土を一挙に盛り上げているというような差が認められる。

火葬骨を納めた小土壤は、南東側が最も低い位置に存在し、ついで北東側、そして、中央より西側部分は最も高い位置にある。直接火葬骨の置かれている面も南西部は上部に、北東部はそれより低い面にある。このことは、一応、拡張が後になされたことの一つの見方としてよいのではないか。

以上のようなことから、この墳墓における火葬骨の埋葬は幾度も追葬の形で、ある程度長い時期にわたって追葬が行われた火葬集団墓とみることができよう。

火葬骨埋葬の小土壤と石との関連は、後世の移動があったことは充分考えられるが、やはり土壤の上に集石したり、墓碑風に石を建てたりすることが行われていたものではないかと推察される。中央部の土壤は既述のように後世の乱掘によって上部から搅乱されているため当初の掘り込み面が明確ではないが、地山面に余り深く掘り込んだ土壤でないことや、封土の様子から、火葬骨を埋葬するためにつくられた墳墓を利用して土葬墓として使用したものであろう。

## — 墓 館 遺 跡 —

封土及び円形土壙の埋土からの出土土器は、縄文時代後期初頭に属すると思われるものが、ほとんどで、石器類についてもそれ等と、ほぼ同時期とみてよいものであろう。

### 第2号墓（第2図、図版4-3・4）

第1号墓の北西約15mに位置し、北の第3号墓との間に位置する。当墳墓は、東側の裾部が、わずかに調査対象となったものであるが、協議の結果、調査区を変更し、現状のまゝ保存することとなったものである。現状は、東西約7m、南北約8mの方形に近い台形墓であり、周溝等については不明である。

### 第3号墓（第5、6図、図版5・6）

第1号墓の北約30mのところに位置する。墳墓の現状は、裾部で一辺が東西約9.5m南北約18m、墳頂部平坦面は、東西約8m、南北約13.5mの隅丸長方形形状を呈し、高さが約1.9mの長方形台状を呈している墳墓である。

調査は、西側をは区域外のため東側を南北にたわるような形で行ったものである。

調査の結果、封土は、シルト質粘土の明褐色土と黒褐色土を最大約1.1mの高さに版築状に積み重ねて墳丘を形成しているもので、北側には約2.5mにわたって拡張して形を整えたとみられる形跡がある。封土中には、第1号墓に比べて大小多くの石が入りこんでいるのが目立つ。

周溝は、現状のものにはまわっていない。拡張前のものとみられる西から東に走る上幅約2m、深さ約0.6m、断面形が半円状の溝があり、その外側には、南・北側ともに上幅1m前後の皿状の溝が東西に走り、東側で自然消滅している。東側は、段を形成するのみで溝は認められない。

墳墓の施設としては、墳丘の平坦面第2層上面には約1m×0.4mの楕円状の石をはじめ大小の石が散在している。第1号墓のように墓石風なものはみられないが部分的にはまとまりがみられ、特に、南西部分に多くまとまっている。

火葬骨の納められた土壙は、表土下0.6~0.8mの主に明褐色土層よりし17墓検出された。これ等の形状はいずれも第1号墓とほとんど同じである。火葬骨の認められたものは11基で他は炭化物（木炭屑）及び黑色土のみで骨片は認められない。また、調査した範囲では北側の拡張した部分には、小土壙が認められなかった。西側の区域外には表土下に2ヶ所、小土壙が認められたが、調査はしていない。

土壙の配列は不規則ではあるが南北にわたって散在しており北側ほど少なくなっている。

副葬品として小土壙中より出土したものはないが、封土中より瓢箪形の板片（長さ約6cm）に張り付いた古銭3枚（宋通元宝1、不明銭2）と祥符元宝1枚が発見された。また、第1号墓と同じように磨減の著しい縄文土器片が多量に出土した。その他、石鎌1、石斧2、磨石2、不定形石器9点等の石器と、チップ、フレーク等が出土している。

なお、墳墓の構築された基盤面より縄文土器片の多量に入った不定形の土壌（第5号土壌）や、円筒形の土壌（第6号土壌）が検出されている。また中央には後世の乱堀により攪乱された跡が地山面まで続いている。

#### （少 考）

第3号墓も1号墓と同じく縄文時代の遺構の上に封土を盛り上げて、墳墓を形成しているものであり、立地が東に向う緩斜面なため主に南・北側より封土を盛り上げたもののように推定される。また、北の内側の溝を埋めて拡張したものは、墳丘構築時に一旦土を積み上げてから、すぐその後で付けたもののように推定されるが、明確な時期は不明である。

火葬骨を納めた小土壌は、そのほとんどが第5層明褐色土を掘りこみつくられており、いずれの土壌も、ほぼ同じ面に存在する。従って、これらの時期はそれほど大差のないものと一応推定される。これらはやはり、追葬の形をもった火葬集団墓であろう。

遺物は、小土壌に伴うものはないが、既述のように宋銭2枚、不明銭2枚が出土しているがそのうち古銭の張り付いた板は、火葬骨を入れた木棺の残材とも考えられるが明確な事は分らない。しかし、これ等は、単なるまぎれこみではなく、墳墓構築時或は、火葬骨埋葬時に供獻したもの或は、それと関連のあるものと考えたい。

おわりに、封土中よりは第1号墓にも増して多量の縄文土器片、各種の石器等が出土したこと、第3号墓周辺から最も多量の縄文土器片が出土している事とあいまって、周辺に多くの縄文時代の遺構が存在した事が考えられる。これ等の土器、石器はそのほとんどが、縄文時代後期初頭に属するものであろう。

#### 第4号墓（第7図、図版7・8-1）

第3号墓の北東約26mの丘陵東縁部に位置する。墳墓の現状は、裾部で東西約11.5m、南北約10.5mのや・正方形に近い形の方形台状を呈しているものであり、高さは約1.2mである。

封土は、明褐色土、黒褐色土を1.1mの高さに周辺より積み重ねたもので、第1号・第3号墓のように、特に版築状に構築した様子はみられない。

周構は、南から西にかけて、上幅約1m、深さ0.1~0.2mの浅い皿状のものがまわっており、北側で自然消滅している。その他、墳墓基盤面には、南北に不規則な皿状の溝が走っている。

墳丘の施設らしきものは特に認められず、墳頂平坦面には、第2層上面に4~5個の人頭大的石が集石していた他、微量の火葬骨片が認められた。中央部には表土面から掘られた径が約1.5mの円形の攪乱された土壌が地山面迄続いていた。

出土遺物としては、封土中より、微量の灰が付着し熱のため曲った洪武通宝1枚と永樂通宝1枚、不明銭2枚が出土している。その他、封土中からは、縄文土器片、及び不定形石器2点

の他、フレーク、チップ、土師器の坏、甕、須恵器の甕の破片が出土しているが、第1・第3号墓に比べて非常に少ない。

(少 考)

第4号墓は、墳丘の構築が版築状に行われていないこと、多くの火葬骨埋葬の小土壙や、配石等が見られないこと等の点で第1・3号墓と異なる。但し、封土中より微量の火葬骨片が、出土したり、熱を受けた古銭等が出土していること等から、当墳墓も火葬骨を埋葬するために構築された可能性も考え得る。また、中央の土壙は、土葬墓として利用されたものなのか、単に後世の乱掘のために出来たもののかは不明であるが、後者の線が強い。封土中には第1・3号墓に比べて縄文土器片の少なかったこと、土師器、須恵器片が少し混じっていたことは、周辺における縄文時代、平安時代の造構の有無に關係しているものと思われる。

第5号墓（第8図、図版8-2・3、9-1）

調査区の西端、第4号墓の北西約18mのところ、第4・5・6号墓を結ぶ三角形の頂点にあるところに位置する。

墳墓の現状は、裾部で東西約9m、南北約14mの長方形状を呈し、高さが約0.8mの長方形台状墓である。

封土は、周辺から盛り上げたとみられる明褐色土、黒褐色土が中央部分で、やや高くなるよう盛り上げて台状の墳丘を形成しており、全墳墓中で一番墳丘が低いものである。

周溝は、上幅約1.3m、深さ0.4-0.6mの深鉢状の断面を持ったものがまわっており、地山面における溝状土壙の上部を切ってつくられている。

墳頂平坦面には、特に意図的な石の配列等は認められない。中央付近の第2層より火葬骨を埋葬した直径約0.5m、深さ約0.2mの半月状の断面をもつ小土壙1基が検出された。骨片も少なく他は炭化物（木炭屑）と黒色土であることは他と同じである。また、中央部や、北寄りからは径約1.6m×1.7mで不整四角形に近い平面を持った土壙が1基検出された。これは底部が地山面を少し盛り込んでいる。埋土は、黒褐色土の擾乱であり、上部より微量の火葬骨の小片片出土している。封土を除去した後の基盤面には、大小の礫石が多量に散乱しており、既述の周溝によってきられた溝状土壙が3基検出された。

副葬品とみられるもの・出土はなく、封土中より少量の縄文土器片や石斧2点の他、チップと土師器、須恵器の小破片が出土している。

(少 考)

第5号墓は、墳丘の形態からみると第1・3号墓と類似し、封土の状態は第4号墓に類似している。周溝が完全な形でまわっている事は他と異る。これは、構築された地点が、他に比べて特に平坦であったことが起因しているものであろう。

火葬骨を埋葬した小土壙は1基のみの検出であったが、広い平坦面を形成していることや、墳丘が低い事等は、その後も、埋葬の場として使用する意図があったものが途中で使用されなくなってしまったものではないかと考えられる。

中央の土壙は、検出面が表土ということや、表土の状況等から後世による乱堀によるものと思われるものである。基盤面に散乱していた礫石は、その状態が人意的というようなものではなく、一種の山津波のような状態で、そこに押し出されて散在した可能性が強いものである。

遺物が極端に少いということは、封土の量の問題、周辺の遺構の密度にも関係あるものと思われる。

#### 第6号墓（第9・10図、図版10・11）

第4号墓の北、約35m、丘陵の東縁第4号墓と南北にほぼ並んだ位置に存在する。墳墓の現状は、現存する外側の周溝の内側で、東西約9m、南北約19mを計る。墳頂面は椅円状を呈した平面をもつ。高さは、裾部から約2mの高さをもつ台形墓であるが、南側が一段低く小さな墳丘を形成しており、一見、二つの墳丘が存在するように見える墳墓である。

封土は、明褐色土、黒褐色土を交互に版築状に約1.1mの高さに積み重ねて墳丘を構築したものであるが、南側約 $\frac{1}{3}$ にあたる部分（一段低く見える部分近く）は一度に褐色土を盛り上げて墳丘を構築している。

周溝は、西から南、北へと上幅最大1.5m、下幅0.5mのV字に近い溝がまわっており、その深さは、地形が東に傾斜している関係で、西側は0.9mと深く、それぞれ、東にまわるに従って浅くなっている。周溝の低部には、他の墳墓と異なり、人頭大の石をはじめ、大小の石が存在した。また、基盤面の南側には、比較的浅い皿状の溝が東西に2本走っており、いずれも外側の周溝に落ち込んでいる。

墳丘の施設としては、墳頂平坦面には、長さ約1.45m×1.00mの長方形の大きな石をはじめ、大小の石が中央部付近を中心に散在している。

火葬骨を埋葬した小土壙は、表土下0.1～0.6mの明褐色土層中より12基検出された。規模は直径0.4～0.6m、深さ0.15～0.2m、半月状の断面をもつもので、第1・3号墓のそれと類似したものである。これらのうち、火葬骨の認められない、いわゆる炭化物と黒色土のみのものが5基存在する。その他に、地表面に直接火葬骨の置かれているものが東、北側の周溝の内側壁面にそれぞれ1基ずつ検出された。（第9図、P-1、P-2）

これらの火葬骨を埋葬した小土壙は、当墳墓の場合、中央及び北側に比較的まとまって存在している。また、封土中からは第1・3・4・5号墓に比べて、比較的多くの火葬骨片が出土している事が特徴的である。

その他に、墳丘の北寄りほぼ中央部に後世の乱堀による擾乱された径約1.6m前後の土壙が

## — 墳 館 遺 踪 —

あり、その表土下約0.6mのところに0.3×0.3mの正方形の小土壙が存在し、その中に人骨がまとまって埋葬されていた。(図版11-3)更に中央部分に1・2堀り上げられたとみられる擾乱された土壙跡が存在した。

副葬品は何も出土せず、封土中よりは他と同じように、縄文土器片、土師器、須恵器の破片が出土し、その他に弥生式土器の破片と思われるものもかなり混っている。特に他に比べて、土師器の破片の多い事が目立つ。周溝埋土中よりも他に比べて比較的多くの土師器の破片が出土している。また、和釘とみられるものも1本出土している。

(注1) 地元の古老の話によると「昭和初期に某銀行の人々が、古墳を調査するということで存在する墳墓を堀ったとのことである。その時に第1号墓その他から出土した人骨を木箱にまとめて再葬した」ということである。その話と一致する。

### (少 考)

封土の盛り方は北側に比べて南側は雑であり褐色土を一挙に盛って、墳丘を形成しているものである事は既に述べたが、周溝との関係からみると内側にある東西に走る2本の溝は、少なくとも外周の溝が形成されている前のものであり、北側の墳丘を構築する時か、または、それ以前の時期の何等かの遺構の名残りか、二つのことが考えられる。

最終的には、外周の一番大きな周溝が墳丘を形成するためにつくられたものと推定される。

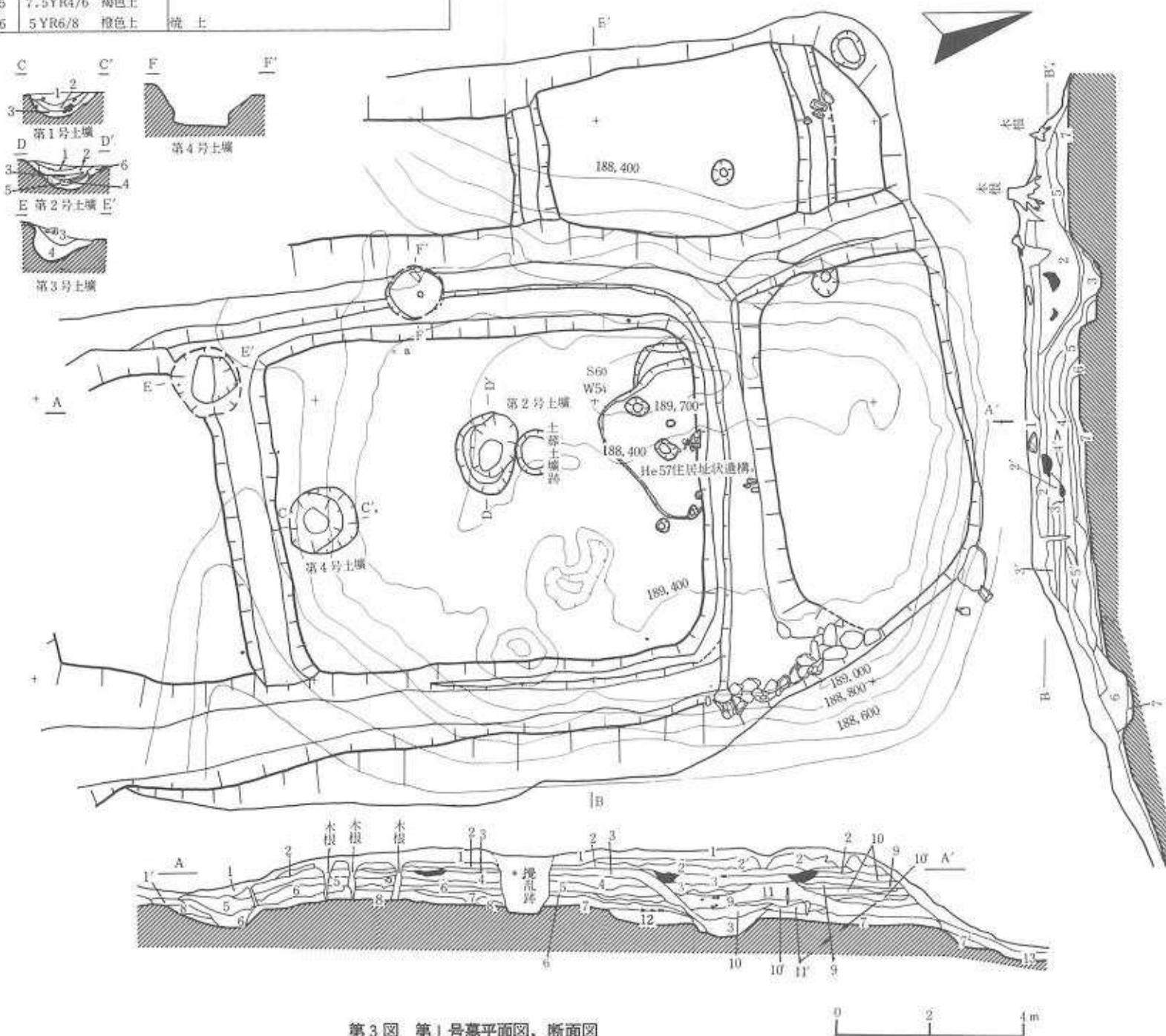
火葬骨を埋葬した小土壙は、比較的下方に埋葬されている一群と、上方に埋葬されている一群とがあり、上部の土層からみても大きく二時期にわたる埋葬が考えられ、第1・3号墓と同じく何回にもわたって追葬された火葬集団墓であろう。

本墳墓の場合、特に周溝の壁面に直接火葬骨が埋葬されたものがあり、火葬骨の量も他の小土壙のものに比べて多くの量が入っている。これらは、本来的な意味の埋葬なのか場所が場所だけに疑問であり、埋葬であれば墳丘を使用出来ない何等かの理由があったものなのか不明である。また、中央北寄りより出土した人骨は後世の再葬によるものであることは既に述べたが、本墳墓も土葬墓として利用された可能性はある。この墳墓は外形から前方後円墳状にみえること等から、かつて古墳とされていたものであろうが、これ等は火葬集団墓であることが判明した。

遺物は他の墳墓と同時期のものであるが、弥生式土器、土師器、須恵器等の多いことは周辺の遺構が縄文時代のものよりも、それ等に関する遺構が多くなっていることを意味しているものだろう。

(注2) - 史蹟各勝天然記念物調査報告(大正13) - 紫波町史 紫波町教育委員会昭49 佛教考古学講座 第7巻墳墓 雄山閣昭50

1層	7.5YR3/2 暗褐色土	燒土、炭化物、縄文土器片を含む
2	7.5YR2/3 極暗褐色土	燒土、炭化物、縄文土器片を含む
3	7.5YR3/4 暗褐色土	炭化物多量。燒土、縄文土器片含む
4	7.5YR4/4 褐色土	燒土を多量に含む
5	7.5YR4/6 褐色土	
6	5YR6/8 紅色土	燒土

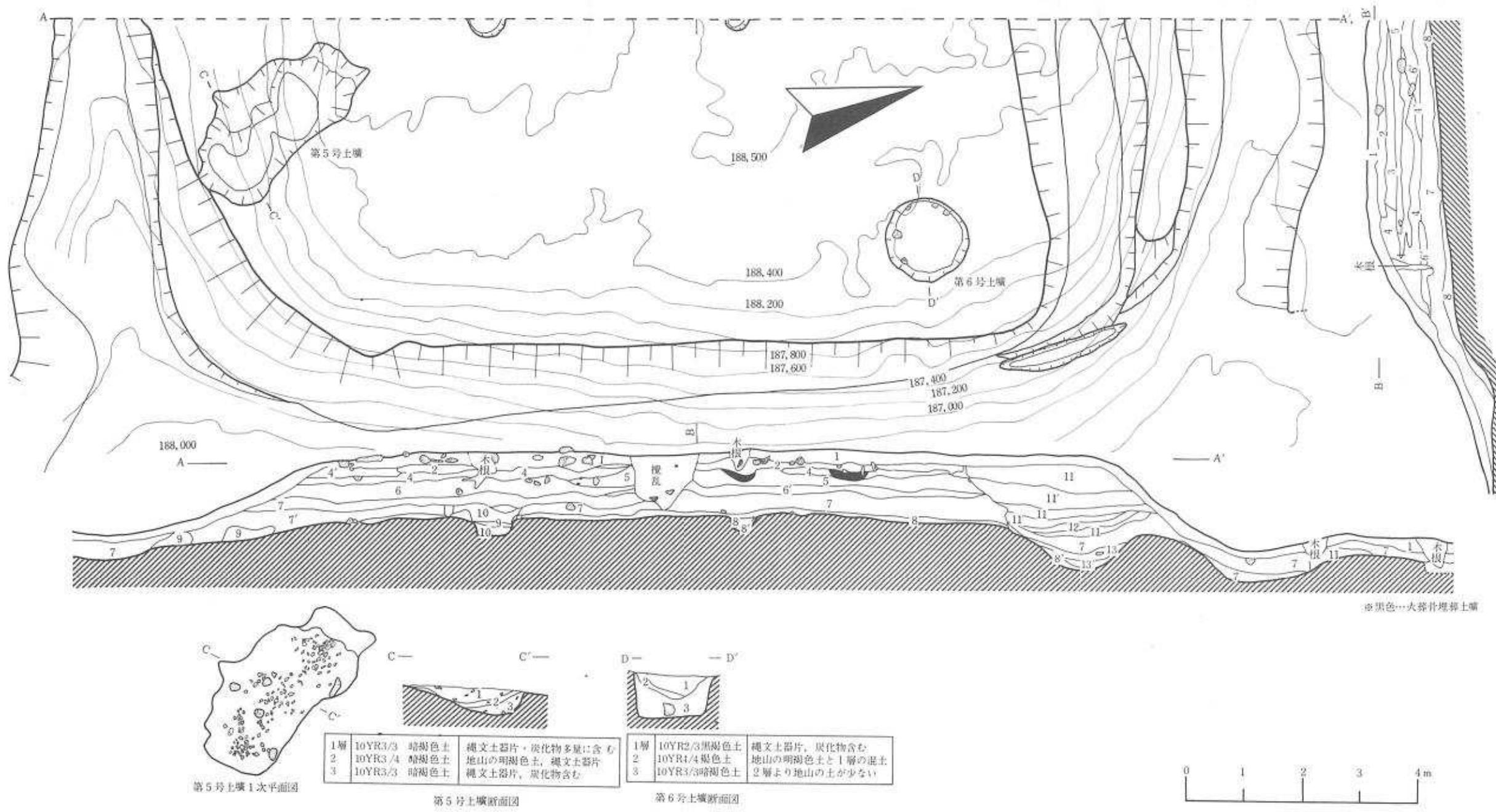


1層	7.5YR3/4暗褐色土	表土(木根根很多)
2	7.5YR5/6明褐色土	縄文土器片出土 (地山の土と類似)
2	7.5YR5/6明褐色土	2層の(汚れたもの) 炭化物微量含む
3	7.5YR4/6褐色土	縄文土器片出土
4	7.5YR4/8明褐色土	2層とは同じ (地山の土と類似)
4	7.5YR5/6明褐色土	2層とは同じ
5	10YR3/3 暗褐色土	縄文土器片多量に 出土
6	7.5YR2/2黒褐色土	縄文土器片出土
6	7.5YR2/2褐褐色土	明褐色土が混じる
7	7.5YR3/4暗褐色土	縄文土器片多量に 出土
8	7.5YR5/6明褐色土	小プロック状の積 み重ね
9	10YR4/6 褐色土	地山の汚れたもの
10	10YR3/3 暗褐色土	
11	7.5YR3/3暗褐色土	地山の土と暗褐色 土のブロック状混 合
12	10YR4/6 褐色土	地山の汚れたもの
13	7.5YR2/2黒褐色土	

■ 黒色……大藤埋葬土壙



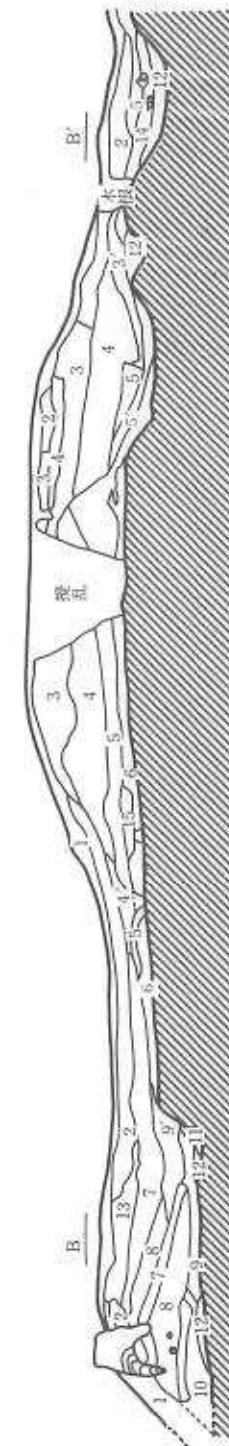
第4図 第1号墓火葬骨の納められていた小土壤と配石



第5図 第3号墓平面図、断面図



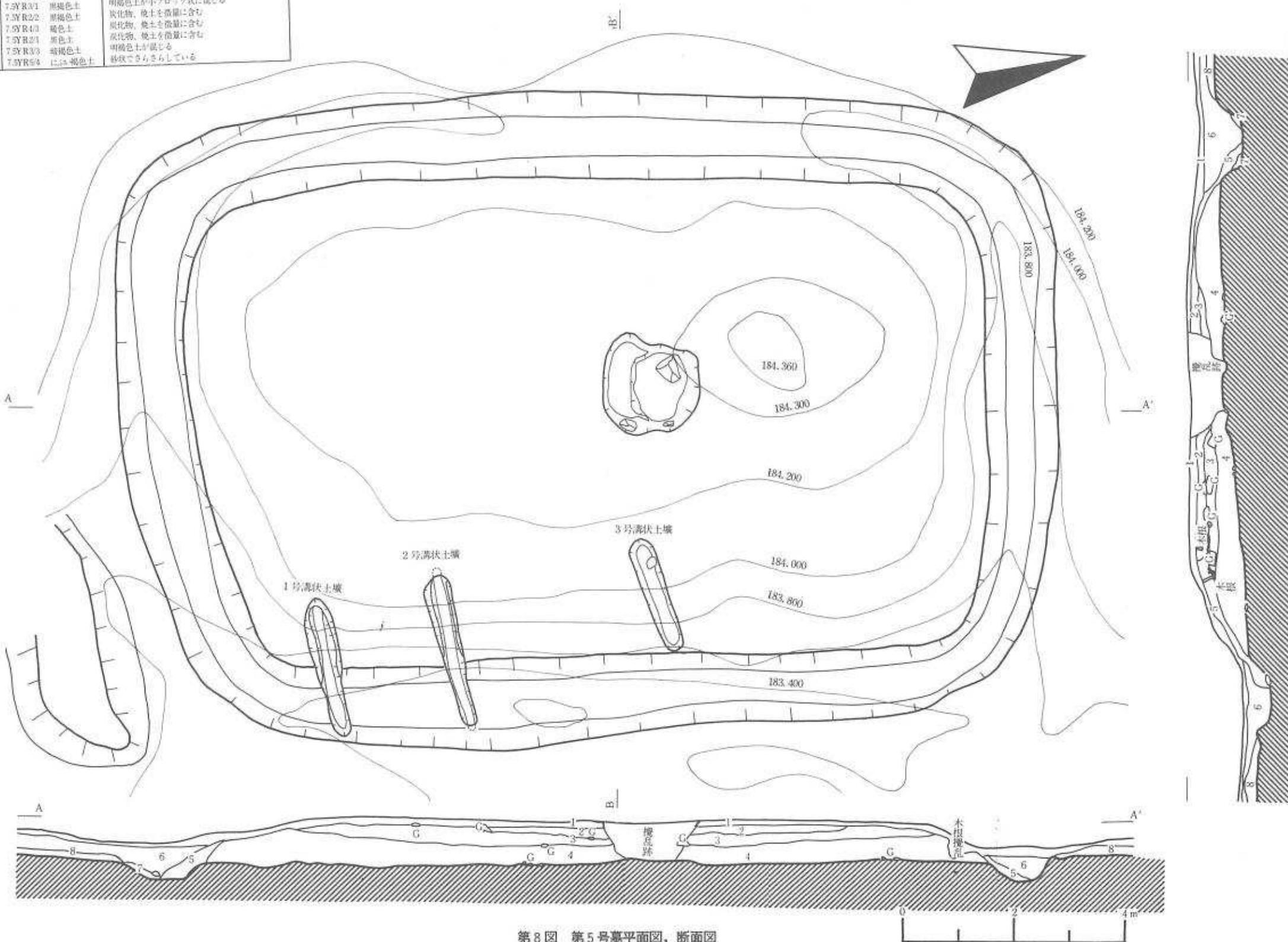
第6図 第3号墓火葬骨の納められていた小土壤と配石



1 層	7.5YR4/3褐色土 7.5YR4/3褐色土	表土、木根、根多い 炭化物微量、小礫まじる
2	7.5YR5/6暗褐色土 7.5YR4/4褐色土	地山と類似 褐色土と明褐色が混じる
3	10YR2/2 黒褐色土 10YR2/2 黒褐色土	炭化物微量に含む 炭化物微量に含む、地 山の上を混じる
4	7.5YR3/3暗褐色土 7.5YR4/4褐色土	地山のりれたもの 炭化物含む
5	7.5YR3/4暗褐色土 7.5YR3/4暗褐色土	汚れがひどいもの
5'	10YR3/4 暗褐色土 10YR3/4 暗褐色土	地山と暗褐色土の混合 地山のりれたもの バサバサし小礫を含む
6	7.5YR3/3暗褐色土 7.5YR4/4褐色土	黒褐色土に褐色土の混 じったもの
7	7.5YR3/3暗褐色土 7.5YR4/4褐色土	燒土
8	7.5YR3/4暗褐色土 7.5YR3/4暗褐色土	
9	7.5YR3/4暗褐色土 7.5YR3/4暗褐色土	
9'	7.5YR3/4暗褐色土 7.5YR3/4暗褐色土	
10	7.5YR3/2暗褐色土 7.5YR3/2暗褐色土	
11	10YR3/4 暗褐色土 10YR3/4 暗褐色土	
12	7.5YR4/6褐色土 7.5YR4/6褐色土	
13	7.5YR3/3暗褐色土 7.5YR3/3暗褐色土	
14	7.5YR3/2黒褐色土 7.5YR3/2黒褐色土	
15		

第7図 第4号墓平面図・断面図

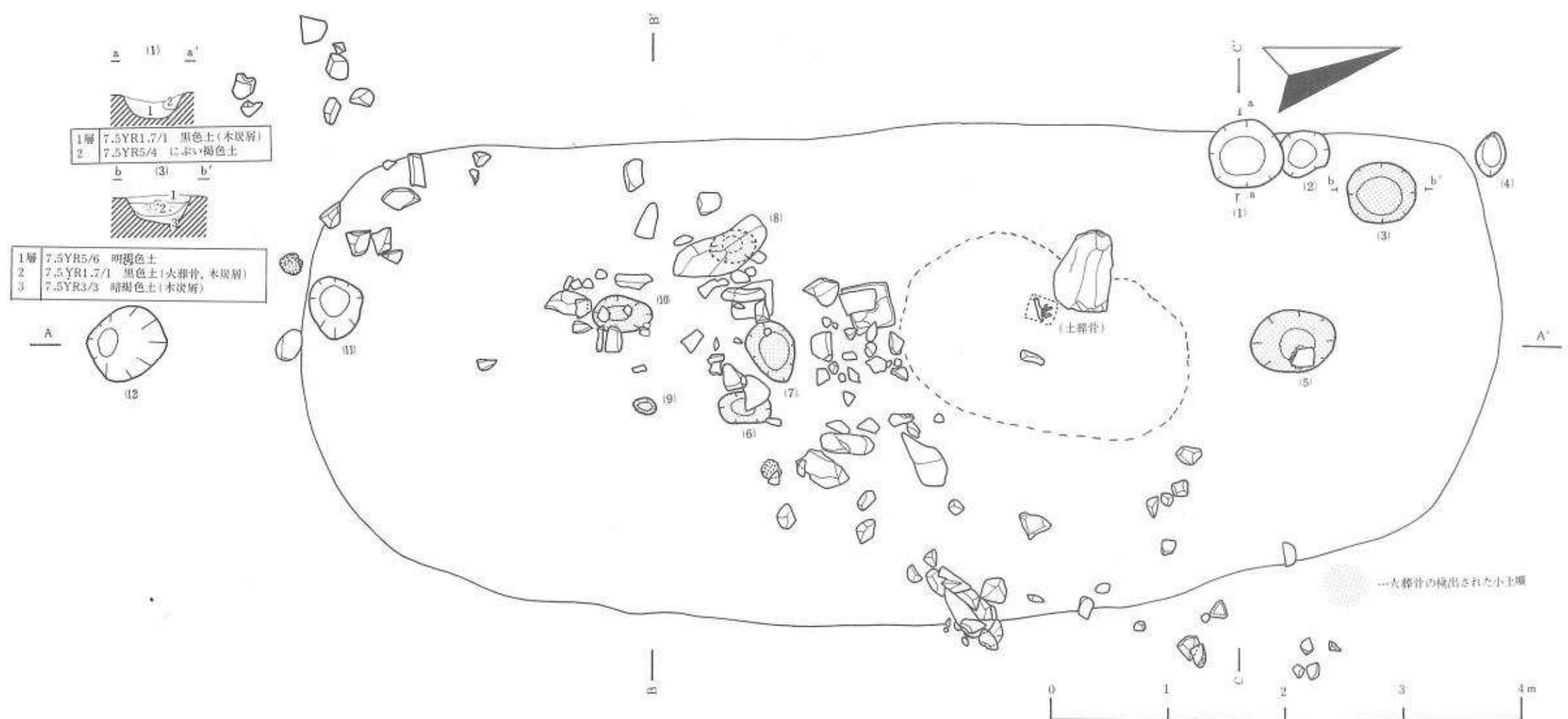
1号	7.SYR43	褐色土 表生、本型、並程多い
2	7.SYR56	明褐色土 地山と隣接、小礫を含み、ボロボロ塊状になっている
3	7.SYR31	黒褐色土 明褐色土が小ブロック状に混じる
4	7.SYR22	黒褐色土 鉄化物、鐵土を微量に含む
5	7.SYR43	褐色土 鉄化物、鐵土を微量に含む
6	7.SYR23	黑色土 炭化物、燒土を微量に含む
7	7.SYR33	暗褐色土 明褐色土が混じる
8	7.SYR54	暗褐色土 砂状でさらさらしている



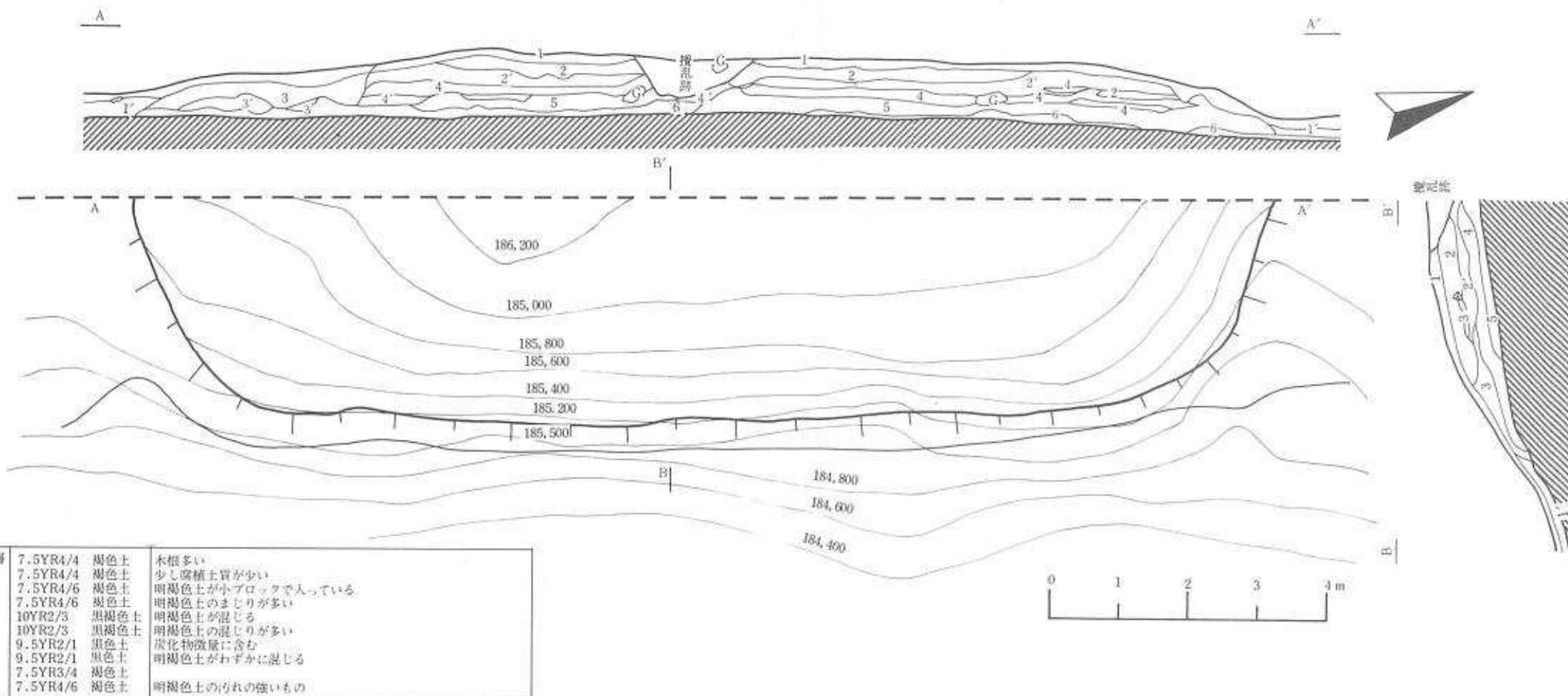
第8図 第5号墓平面図、断面図



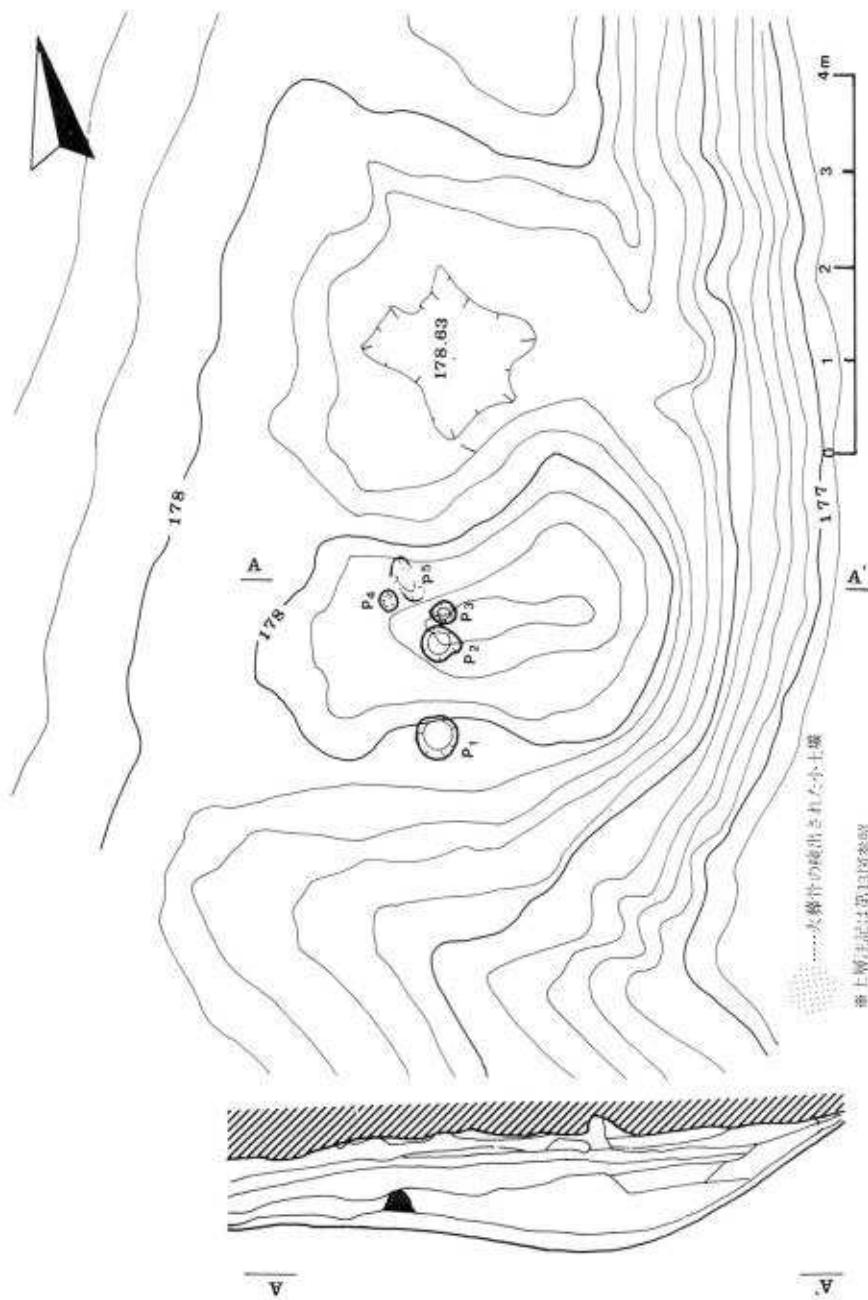
第9図 第6号墓平面図、断面図



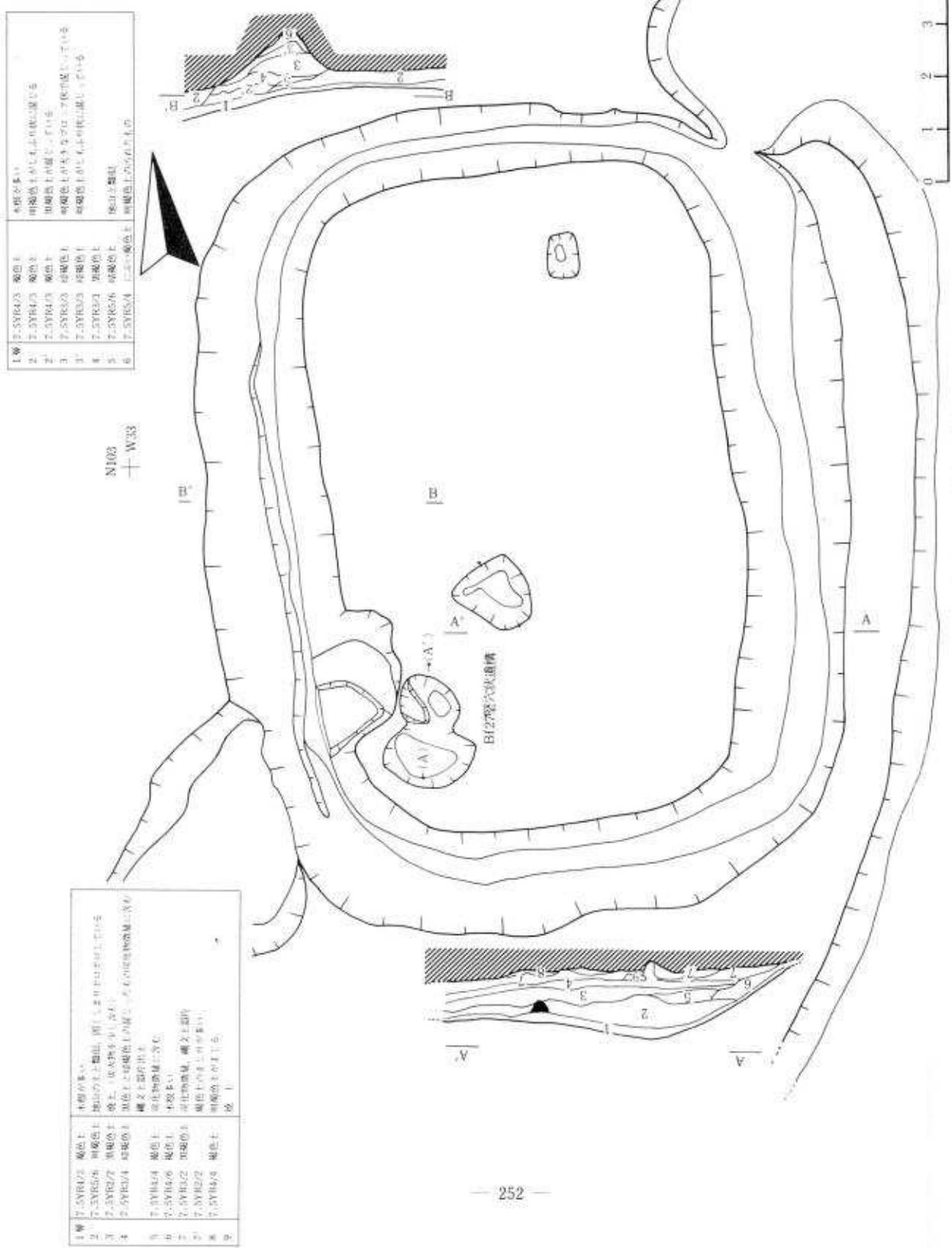
第10図 火葬骨の納められていた小土壙と配石



第11図 第7号墓平面図、断面図



第12図 第8号墓平面図、断面図、火葬骨の納められた小土壇



第7号墓（第11図、図版12—1・2）

第6号墓の北西約35m、調査区の最西端に位置する。本墳墓は、全体の約 $\frac{1}{2}$ が調査対象となつたものである。墳墓の現状は、南北約16.4m東西は調査分が約3.4m（実在約10m）である。形状は、平坦面が長方状を呈し、高さが約0.6mの長方形台状墓である。

封土は、明褐色土、黒褐色土等をそれぞれほぼ同じ厚さに積み上げているもので、特に、版築状にした様子はみられない。

周構は調査したものには特に認められないが、区外の西部分に落ち込みが認められた。

墳丘平坦面には、他の墳墓の如く石等は認められない。また、調査区内には、火葬骨埋葬の小土壙、骨片等も認められなかった。

中央には、径1.5m、深さ0.6mの攪乱土壙が存在した。

遺物としては縄文土器片が少量出土したのみで他の墳墓に比べて非常に少ない。

(少 考)

約 $\frac{1}{2}$ の調査であるが、本墳墓は、東に傾斜する自然地形を利用して基盤面をつくり出し、それに封土を盛り上げたものであり、火葬骨埋葬の小土壙は検出されなかつたが、封土、形態等の状況から墳墓と想定したもので、主体は西側にあるものと考える。また、西側の落ち込みは、第6号墓と同じように西側が深くなつたコの字形の周溝ではないかと推定される。

第8号墓（Bc33周溝状造構）（第12、13図、図版12—3、13）

第6号墓の北東約70mの丘陵最東縁部に位置する。現状は、地表より約0.5m内外の南側から続く土壙の高まりと同じ高さで、東側は急斜面になつてゐる。当墳墓の南部分は当地域に登る小道になつておらず、崩れた部分が多く当初は墳丘といふより、土壙の一部とみて調査したものである。

調査の結果、封土は、主に明褐色土を最大0.8mの高さで積み上げて墳丘を形成しており、西側は、厚いところで0.4mで西へ行くほど薄くなつてゐる。また、北側も土壙状になつておらず墳丘の形状を示していない。

周溝は、上幅約1.5m、下幅0.4mの舟底状の断面形を呈すものが検出され、6号墓と同じく、やはり西側が深く、それぞれ東にまわるに従つて浅くなつてゐる。

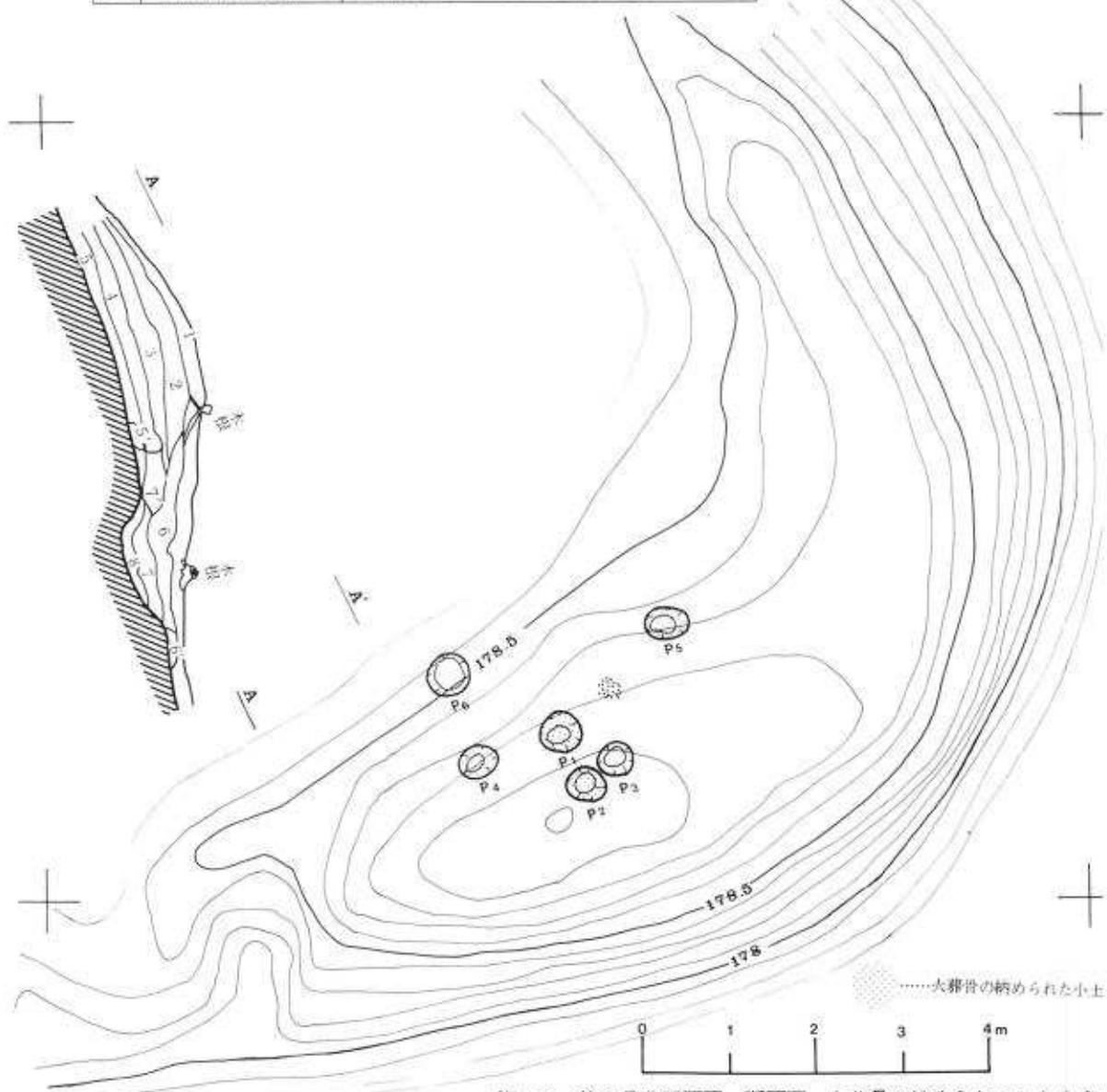
墳丘の施設としては、わずかに墳丘状に残つてゐた部分に入頭大の石が散乱しており、表土下の明褐色土上面より、火葬骨の埋葬された小土壙2基、炭化物と黒色土のみの小土壙が3基検出された。形状は、いずれも、他の墳墓と大差のないものである。

副葬品としては、No.1土壙より聖宋元宝、元祐通宝各1枚が出土したが、これは、本墳墓群で小土壙に伴う唯一のものである。その他に封土中より不明錢1枚が発見された。

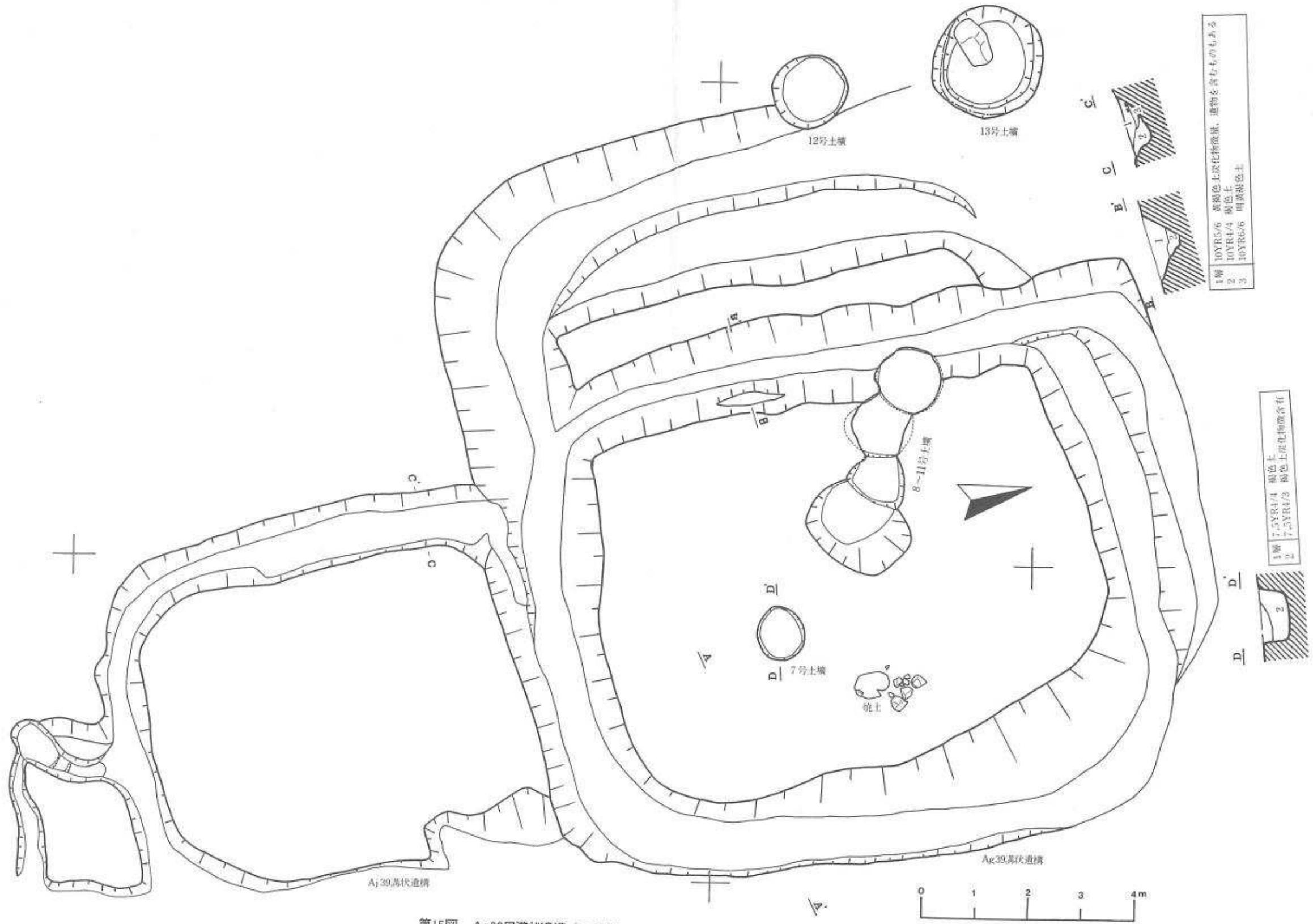
遺物としては、封土中より縄文土器、弥生土器等の破片が出土し、基盤面より焼土を伴う堅

— 墓 館 遺 跡 —

1層	7.5YR4/4	褐色土	木根多い
2	7.5YR5/8	明褐色土	地山に類似。炭化物微量に含む
3	7.5YR5/6	明褐色土	地山に類似。2層より汚れのつよいもの
4	7.5YR2/2	黒褐色土	炭化物微量に含む
5	7.5YR4/6	褐色土	炭化物微量に含む
5+	7.5YR4/6	褐色土	5層の汚れのつよいもの、炭化物微量に含む
6	7.5YR5/8	明褐色土	固くボロボロしている
6'	7.5YR5/8	明褐色土	6層の汚れのつよいもの
7	7.5YR4/4	褐色土	炭化物微量に含む
7'	7.5YR4/4	褐色土	汚れが少ない、炭化物微量に含む
8	7.5YR4/6	褐色土	明褐色土の汚れのつよいもの、小礫を含む



第14図 第9号墓平面図、断面図、火葬骨の納められていた小土



第15図 Ag39周溝状遺構（9号墓）、Ag39周溝状遺構平面図

穴状遺構、小ピット類が検出された。

(少 考)

第8号墓は、既述の如く、封土の一部が残存していたもので、周溝と東側の裾部がほぼ一致することや、周溝そのもの、形状が他の墳墓のそれと類似していること、封土中からの火葬骨埋葬の小土壙の検出されたこと等から墳丘そのものは大部分土壙状を呈しているけれども本来は、他と同じ台状を呈する墳墓であったものと想定される。従って、西側半分は、後世において、周溝が埋められ墳丘の一部が削平され東縁部のみが土壙の形態を備えるものとなったものと考えられる。

土壙中より出土した2枚の宋銭は、この墳墓の年代を限定する唯一の資料となり得るものである。なお、封土より出土した土器片は、縄文時代後期・晚期及び弥生時代に属するものとみられるものである。

第9号墓 (Ag39周溝状遺構) (第14、15図、図版14、15-1)

第9号墓は、第8号墓の北、Ba36周溝状遺構をはさんで約25m、調査区の北東端に位置する。現状は、第8号墓と同じく、東側縁辺部が盛り上り、北・東側は急斜面をなしており、西側はほぼ平坦になった土壙状の高まりで、やはり、土壙の一部として調査したものである。

封土は、第8号墓と非常によく類似しており、明褐色土を主に積み上げて墳丘を形成したもの。ようであり、東端では、約0.7m程度の盛り土をしていることが分る。

周溝は、上幅約2m、下幅約0.8m、深さは最も深い西側部分で約0.6mの舟底状の断面をもつものであり、やはり、東にまわるに従って浅くなっている。ただ溝の底部は一様でなく、北西隅が一段高くなり段差をもっている。また、西側には、南北に浅い皿状の溝が周溝につながるような形で走っているが、やはり一段高くなっている。

墳墓の施設としては、表土中に人頭大の石数個が存在し、その他、明褐色土中より火葬骨の埋葬された小土壙4基、炭化物及び黒色土のみのものが2基の他、火葬骨を直接埋めていたものが、1ヶ所検出されている。

副葬品は出土しておらず、封土中より縄文土器、弥生土器、土師器等の破片が出土している。基盤面及び周溝中より、円形及びフラスコ状を呈する土壙が検出され、周溝中のものは周溝により上部が削手されている。その他、焼土遺構が1ヶ所検出されている。

(少 考)

本墳墓も、火葬骨の埋葬された小土壙が検出されたことや、下部より検出された周溝の形態、盛り土の様子等から第8号墓と同じく墳墓と想定したものである。西側半分は、表土が極端に薄く平坦になっていること等から、やはり土壙として手直しきれたものだろうと考えられる。

火葬骨埋葬の小土壙は西端のものが他の5基に比べて、一段低い地山近くから検出されてお

## — 墳 館 遺 路 —

り封土等の様子からある程度の時期差があつただろう事が予想される。

西側の南北に走る溝は、位置、形態ともに第1・6号墓のそれと類似しており、いわゆる周溝とは段差のあること等から、これは単に土を取るために出来たものか或は他時期の遺構であろう。

封土中の遺物は、特に、縄文時代晩期に属するものとみられるものが多いのが特徴である。

### ・周溝状遺構

#### Bj39周溝状遺構(第17図、図版15-2・3)

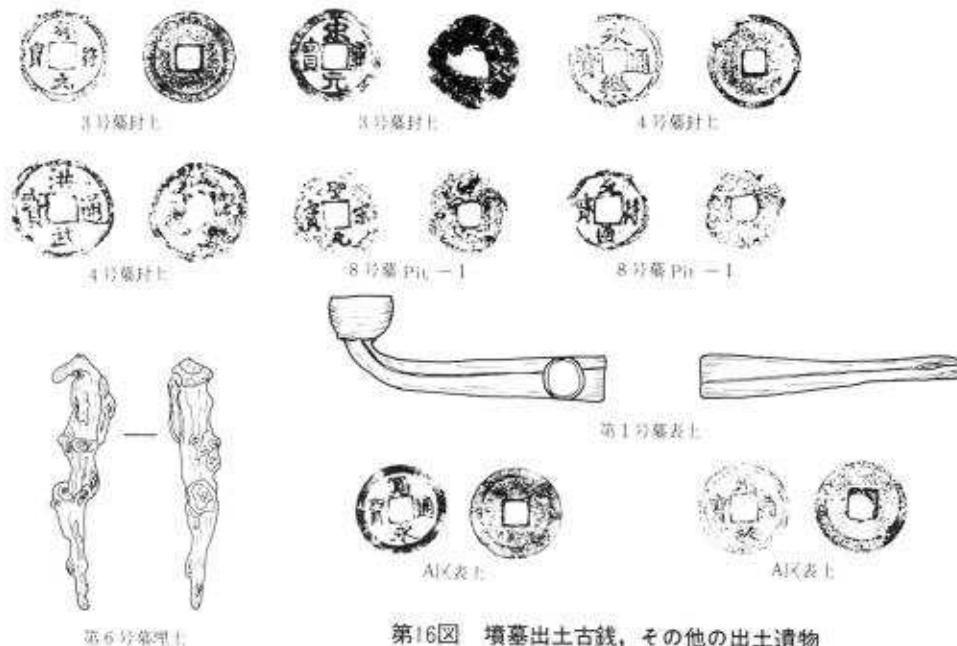
第8号墓の南西約17mのところに位置するもので調査の結果、東西2.1~2.7m、南北10.5m~10.8mの隅丸方形の基盤面をもつ周溝状遺構である。溝の上幅は最大1.5m、下幅0.3mのほぼV字に近い断面を呈しているもので、墳墓の周溝と同じように、西側ほど深く、東にまわるに従って浅くなり、先端は自然消滅している。従って、溝そのものはコの字形を呈している。

堆積土は擾乱があり、細分すると10層にもなるけれども、大きくは、黒褐色土、褐色土の2層に分けることが出来、特に、人為的に積んだ様子は認められない。中央部やや南寄りより1.3×0.8mの方形で深さは約0.4mの土壙が検出されたが、埋土は、明褐色土、暗褐色土の2層で、わずかに炭化物を含むがいずれも、自然堆積の様子を呈している。

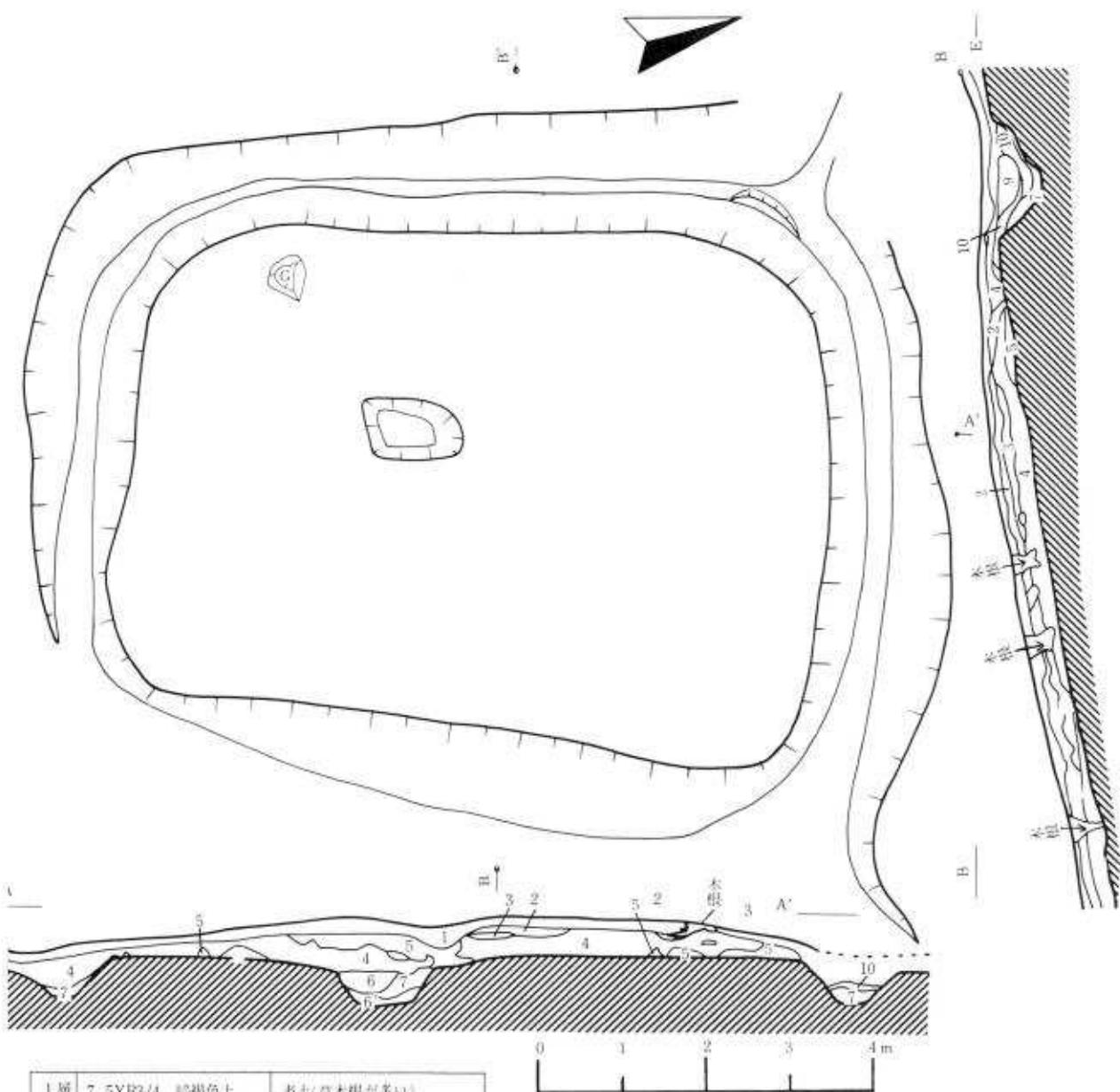
遺物としては、堆積土中より若干の縄文土器片が出土したのみである。

### (少) 考

本遺構は、その形態から見ると、他の墳墓の周溝と非常に類似したものであり、東に傾斜した地形を利用していれ点などは、第3・7号墓と非常に類似しているといえる。従って、現状



第16図 墳墓出土古銭、その他の出土遺物



1層	7.5YR3/4	暗褐色土	表土(草木根が多い)
2	7.5YR3/3	暗褐色土	炭化物微量含む
3	7.5YR4/4	褐色土	
4	7.5YR4/4	褐色土	炭化物微量含有、小礫を含む
5	7.5YR5/6	明褐色土	小礫を含む
6	7.5YR3/2	黑褐色土	腐植質土で炭化物微量に含む
6'	7.5YR2/3	暗褐色土	炭化物微量に含む
7	7.5YR5/6	明褐色土	黒褐色土が混じる
8	10YR3/4	暗褐色土	炭化物微量に含む
9	10YR4/3	にじみ黄褐色土	風化礫を少量含む
10	7.5YR2/1	黑色土	明褐色土混じる 腐植質土

第17図 B39周溝状遺構平面図、断面図

## — 墳 館 遺 跡 —

第1表

墳 墓 一 覧 表

号	封 土	土 壤		理 学	遺 物		備 考
		規 模	類 型		封 土 内	土 壌 内	
1	長 方 形 台 状 墓	約14×17 高さ 台 底 蓋	一边 約14×17 高さ 1.4(封土) 半 月 状 一	規 模 (m) P-1 P-2 P-3 P-4 P-5 P-6 P-7 P-8 P-9 P-10 P-11 P-12 P-13 P-14 P-15 P-16 P-17 P-18 P-19 P-20 P-21 P-22 P-23 P-24 P-25 P-26 P-27 P-28 P-29 P-30 P-31 P-32 P-33	理 学 P-1 P-2 P-3 P-4 P-5 P-6 P-7 P-8 P-9 P-10 P-11 P-12 P-13 P-14 P-15 P-16 P-17 P-18 P-19 P-20 P-21 P-22 P-23 P-24 P-25 P-26 P-27 P-28 P-29 P-30 P-31 P-32 P-33	遺 物 炭化物(木炭屑) 炭化物 炭化物 火葬骨 炭化物 火葬骨 炭化物 土 葬	備 考 小枝状のもの多い 大きな骨片もある しもふり状 上部の方に骨片が固っている しもふり状 しもふり状 しもふり状 しもふり状 しもふり状 しもふり状 上部の方にしもふり状 しもふり状 しもふり状 小骨片多い・しもふり状 骨片の量が多い しもふり状 骨片多い しもふり状 しもふり状 しもふり状 しもふり状 しもふり状 しもふり状 しもふり状 しもふり状 しもふり状 しもふり状 しもふり状 しもふり状 しもふり状 しもふり状 しもふり状 歯 3 本
2	長 方 形 台 状 墓	約1.5	一边 7×8	規 模 P-34 P-35	理 学 P-34 P-35	遺 物 未発見	調査区外のため保存未調査

— 墓館遺跡 —

号	封 土		土 壤		埋 蔵	遺 物		備 考	
	形 状	規 模	繋 合	規 模		封 土 内	土 壤 内		
3	長 方 形 台 状 墓	9.5×18 1.1(封土)	内 外	P-1 P-2 P-3 P-4 P-5	0.30 0.20 0.45 0.20 0.70 0.10 0.30 0.27 0.55 0.20	炭化物 炭化物 炭化物 炭化物 炭化物	未詳 通符明 元元錢 宝宝 1 1 2	(高側者は調査区外、未調査) (P-1との切り合、P-2の方が 新、骨片の量が多い) 縄文土器片 しもぶり状 しもぶり状 骨片大きいものもある しもぶり状 しもぶり状 縄文土器片 しもぶり状 しもぶり状 しもぶり状 調査区外	
				P-6	0.60 0.35	炭化物			
				P-7	0.55 0.20	炭化物			
				P-8	0.60 0.20	火葬骨 炭化物			
				P-9	0.42 0.11	火葬骨 炭化物			
		1.1(封土)	—	P-10	0.60 0.15	火葬骨 炭化物	大櫛石チワ 尊文器 フジ 骨土 器 片 ブリ ーク		
				P-11	0.60 0.20	火葬骨 炭化物			
				P-12	0.25 0.20	火葬骨 炭化物			
				P-13	0.35 0.15	— —			
				P-14	0.70 0.25	炭化物			
				P-15	0.50 0.20	火葬骨 炭化物			
				P-16	0.60	火葬骨 炭化物			
				P-17	0.60	火葬骨 炭化物			
				P-18	0.60	炭化物			
				P-19	0.30	炭化物			
4	長 方 形 台 状 墓	11.5×10.5 1.1(封土)	中央部に土 礫が存在し た可能性も ありうる。	不 明	大洪水 不 都武葉明 骨通通綫 室玉 1 1 2		縄土須チワ石 文師惠器レ器 土器器骨 器片片ク 片 ブリ ーク	骨片微量	
5	長 方 形 台 状 墓	一邊 9×18 0.8(封土)	円 形 丸 方 形	P-1	0.6 0.2	火葬骨 炭化物	縄土須火ワ石 文師惠器レ器 土器器骨 器片片ク 片 ブリ ーク	骨片微量	
				P-2	—	—			
		0.8(封土)	—				P-1の下になっているP-1より古い しもぶり状 大きな骨片もかなりある しもぶり状		
6	長 方 形 台 状 墓	11.5×10.5 1.1(封土)	中央部に土 礫が存在し た可能性も ありうる。	P-1	0.65 0.25	炭化物	縄土須火ワ石 文師惠器レ器 土器器骨 器片片ク 片 ブリ ーク	P-1の下になっているP-1より古い しもぶり状 大きな骨片もかなりある しもぶり状	
				P-2	0.40 0.30	炭化物			
				P-3	0.60 0.20	火葬骨 炭化物			
				P-4	0.30 0.10	炭化物			
				P-5	0.70 0.20	火葬骨 炭化物			
				P-6	0.45 0.15	火葬骨 炭化物			

一 墓 館 遺 跡 一

号	封 土		土 壤		理 学	遺 物		備 考	
	現	模	現	模		封 土 内	土 壤 内		
6	長 さ 12×23	規 則 形	高 さ 1.1	幅 1.1	P-7 P-8 P-9 P-10 P-11 P-12 P-13	0.45 0.15 0.40 0.20 0.20 0.10 0.50 0.15 0.45 0.30 0.70	木櫛骨 炭化物 木櫛骨 炭化物 木櫛骨 炭化物 木櫛骨 炭化物 木櫛骨 炭化物 木櫛骨 炭化物 木櫛骨	縄土頭大フ 支脚骨 土器破片 器片 ； ； ；	骨片多量 しもふり状 しもふり状 しもふり状 後世にまとめて埋葬したもの
7	長 3.4×16.4	規 則 形	高 さ 0.8	幅 —	—	—	繩フナ 文レ 土チ 器フ 片	約半分調査 他は区域外（東側部分）	
8	水 平	一規 —	高 さ —	幅 —	P-1 P-2 P-3 P-4 P-5	0.45 0.20 0.40 0.20 0.25 0.10 0.25 0.10 0.50 0.20	炭化物 炭化物 木櫛骨 炭化物 木櫛骨 炭化物 炭化物	縄古器石火 文生器 土線式 器片 器片 ； ；	堅采光宣 元始通宣 骨片微量 骨片微量
9	石 明	一規 —	高 さ —	幅 —	P-1 P-2 P-3 P-4 P-5 P-6 直接	0.45 0.20 0.50 0.25 0.35 0.20 0.50 0.15 0.60 0.15 0.80 0.25	木櫛骨 炭化物 木櫛骨 墓住物 木櫛骨 炭化物 木櫛骨 炭化物 木櫛骨 炭化物 木櫛骨	縄部フナ 文生器 土器片 器器 片 ； ； ；	土壘状になっており形状不明 しもふり状 しもふり状 しもふり多い

からは、封土らしきものは認められないけれども、上部に墳丘が存在した可能性は強いものであり、かつては墳墓であったことが予想されるものである。

Aj 39周溝状遺構（第15図）

第9号墓（Ag42周溝状遺構）の南隣りに北側溝を共有する形で検出されたものである。

東西約6.5m、南北約8mの隅丸方形の基盤をもつものであり、溝は上幅約1.1m、下幅約0.7mで、深さ0.3mの深皿状の断面を呈する。やはり、西側が深く東にまわるに従って浅くなり自然消滅している。

上部の盛り土は、基本的には、第9号墓と同じ堆積を示し、形状は土壘状を呈していたものである。ただ、この部分からは、火葬骨埋葬の土壤は検出されなかった。

遺物としては、縄文土器、弥生土器等が若干出土したのみである。

（少 考）

本遺構は、部分的にみると形態の上では、他の墳墓の周溝と類似しているが、北側が共有した形になっていることや、火葬骨埋葬の小土壤が検出されなかったこと等から小墳墓としての可能性は薄くその性格は不明である。

以上、調査の結果を要約すると次のようになる。

- ① 墳墓群は、周辺を見おろす丘陵の東縁部に位置し、一見、数基の墳墓が1つの群をなす

第2表

## 岩手県内における主な火葬墓

墓名	所在地	数	立地	現状	形	大體骨・火葬灰	副葬品	備考
1 佐原古墓群 (注1)	北上市鬼柳町	17	台地斜面(南) 1.2m×0.8m	現存 1月 7.8×0.6 2月 6.4×0.4 4月 6.55×0.5 高 0.88 14年 6.0×0.3 17年 7.2×0.6	円柱 円柱 円柱 方頭壙 円柱	配石のみ 木炭・若干 木炭 木炭・若干 木炭・若干	石 木炭 木炭 木炭 木炭	
2 宝積古墓群 (注2)	北上市内町	2	丘陵の一本松	現存 2月 11×11 3月 6.0 3月 9.1×0.8 4月 4.5	方柱 方柱	火葬骨灰 火葬骨灰	万子2.11 川原石 北平鏡 北品种 山吹山土器 不透明 木炭清灰 川原石・木炭 黑色火葬灰	川原石・木炭・黑色 山吹山土器
3 美神堂山古墓 (注3)	江刺市玉草	4	山頂平野部	現存 1月 0.8×1 2月 0.8×0.6 3月 0.8×0.5 4月 0.8×0.6	円柱 円柱 円柱 圓柱	火葬骨灰 火葬骨灰 火葬骨灰 火葬骨灰	水素通灰 水素通灰 水素通灰 水素通灰	水素通灰
4 丘陵下段墳塚 (注4)	北上市立花	13	丘陵下段(南東) 1.3×0.5×0.3~0.20 高 0.42~1.07 幅 13.75×16.30 高 0.50×0.30 幅 3.60×3.20 高 16.00~17.00 幅 10.50×10.30 高 6.60×6.00 幅 10.0×0.81	楕木方柱 方形土壙 方形土壙	火葬骨灰 火葬骨灰 火葬骨灰	113枚削 調查は、3.6.7.9.12月 東西南方削土壙	火葬骨灰 火葬骨灰 火葬骨灰 火葬骨灰 火葬骨灰 火葬骨灰 火葬骨灰 火葬骨灰 火葬骨灰 火葬骨灰 火葬骨灰 火葬骨灰 火葬骨灰	火葬骨灰 火葬骨灰 火葬骨灰 火葬骨灰 火葬骨灰 火葬骨灰 火葬骨灰 火葬骨灰 火葬骨灰 火葬骨灰 火葬骨灰 火葬骨灰 火葬骨灰
5 鬼柳古墓群 (注5)	北上市内町	6		1箇所は火葬骨灰もある	長方柱 上層	火葬骨	+	木炭灰 川原石・山石
6 「森の森の山」古墓群 (分野) (注6)	北上市内町岩井	1		現存 6.8×1.8m	長方柱	火葬骨	+	川原石・山石(林調査)
7 梅ノ木古墓群 (注7)	相模原市木村	14	台地斜面(北) 1月 7.8~11.0	現存 1月 7.8~11.0 2月 6.5~5.0 3月 1.8~2 4月 14.4~5.0×0.3~0.38 5月 3.8~4~0.5 6月 2.8~4~0.3 7月 2.0~17~20 8月 2.0~4~0.3 9月 3.0~15~18	方柱 方柱 方柱 方柱 方柱 方柱 方柱 方柱 方柱 方柱 方柱 方柱 方柱 方柱 方柱	火葬骨 火葬骨 火葬骨 火葬骨 火葬骨 火葬骨 火葬骨 火葬骨 火葬骨 火葬骨 火葬骨 火葬骨 火葬骨 火葬骨 火葬骨	・梅ノ木 ・千葉 ・西山 ・西山 ・西山 ・西山 ・西山 ・西山 ・西山 ・西山 ・西山 ・西山 ・西山 ・西山 ・西山	○木基は上野原 埋蔵時期算定なし
8 梶田古墳 (注8)	江刺市村崎町	1	台地斜面(東西)	現存 20m×10m	楕円	火葬骨	・木 ・火葬灰 ・火葬灰 ・火葬灰 ・火葬灰 ・火葬灰 ・火葬灰 ・火葬灰 ・火葬灰 ・火葬灰 ・火葬灰 ・火葬灰 ・火葬灰 ・火葬灰 ・火葬灰 ・火葬灰	川原石(テラコッタ可燃灰)
9 西ノ坂古墳 (注9)	金ケ崎町西根	1	台地斜面(東西)	現存 不 明	不 明	火葬器の壁に入った火葬骨	不 明	波打江空堀剖面
10 水谷古墳 (注10)	北上市西根町	1	台地斜面	現存 1.8×0.6×0.6	楕円	火葬骨	古 跡	
11 梶田古墳 (注11)	東洋町片寄字中平	2	丘陵斜面(東)	現存 不 明	不 明	火葬骨 火葬骨	古 跡	

(注1) 鬼柳町古墓群調査報告「古代」第11号昭28 櫻井清彦(北上市史第2巻所取)

(注2) 口内町宝積古墓群の調査「古代」第23号昭32 菊池啓治郎(北上市史第2巻所取)

(注3) 永楽通宝を出土した岩手県江刺郡玉里村薦師堂山の境墓調査概報 考古学雑誌 第38巻1号 櫻井清彦

(注4) 岩手県北上市立花十三菩提塚 岩手大学教育学部年報27 昭42 板橋 源、佐々木博康

(注5) 注2と同じ (注6) 注2と同じ

(注7) 和賀町史 和賀町教育委員会 昭52

(注8) 東北自動車道関連遺跡(未発表)

(注9) 不明(未発表)

(注10) 東北新幹線関係埋蔵文化財調査報告書 第Ⅰ集 岩手県教育委員会 昭54

(注11) 東北縦貫自動車道関係埋蔵文化財調査報告書 第Ⅱ集 岩手県教育委員会 昭54

ような配列を示している。

② 墳墓の規模は、一辺の短径が約8~9m、長径が約17~8m、高さが0.8~1.4m内外の封土を持つ台形墓で、墳丘上面には、墓石状、葺石状に比較的大きな礫石を置いていたものと思われる。現状においては、これ等の礫石と火葬骨を埋葬した小土壙とは必ずしも一致していないが、何等かの関連があったものと思われる。周溝は、自然地形をたくみに利用し、東側が開いたコの字状のものが多く、これらは盛り土をするために、まわり土を堀り上げた結果の所産で、排水も兼ねたものであろう。

③ 埋葬にあたっては、第3号墓より火葬骨を納めた木棺の一部とも推定される破片が出土しているが、確かに、いずれも、藏骨器、木棺等を使用した形跡は認められない。火葬骨とともに茶毗所からかき集めてきた木炭屑等を小土壙或いは、直接地面においていたものである。

④ 副葬品は、土壙から共伴したものが宋銭2枚のみで、他は封土より宋銭、明銭が出土しただけ非常に少ない。

⑤ いずれも当初は、火葬墓として墳墓が構築されたもので、幾時期かにわたって追葬された集団墓の形態を示すものが多い。また、後に土葬基として使われたものもある。

⑥ 北東にある第8・9号墓は、後世土壙状に手なおしされたものである。また、墳墓のはとんどが後世、発堀と称し或は、盗掘等により中央部分が地山面まで擾乱されている。

⑦ 墳墓周辺には、縄文時代から平安時代にかけての生活の場が存在していた。

#### (考 察)

##### 〔1〕 火葬墓の形態と立地

火葬墓には、大きく分けて「茶毗所(火葬場)で火葬した後、遺骨を拾集して埋葬するもの」と、「茶毗所(火葬場)と埋葬場所が同一のもの」とがあり、それぞれ塚を築く点では共通している。

埋葬方法については、地中に円、楕円、方形等の墓壙を穿って埋葬するが、その場合も小石室の中や藏骨器の中に火葬骨を入れて埋葬する方法や、その他いろいろな方法が行われている。

これ等の方法には、時代により差異が認められ火葬が流布した古代より時代が下り、中世末葉になると施設をもたないで、単に土壙中や地面に直接埋葬するものが多くなる。<sup>(註1)</sup> また、茶毗所(火葬場)と墳墓とが中世においては分離している場合が多いといわれており、塚の規模も時代が下れば下る程小規模なものが多くなる傾向がある。<sup>(註2)</sup>

一方火葬墓の立地についてみると、主として山の頂上、丘陵台地の縁辺部、山腹傾斜地の東、南面する日当りの良い眺望の開けた場所にあるのが一般的である。

次に、岩手県内において火葬墓が出現する迄の葬制の変遷についてはまだ明かになっていない部分が多いが、今迄調査の行われたもの(第2表)をもとに、墳館の墳墓群について考えて

みたい。

まず、今迄調査された墳墓の立地をみると、単独或は群集する形で、山頂平坦面や丘陵、台地の縁辺部に存在し、いずれも古代～中世にかけての火葬墓の立地条件を満したところに位置しているといえる。墳館墳墓群も、こうした立地条件にかなったところに位置しているといえる。

次に、埋葬方法や規模についてみると、県内の墳墓の場合、西根遺跡や火葬場と墳墓が同一とみられる立花、柳田館の例等を除けば、いずれも火葬骨及び木炭屑（木炭屑のみのものもある）が直接埋葬されており、しかも、火葬骨は一体分に満たないものがほとんどであり、埋葬個所も3～6個所というものが二・三例あるが、一ヶ所というのが大半である。

墳丘は、円、方形、橢円形等種々異なり、その規模も径或は、一辺が2m～10数mとまちまちであるが、比較的小さいものが多い。その中で、鳩岡崎遺跡や調査はされていないが亀ヶ森の一辺20数mという大土壙が目立つ。

副葬品については、刀子と古銭が共伴したものが一例で、他は、古銭のみの出土か或は全く何も出土していないという例が多い。

一方、本墳墓群をみると、一辺が10m以上の比較的大型の墳墓が群集しており、火葬骨、木炭屑等の状態は類似しているものの、はっきりと小土壙を穿っていることや、少いものもあるが、その数が他の例に比べて特に多いこと、追葬も比較的長期にわたって行われた事が同えること等が特徴としてあげられる。

なお、副葬品については、古銭のみの出土或は皆無という点で類似しているものといえる。

以上のように、立地、形態、副葬品等を総合すると本火葬墓群は、中世末に於ける火葬墓の形態と非常に類似するものであるといえよう。

## 〔2〕 古銭と時期

本墳墓群より出土した古銭は不明銭も含めて、北宋銭、明銭等10枚である。これ等は、第8号墓の小土壙より出土した宋銭2枚を除けば、いずれも封土中よりの出土である。いずれも、盛り土の際周辺より粉れ込んだというよりは、火葬骨埋葬の際の、供獻的意味をもつものであると考えたい。

これ等の古銭の時期をみると、古銭の上限を示すものは、宋通元宝（968～975年）下限は、洪武通宝（1368年）である。

我が国においては、鎌倉時代初期から宋銭が輸入され、その後、室町時代には、明銭が大量に輸入され各地に流通し寛文10年（1670年）に寛永銭以外の流通禁止令が出る迄、各地で使用されたのである。従って、県内における宋、明銭等の流通の実態が明らかになっておらないので確實なことは解らないが、流通の時期が中央よりも多少の時期差はあったとしても、ほぼこれ等の時期に県内においても流通していたものと推定出来る。そこで、これ等の墳墓も、これ等の古

## 一 墳 館 遺 跡 一

銭の流通している時期に構築されたものと考えるのが妥当なところであると思われる。即ち、その時期は鎌倉時代～江戸時代初期の頃にかけてのものと考えられ、その中で数が少ないながらも、宋銭の出土した墳墓と明銭の出土した墳墓と存在することは、墳墓間にも時期差があると考えることも可能である。

### 〔3〕火葬墓の性格

本墳墓群は、二、三の墳墓を除けば火葬骨の埋葬された小土壙は1基ということではなく、複数であり、多いものは第1号墓のように22基も存在する。木炭屑のみの小土壙も含めると5～30数基もの土壙が存在する。これらは、幾度かの追葬を行った集団火葬墓であることは、既に述べたところである。その形態、埋葬方法等からみても中世末における火葬墓の特徴を備えたものである。更に、墳丘の頂部平坦面が比較的広いものが多いということは、単に多くの火葬骨を埋葬するということのみではなく、その場が祭壇的意味をもつものではないかと考える。

以上のような結果から、以前多くの資料に「古墳」とみられていたこれらの墳墓群は古墳ではなくして火葬墓であることが判明した。<sup>(注4)</sup>

次に、「被葬者」は、いかなる性格の人々かということについては、少ない副葬品のみからは推定出来ず、当墳墓に関連する口碑伝承等もないこと等から「近在に在住した人々のものだろう」とは推定できても現状では明らかにすることは不可能である。

その他、本来は骨片が含まれていたのかもしれないが、木炭屑のみの小土壙は何を意味するものなのかな。火葬骨が一体分に満たないものが埋葬されているのは何故なのか。それは、分骨の風習によるものなのかな、それとも本体は他所に埋葬し、残ったものをまとめて納めたものなのかな、とすると、本体を埋葬した所（寺院）の有無、火葬場の有無等多くの問題を含んでいる。<sup>(注5)</sup>

(注1) 「山形県における古代・中世の火葬墓について」 川崎利夫 東北考古学の諸問題1976

(注2) 火葬墓 石村喜英 考古学ジャーナルNo100 1974

(注3) 秋田県の調査例で「禁止令後も寛永通宝とともに多少流通したらしい事があげられている」  
秋田貨幣史 佐藤清一郎 昭47年

(注4) 東北文化研究1～4昭3、史蹟名勝天然記念物調査報告書「古館古墳」大正3年、紫波町史  
昭49紫波町教育委員会、「墳墓」佛教考古学講座7巻 雄山閣昭50

(注5) 古老の話によると「墳館遺跡の北東に火葬場があったということである」が詳細不明

おわりに、既述の如く、第1号墓の土壙より人歯牙が出土したのであるが、これは「土葬」された人のあったことを示すもので、第6号墓に再葬されていた人骨とともに、第1号墓は、土葬墓としても使われていたものである。なお、他の墳墓も土葬墓として使われたものがある可能性はあるが不明である。なお出土した人歯牙は医大柱教授の鑑定により年令60～70才のものと推定されたが、土葬された時期や被葬者の性別、性格等については不明である。

以上のようなことから今後、不明な点、問題点等については地域における特に、中世に於ける歴史的環境を明らかにする中で解明していくことが大きな課題である。

## 2. 縄文時代の遺構と遺物

### (1) 遺 構

#### He 57住居址状遺構 (第3図)

〔遺構の確認〕 第1号墓の封土を除去した第7層の上面で検出したものである。

〔平面形〕 北側約 $\frac{1}{2}$ mが墳墓の周溝によって破壊されているが、隅丸方形に近いプランを有していたものと思われる。

〔規模〕 東西3m土×南北3m土×壁高0.1m土 (いずれも推定)

〔壁〕 壁の立ち上りは、やや急な立ち上りを示しているが非常に浅いところもあり痕跡的である。

〔覆土〕 地山の明褐色シルト質粘土の汚れた褐色土が一様にみられた。

〔炉・その他〕 ほぼ中央部床面に深さ0.06m土の皿状の焼土の入ったビットが検出された。

〔柱穴〕 なし

〔その他の施設〕 床面の焼土の入ったビットの他、2個の小ビットが存在するが、いずれも深さが0.27m土前後の深鉢状のもので遺物は出土していない。性格不明。

〔年代決定資料〕 床面の焼土ビットの脇より二次加熱を受け赤変した深鉢形土器の底部と東壁近くより上部 $\frac{1}{2}$ mが欠陥した深鉢形土器が2個体正立の形で発見された。(第21図20-21) その他ミニチュアの磨製石斧(第27図4)、石皿の破片等が出土している。

〔性格等〕 形態、出土遺物等から縄文時代後期の住居跡とみられるが、構造的には決め手を欠くものである。

#### 第1号土壤 (第3図)

〔遺物の確認〕 第1号墓の封土を除去した第7層の上面で検出したものである。

〔平面形〕 円形

〔規模〕 直径1.48m土×深さ0.50m土

〔断面〕 底部が丸底で上方に向って斜めに丸く立ち上る半月形。

〔覆土〕 3層からなり、炭化物を多量に含む暗褐色シルト質土である。

〔年代決定資料〕 覆土より、二次加熱を受け赤変した縄文土器片・石鏃(第25図4)等が出土している。

## 一 塗 館 遺 路 一

〔性格等〕 覆土は炭化物、焼土が多く入り込んだもので人為的に入れたものとも考えられるが、堆積状況は自然堆積の様相が強く性格的にはっきりしない。遺物は縄文時代後期関連のものであり、この時期に関連する土壤であろう。

### 第2号土壤（第3図）

〔遺構の確認〕 第1号墓の封土を除去した後、第7層の上面、人歯牙の出土した土壤に接して検出されたものである。

〔平面形〕 楕円形状

〔規 模〕 長径1.72m土×短径1.32m土、深さ0.48m土

〔断 面〕 底面が丸味をおび斜め上方に立上る舟底形。

〔覆 土〕 6層からなる。底部の5層を除いて焼土、炭化物の混った褐色、暗褐色のシルト質土、上部西端に焼土のブロックが存在する。

〔年代決定資料〕 覆土中より縄文、綱目文等の深鉢形土器の破片が出土している。但し、磨滅が著しく文様が定かでないものが多い。その他、不定石器1点、フレーク、チップ等が出土している。

〔性格等〕 人為的に焼土灰等を捨てたものかもしれないが性格は不明。

### 第3号土壤（第3図）

〔遺構の確認〕 第1号墓の南西隅の周溝中より検出したもので上部はほとんど周溝によって削られている。

〔平面形〕 円形

〔規 模〕 直径1.42m土×深さ0.62m土

〔断 面〕 南側が浅く、北側が深く抉り込みのある袋状。

〔覆 土〕 極暗褐色、褐色のシルト質土で2層に分かれ。1層はわずかに炭化物、焼土等を含む。

〔年代決定資料〕 覆土中より縄文土器片、円盤状石製品1(第29図-11)の他、フレーク、チップ等が出土している。縄文土器片は特に、磨滅が著しく、地文さえも確かでないものが多い。

〔性格等〕 不明である。

### 第4号土壤（第3図）

〔遺構の確認〕 第1号墓の西をまわる周溝の底部で確認したもので、土壤の底部のみが残っていたものである。

〔平面形〕 円形

〔規 模〕 直径1.10m土×深さ0.28~0.48m土

〔断 面〕 底部がや・平坦で、両壁はや・まっすぐ立ち上っているコップ形。

〔覆 土〕 炭化物が微量に混じった褐色のシルト質土 1 層のみである。

〔年代決定資料〕 底部より出土した深鉢形土器の底部と磨石（29図-3・5）円盤状石製品等である。

〔性格等〕 遺構の上部をほとんど周構によって壊わされており不明である。

#### 第 5 号土壤（第 5 図、図版 16~2）

〔遺構の確認〕 第 3 号墓の封土を除去した後、基盤面の南端で確認したものである。

〔平面形〕 長方形状の不整形。

〔規 模〕 長径 3.5m 土 × 短径 1.5m 土、深さ 0.48m 土

〔断 面〕 底部は凹凸があり、壁は南西が浅く緩かに立ち上り、北東はやや鋭く立ち上っている深皿状。

〔覆 土〕 炭化物の混入状況等から 3 層に分けたが基本的には暗褐色シルト質土 1 層とみ度よいものである。上部から底部まで多量の土器片が入っている。

〔年代決定資料〕 多量の縄文土器片が出土している。いずれも磨滅の著しいものが多いが、主なものは、（第 19 図 6、第 20 図 16・21・24、第 21 図 3、第 23 図 17・18・22~42）等がある。

〔性格等〕 検出された段階では比較的浅い不整形の土壤に多量の磨滅した土器片が雜ぜんど入っている事等から土器を破棄した土壤ということも考えられる。

#### 第 6 号土壤（第 5 図、図版 16~3）

〔遺構の確認〕 第 3 号墓の封土を除去した後、基盤面の北東隅近くに検出したものである。

〔平面形〕 円形

〔規 模〕 直径 1.44m 土 × 深さ 0.7m 土

〔断 面〕 底部が平坦で壁がほぼ直角に立ち上っている円筒形。

〔覆 土〕 褐色、黒褐色のシルト質土で、上部の黒褐色土には炭化物が微量含まれている。

〔年代決定資料〕 主に第 1 層より縄文土器片が出土している。

〔性格等〕 覆土の状況からは埋土は自然堆積の様相を呈しており、底部の壁周辺に川原石が存在したが意図的なものかどうか不明であり、性格的にも不明。

#### 第 7 号土壤（第 15 図）

〔遺構の確認〕 第 9 号墓の封土を全部除去した後、基盤面の南東近く地山面より検出したものである。

〔平面形〕 円形

〔規 模〕 直径 1.90m 土 × 深さ 0.56m 土

〔断 面〕 底部が平坦で壁がほぼ直角に立ち上がる円筒形。

〔覆 土〕 褐色シルト質が主で炭化物が微量含まれている。

## 一 墓 鮎 遺 跡 一

〔年代決定資料〕 なし

〔性格等〕 不明である。

### 第8・9・10・11号土壙（第15図）

〔遺構の確認〕 第9号墓の封土を全部除去した後、基盤面のほぼ中央から北西に連なるような形で地山面より検出されたものである。

〔平面形〕 ほぼ円形に近い形状、互に切り合っている。

〔規模〕 8号 直径1.9m土×深さ0.3m土 9号 直径1.8m土×深さ0.5m土

10号 直径 2m土×深さ0.6m土 11号 直径2.5m土×深さ0.75m土

〔断面〕 8号土壙は深皿状、他は、内側に少し抉り込んでいるがほぼ円筒状。

〔覆土〕 いずれも褐色シルト質土である。

〔年代決定資料〕 なし

〔性格等〕 8号～11号土壙迄互に切り合ひが認められるものであるが、その性格は不明である。

### 第12号土壙（第15図）

〔遺構の確認〕 第9号墓西側の周溝壁際で地山面より検出したものである。

〔規模〕 直径1.5m土×深さ0.2m土

〔平面形〕 円形

〔断面〕 浅い円筒状

〔覆土〕 主に褐色シルト質土。

〔年代決定資料〕 なし

〔性格等〕 不明

### 第13号土壙（第15図）

〔遺構の確認〕 遺跡の北端、土壙下の地山面より検出したものである。

〔平面形〕 円形

〔規模〕 直径2.0m土×深さ1.25m土

〔断面〕 底部は平坦で壁際で丸味をおびて上部に立ち上っている袋状。

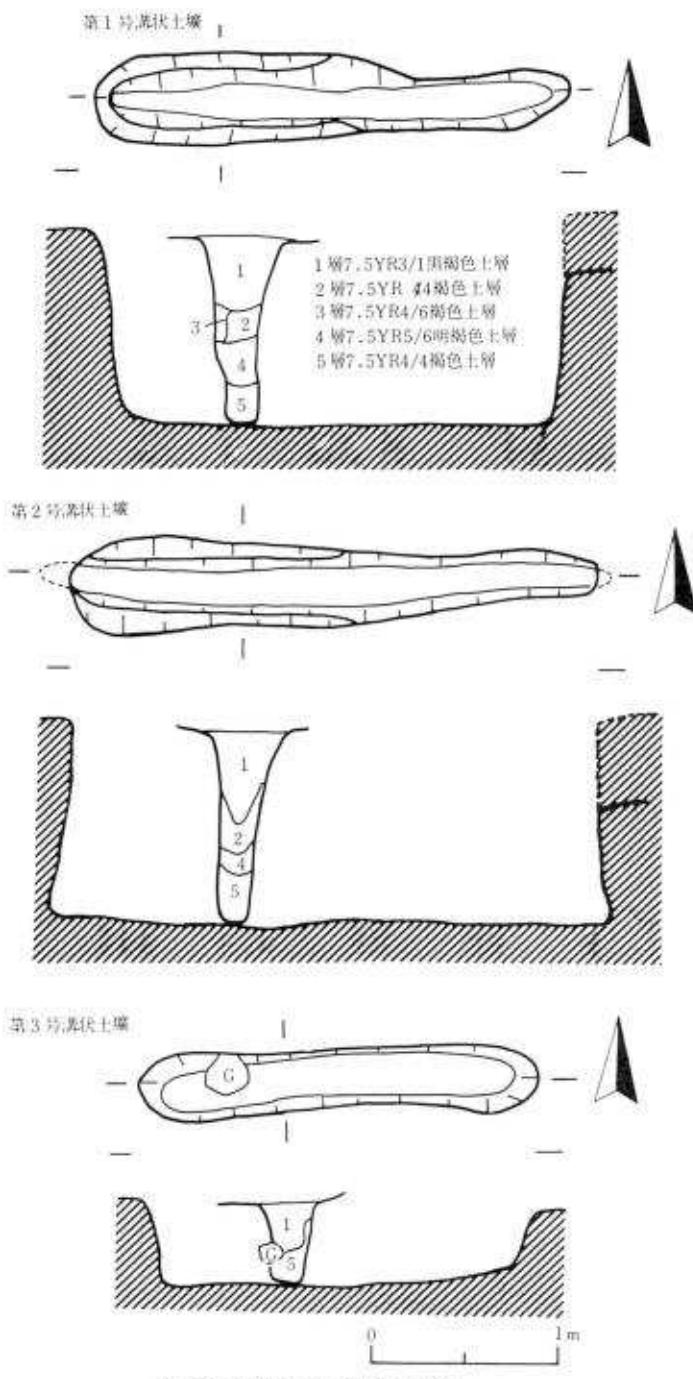
〔覆土〕 褐色シルト質土、明褐色シルト質粘土の汚れたもの等がレンズ状に堆積している中に、直径0.4m、長さ1mの石をはじめ大きな石が多く入りこんでいる。

〔年代決定資料〕 なし

〔性格等〕 不明

### 1～3号溝状土壙（第8、18図）

〔遺構の確認〕 いずれも第5号墓の封土を全部除去した後、基盤面の地山で検出したもので



第18図 溝状土壤実測図

## — 第 部 遺 跡 —

あり、1・2号溝状土壙は南東側が周溝によって削られている。

〔平面形〕 開口部、及び底部の平面形はともに東西に長い溝状を呈している。

〔規 模 方 向〕

	開 口 部	底 部	深 さ	長 軸 方 向
1 号	2.5m	2.24m	1.08m	N-90°-E
2 号	1.60m	1.92m	1.10m	N-90°-E
3 号	1.10m	0.98m	0.4m	N-85°-E

〔断面形〕 長軸断面は、1・3号溝状土壙は底部よりほぼ真直に上部に向って立ち上り、2号溝状土壙は底部近くで、わずかに外側に抉り込みがみられ、その後真直に開口部に向う。

短軸断面は、いずれも底部でわずかに開くがほぼ真直に開口部へ向う。いずれも柱状に近い形態を呈している。

〔覆 土〕 2~5層よりなり、いずれも自然崩落、上部からの流入による自然堆積の様相を呈している。

〔年代決定資料〕 なし

〔性格等〕 Tピット、陥し穴状遺構といわれているものと類似のものであろう。

以上、当遺跡より検出された主な遺構の概要を述べてきたが、この他に第9号墓の下の地山面より焼土遺構<sup>(注1)</sup>が検出されている。今迄述べてきたこれ等の遺構は、いずれも上部の何分の一かは削平されたものばかりである。これ等は、本来プラスコ状、円筒状等の形態を示す土壙であったものと想定される。それが弥生~平安時代にかけて或は墳墓構築時等生活領域が変化することによって削平されたもので、その時期は墳墓構築に関連するもの以外明かでない。

これらの遺構は、その土器の出土状況等から類推して大部分縄文時代後期に属するものと推定されるものである。

次に、溝状土壙については、その類例が増加しているにもかかわらず、本質的な性格や所属年代については不明な点が多いのが現状である。本遺跡の場合、立地、埋土状況、遺物の存在しない点等他で検出されている溝状土壙と非常に類似した点が多い。時期的には、周辺より大量の縄文時代後期に属する土器片が出土しているにもかかわらず一片の流入も認められないことは、一つの時期を限定する資料ではあるが決定的ではない。従って、ここでは縄文時代に属するものとだけにしておきたい。機能としては「陥し穴」とする説が有力である。

(注1) 東北新幹線埋蔵文化財調査報告書Ⅰ「大綾遺跡」(第1表) 昭54

東北新幹線埋蔵文化財調査報告書Ⅲ「前九年遺跡」(第1表) 昭54

## (2) 出土遺物

## 土 器

縄文時代に属するとみられる土器は、ダンボール箱25箱分にも達した。これらは、既述の住居址状遺構や土壙中よりの出土を除けば、そのほとんどが墳墓の封土中、周溝の埋土中、土壙等の二次的移動がなされた状態での出土である。しかも、これらは磨滅が著しく大量に出土した割には文様等の明かなものが少ない。従って、これらについて層位的な把握、時期差というものは明確にできない。そこで、これらについては主として、文様構成による分類を行い、その特徴を述べて行くこととする。

## 第Ⅰ群土器 (第19図1~5、図版26、1~5)

主として第1号墓周溝埋土中より出土したもので非常に点数が少ない。

(1)は、平行沈線、鋸歯状沈線を主とするものであり、(2)は、口縁が波状をなしており、口縁部及び波状山形の頂点より隆帶を貼付し燃系圧痕文により文様を構成している。(3・4)は、沈線、爪形文を有するもので(5)は、ボタン貼付文のまわりに刺突文をまわした波状山形の口縁部の破片である。いずれも器形は明確でないが深鉢形土器の破片とみられるものである。

## 第Ⅱ群土器 (第19図6~22、第20図1~27、第21図1~19、図版26-6~21・27・28-1~18)

これらの土器は、第1号墓の下の住居址状遺構、土壙、第3号墓下の土壙、Gj~Hb区にかけての第Ⅱ層黒褐色土及び墳墓の封土中より出土したものである。復元出来たものは1個体のみである。(第21図-19、図版25-1)

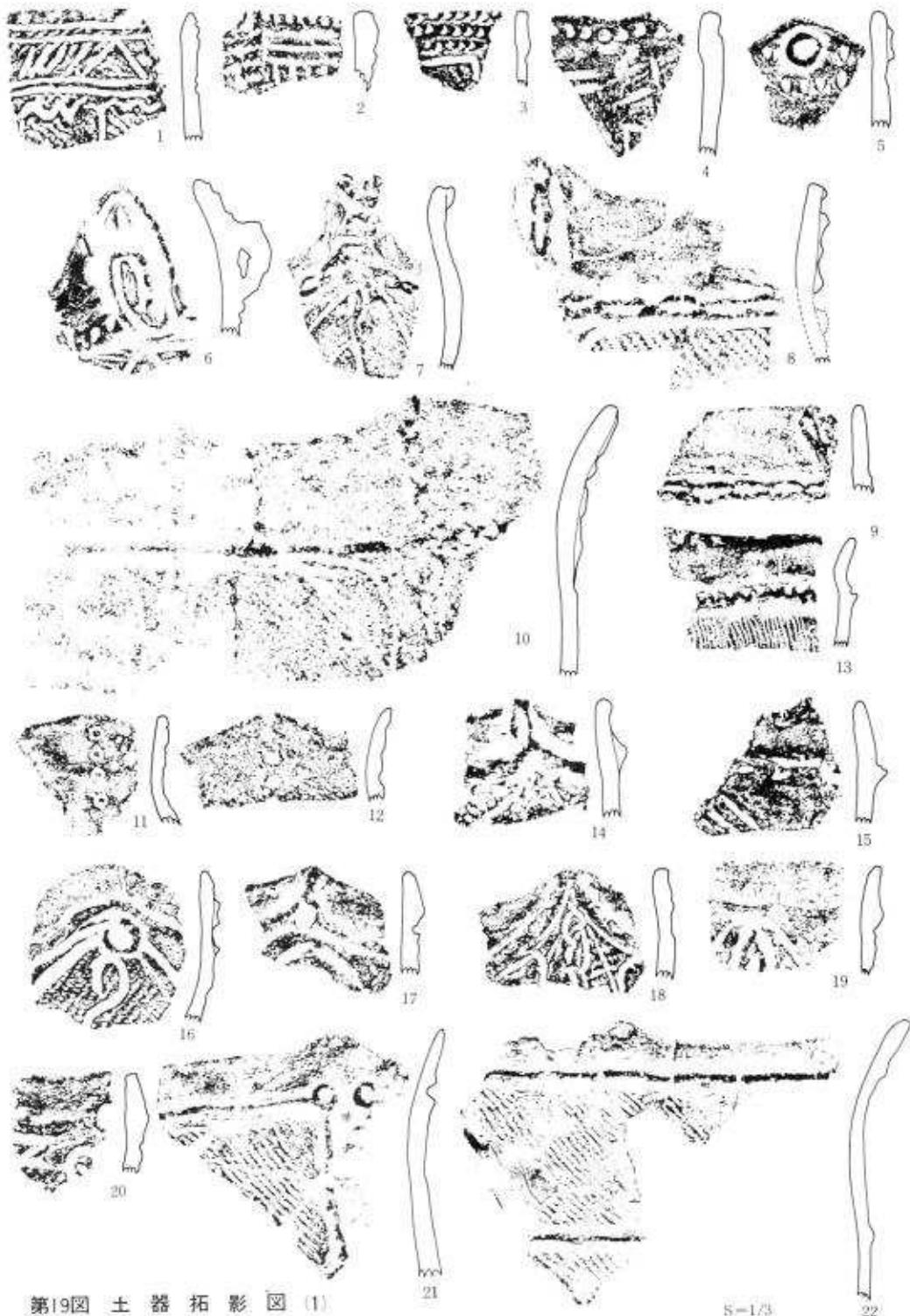
## 第1類 口縁部に連鎖状文をもつものである。

(第19図6・7)は、橋梁状把手のついたもので口縁部と体部とを連鎖状浮文で分け、その下に沈線により鉤状その他の文様を施しているものである。(8・9)は波状山形の頂点より連鎖状浮文を頸部までおろし、頸部にもそれをまわし体部と区画しているものである。(10)は竹管状工具による3~4個の縦の列点を波状山形の頂点より施しており、連鎖状浮文と組み合せているものである。体部は磨滅して定かではないが沈線により縄文帯を区画している。(11・12)は(10)の一部に当るものと考える。(13)は刺突による列点を連鎖状にめぐらしたもので、体部は燃糸文である。

## 第2類 口縁部に隆起線をもつものである。

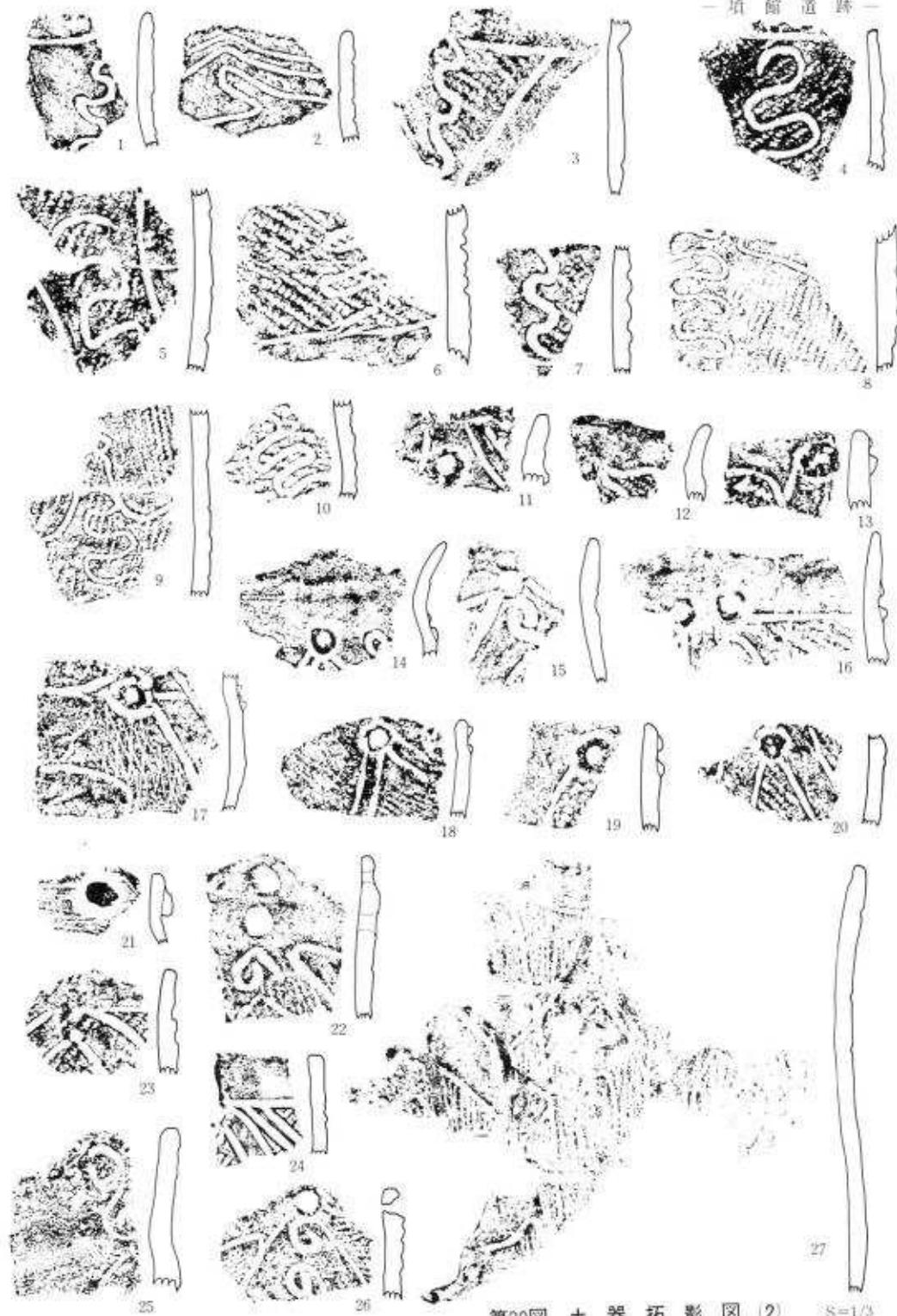
(21・22)は、同一個体で隆起線により口縁と体部を区画し、波状山形の下に2本の隆起線でもって懸垂状の区画文を施し、体部の縄文を区画している。文様のはじまる山形の下には一对のボタン状貼付文がある。(16)は頂点の下にボタン貼付文があり、その下に逆S字状の沈線文が施されている。(14・15・17)は、波状山形の口縁頂下より隆起線がはじまり、体部との境もそれによって分けられ、ボタン状貼付文がある。体部には沈線文が施されている。(18)は、頂点よ

一 墓 館 遺 物 一



第19図 土 器 拓 影 図 (1)

— 填 間 道 跡 —



第20図 土 器 拓 影 図 (2)

S=1/3

り八字に隆起線が体部に広がり、その間に沈線による縦の連鎖状文が施されているものである。

第3類 沈線文を主文様とするものである。これらは、文様の特徴から二つに分けることができる。

(1) 縦の沈線波状文を有するもの (第20図1~10)

(1)は無文の口縁部先端に沈線がめぐり、それより縦の沈線波状文があり、(2)は平行沈線を使って大きな波状を描いている。(3~10)は、体部地文の上に縦の波状文を施しているものである。

(2) 山形波状口縁直下より沈線の文様が構成されているもの (第20図11~27)

これらは、山形波状口縁直下或は、頸部近くにボタン貼付文をはりつけ、それを中心にして沈線文或は沈線文と帶状磨消帯を構成しているもの(11~21)と、主に沈線のみで文様を構成してとるもの(22~27)等がある。(17)は、地文が撚糸文のものであり、他はいずれも単節斜縄文である。(22・26)は、山形波状口縁直下に円孔を穿ち、その下に鉤状の沈線をもつものである。(第21図、19)は、唯一の復元土器である。口縁は、小波状をなし、や・外反するもので、頸部が少し張り胴部下半が強くしづられる比較的小形の深鉢形土器である。(器高25.5cm、底径7.5cm、最大胴径21.5cm)頸部をめぐる沈線により口縁部と体部を区画し、体部には山形波状の下を中心とした鎖状、鉤状の沈線を懸垂状に体部下半までめぐらしている。地文は単節斜縄文である。(第19図-27)は、口縁が山形波状を呈するや、外反する深鉢形土器で、口縁部は幅約2cmの無文帯をもち、その下に縦の波状沈線、鉤状沈線等を組み合せているものである。

文様は体部下半まで及び底部から上約4cmは地文の撚糸文を磨消しているものである。その他(第21図1~8)は、いずれも鉤形、S字、逆S字等の文様をもつものである。

第4類 平行沈線及び刺突文をもつもの (第21図9~18)

(9~14)は沈線による曲線状の区画文や口縁部の平行沈線等に沿って刺突文を施しているものであり(15)は、突起のある口縁部で沈線による平行帶縄文を有しているもので、(16~18)は、小突起を有する波状山形の口縁に磨消、刺突による文様を施しているもの、無文のもの等である。

第三群土器 (第22図、図版29)

いずれもD区以北よりの出土で、特に遺構と関連するものはない。出土点数は他のものに比べ少ない。

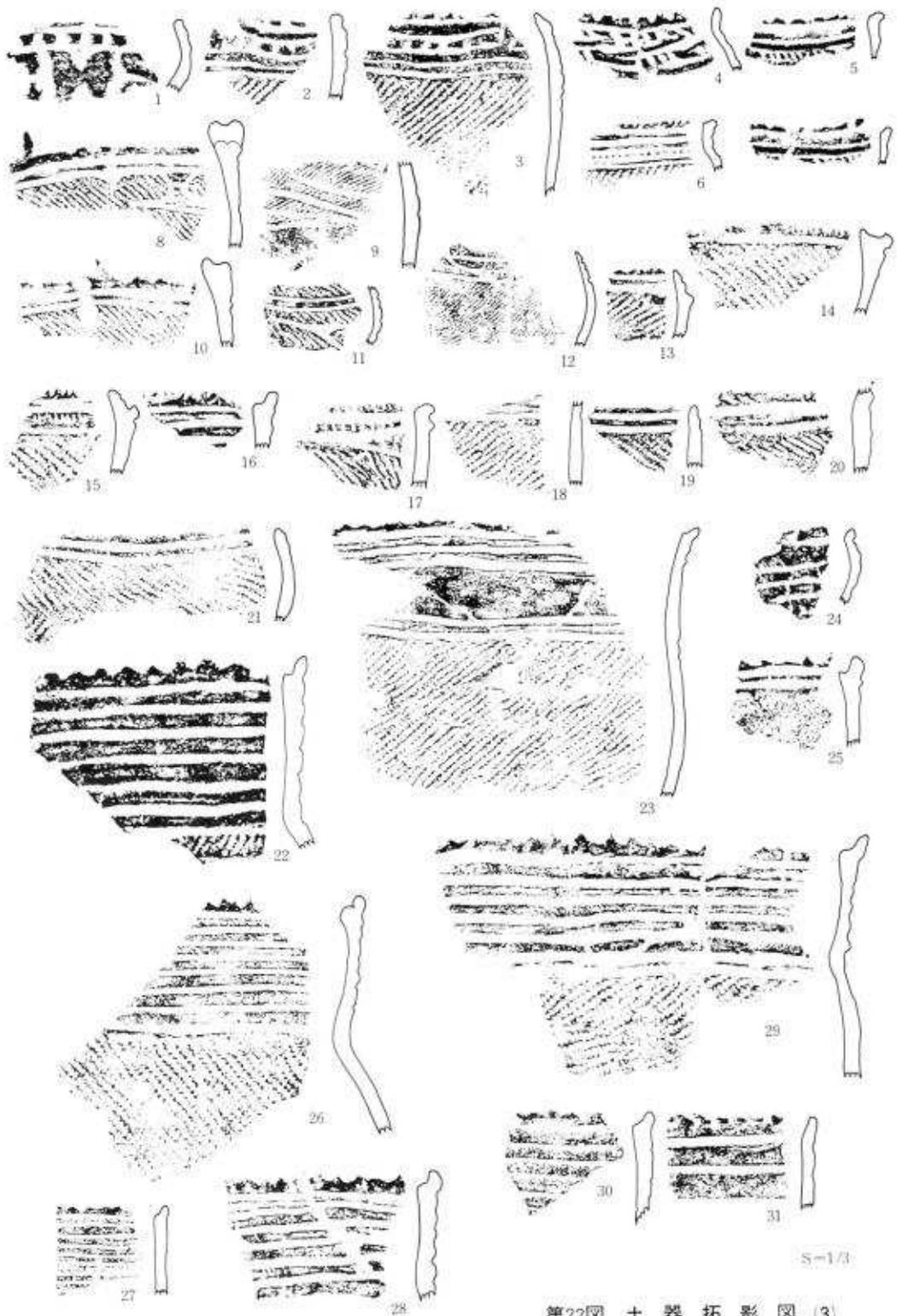
半齒状文を主文様とするもの(1~4)それがくずれて列点化したもの(5~7)雲形文のモチーフの簡略化されたもの(8~12)等がある。その他、口唇部に細かい刻みをもち1~2条の平行沈線が口縁部にまわっているもの(13~21)、平行線化が著しく、口縁部に2~8条の平行沈線でめぐらし、口唇部に小突起を有するどちらかというと粗製土器に近いもの等が

一 墳 館 遺 跡 一



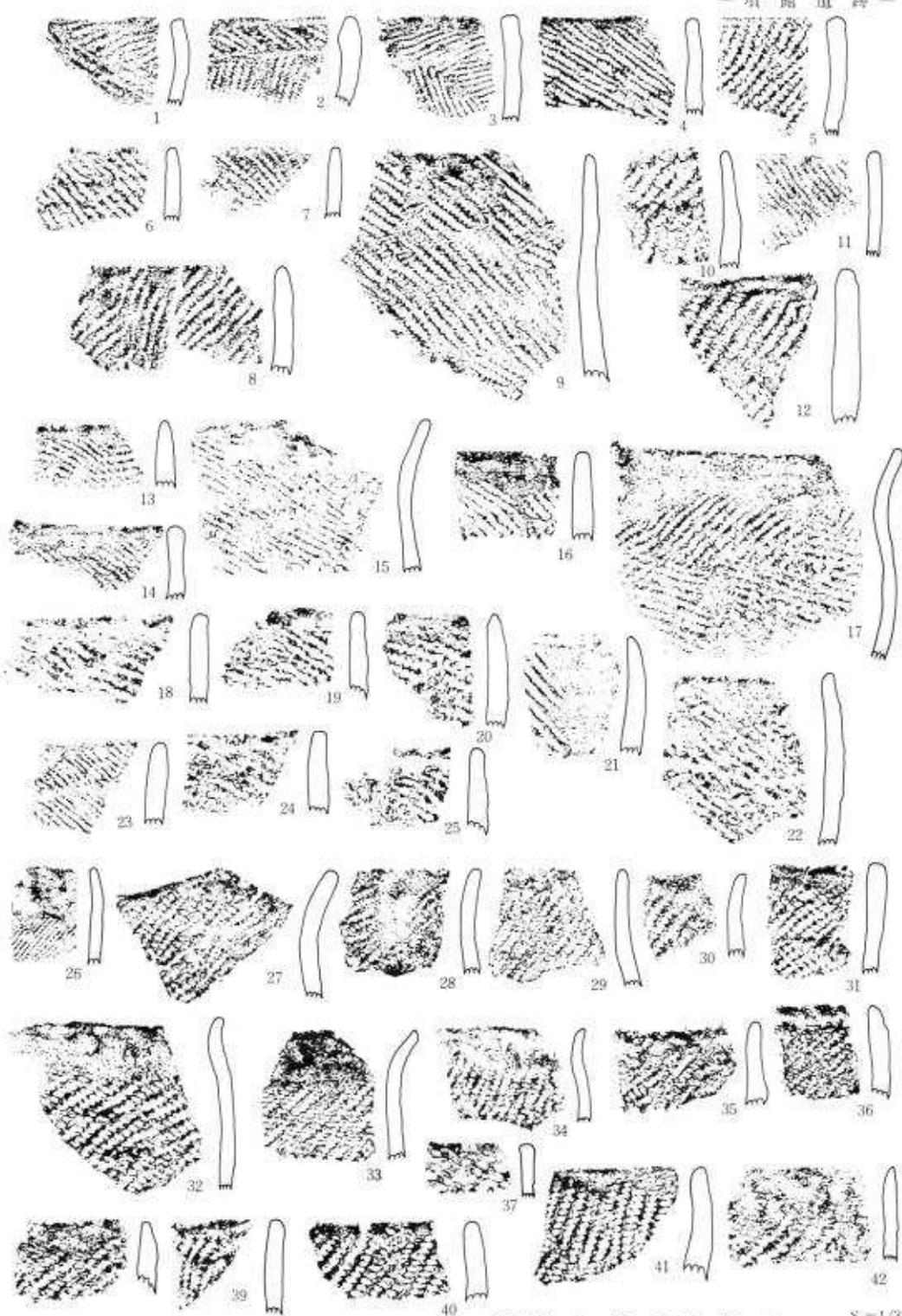
第21図 土 器 拓 影 図 (2)

S=1/3



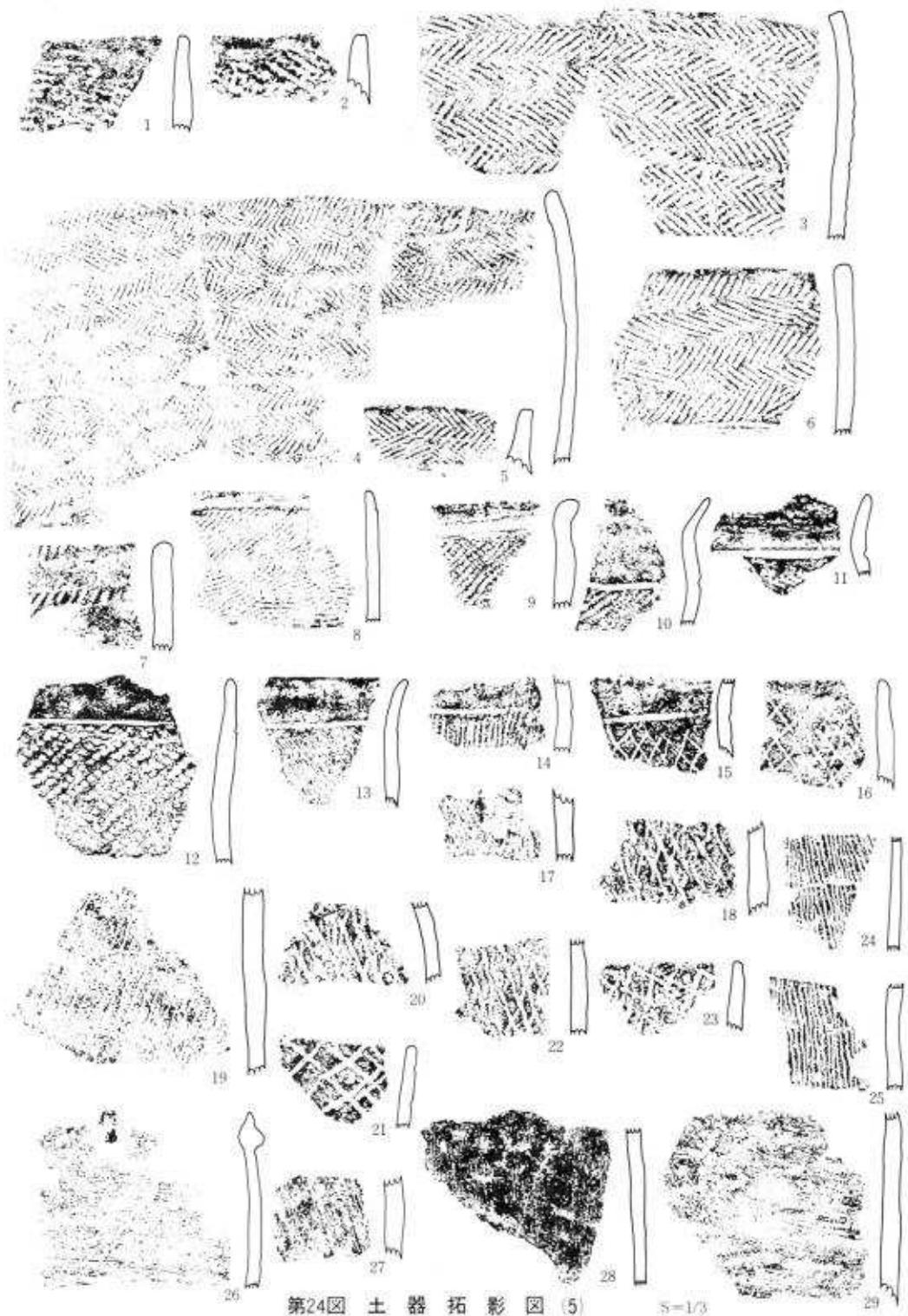
第22図 土器拓影図 (3)

一 墳 館 遺 跡 一



第23図 土器拓影図(4)

S=1/3



第24図 土 器 拓 影 図 (5)

S=1/3

る。いずれも鉢形、深鉢形土器の一部とみられるものである。(第35図1)は、頸部に二重の沈線がめぐり口縁が外反する胴張りの小形の壺形土器で、底部には四個の小突起を有するもので全体は研磨された無文である。(現存器高5.8cm、最大胴径8.6cm、底径3.7cm)

#### 第IV群 粗製土器 (第23、24図、図版30・31)

本来これらの土器は、いずれかの時期の土器と伴出するものであるが、全体的にみた場合、その出土状況から所属、型式をあてはめることは困難である。従って、本遺跡から出土した粗製土器の一群を一括して本類とした。器種としてはほとんどが深鉢形土器とみられるものである。

##### 1 類

a. この類は、口縁部直下から地文を回転させR-L、L-Rの単節斜縄文が施されているもので、口縁が外反するもの(第23図、15)もあるが、ほとんどがほぼ直口気味の平縁深鉢形土器とみられるものである。口唇部の調整は、尖頭状、平頭状になされている。  
(1~11)

b. この類は、口縁部直下より地文を回転した後、口唇部近くを幅0.5cm~2cmにわたって擦消しているものである。口縁部は波状山形で外反するもの(27)もあるが、平縁で外反気味のものが多い。口唇部の調整は尖頭状になされているものが多い。(12~42)

##### 2 類

この類は、口縁部より単節羽状縄文を施しているもので、口縁が平縁でや、内湾気味の深鉢形土器である。(第24図3~6)

##### 3 類

この類は、口縁部の中央を擦消して、口縁部に縄文帯を残している直口気味の平縁の深鉢形土器とみられるものである。(第24図7)

##### 4 類

この類は、口縁部に無文帯をもつもので、撚糸圧痕、沈線等によって地文帯を区画しているものである。地文は、巣節斜縄文、撚糸文、網目状撚糸文等がある。口縁部は外反気味のものが多い。(8~15)

##### 5 類

網目状撚糸文、撚糸圧痕文を施しているもので、口縁は直口気味で平縁のものが多く口唇部の調整は、尖頭状、平頭状のもの等がある。(16~23)

##### 6 類

櫛齒状文を施しているもので、口縁部に小突起の有するもの(26)もある。(24~29)

## 石 器

### 1. 石器の出土状況

石器の出土状況をみると、第1号、第3号墓の封土中、及びその下の住居址状遺構、土壙等の埋土からのものが最も多く、次いでG区や墳墓周辺の黒褐色土からのものが多く北に移るに従って出土点数が少なくなっている。これらはいずれもどちらかというと人為的に移動された土、二次的攪乱が及んだ状態とみられるところよりの出土が多く、周辺より出土している土器に伴うもの或は、近似的な位置にあるものと考えることも可能であるが遺構との関連で、明確にとらえられるものがほとんどない状態であり、時期的なものを明かにすることも不可能であった。形態、加工の状況から石器として利用されたと判断されるものが93点、その他、コア、フレーク等510余点出土している。

### 2. 石器の分類

石器の分類にあたっては形態分類を行い名称等については、従来の通説に従った。

#### (1) 石 鐸 (第25図1～13、図版33-1～13)

石鎌は総数で13点出土している。石材は石英2点、鉄石英3点、珪質泥岩2点、硬質泥岩2点、玉ずい2点、フリント、黒曜石、各1点である。

外形、尖頭部、側縁形態、基部等の特徴によって5類に分類出来る。

##### 1 類

基部が両側より抉りこみ工字形をなしているもので先端は欠損しているが、先端から基部まで直線的な側縁をなしており、全面に調整剝離が施されている。アメリカ石鎌といわれるものである。(1)

##### 2 類

凹基を有するもので、抉り込みの深いもの、浅いものがあり、側縁は、や・丸味をおびているもの、直線的なもの、弧状を呈しているもの等がある。いずれも全面に調整剝離が施され、身の幅の厚いものと、薄いものがある。(2～5)

##### 3 類

平基で側縁が丸味をおびているもの、直線的なもので、前者は全面に調整剝離がなされ、後者は両面に第一次剥離面を残し側縁を押圧剝離によって調整している。(6～8)

##### 4 類

凸基を有するもので抉りが浅く基部が逆三角形状で極端に短いものと抉りが比較的深く基部の長いものとがある。側縁はいずれも直線的である。前者は身の幅が非常に薄い。いずれも全面に調整剝離が施されているが後者は粗い。(9～10)

第3表 石 器 計 測 表 (石 鑿)

図面番号	出 土 地 点	層 位	長さ(mm)	幅 (mm)	厚さ(mm)	重さ(g)	石 材
25—1	Ba 33	II	18	13	4	(0.98)	珪質泥炭
2	Ba 48	II	22	15	2	0.5	玉 鏽
3	M3—Q5	封 土	21	23	5	1.98	鐵 石 英
4	M1—P1	埋 土	26	—	4	(0.6)	黒 煙 石
5	M1—Q1	封 土	36	24	6	3.5	フ リ ン ト
6	M1—Q4	封 土	41	12	4	2	石 英
7	M1—Q1	地山直上	35	23	8	4	石 英
8	Gh 51	II	30	13	6	2.5	鐵 石 英
9	Db 60	II	22	15	2	0.5	玉 鏽
10	Bc 30	II	(36)	22	4	(1.3)	珪質泥岩
11	Bc 30	II	43	10	7	2.6	硬質泥岩
12	6M—南溝	埋 土	(28)	17	7	(2.3)	フ リ ン ト
13	M1—Q2	封 土	30	17	10	4.0	鐵 石 英
							(石塊状石器)
25—14	M3—Q3	封 土	(48)	24	13	(16.4)	淡色極細粒凝灰岩
15	Bb 33	II	66	26	14	22.5	硬質泥岩
							(石 匙)
26—1	Ba 33溝	埋 土	63	26	7	8.98	淡色極粒凝灰岩
2	Dg 54	I	51	22	9	10.0	珪質泥岩
3	M1—Q2	封 土	62	19	7	8.5	フ リ ン ト
4	N108 地点平場	II	71	24	7	16.5	珪質泥岩
5	N108 第二平場	II	22	45	4	4.8	フ リ ン ト
6	Aj 12	I	51	40	12	19.8	玉 鏽
							(石 筋)
27—4	M1—Q2	封 土	24	18	6.5	7.9	淡緑色細粒石質凝灰岩
5	M3—Q3	封 土	65	42.5	24	111.6	プロビライド
6	M5—Q2	封 土	55	32	19	60	淡緑色細粒石質凝灰岩
7	M5—Q2	封 土	53	37	21	65.3	淡緑色中粒砂質凝灰岩
8	M1—Q3下溝	埋 土	75	42	22	13.2	淡緑色中粒砂質凝灰岩
28—1	Gj 51	III	11	59	11	130	粘板岩質千枚岩
2	Gj 57	II	96	32	16	85	珪化木
3	Gj 51	II	12	42	20	150	片狀ホルンヘルス
							高さ(mm) (石 盒)
28—4	M1—Q2	封 土	16	48	40	(275)	40 中砂質凝灰岩
5	M1—Q2	封 土	(11)	8	14	(170)	24 白色粗粒凝灰岩
6	M1—柱状	埋 土	(80)	45	35	(140)	45 複雑石安山岩
7	M1—Q1	封 土	86	81	28	(265)	28 中砂質凝灰岩
8	M3 Pit 2	埋 土	40	26	10	(11)	15 雜石安山岩
							(四 石)
28—9	M3—Q3	封 土	88	76	18	140	輝石安山岩
10	Gj 51	III	44	33	16	172	輝石安山岩
11	GK土器	盛 土	84	67	22	110	白色細粒凝灰岩
12	表 探		(78)	(78)	(31)	230	中砂質凝灰岩
29—1	M3—Q3	封 土	95	93	50	680	複雑石安山岩
2	Dh 63柱	埋 土	95	74	51	510	輝石安山岩
							(磨 石)
29—3	M1—Pit 4	埋 土	43	39	26	60	輝石安山岩
4	M1	封 土	43	37	35	70	輝石安山岩
5	M1—Pit 4	埋 土	40	25	40	22.8	白色細粒凝灰岩
6	M1—Q2 東西溝	埋 土	40	35	34	60.3	輝石安山岩
7	M1—Q1	封 土	105	87	64	855	輝石安山岩

— 填 館 遺 跡 —

(磨 石)

圖面番号	出土地 地 点	層 位	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重さ(g)	石 材
29- 8	M1-Q2	封 土	51	45	41	132	中砂質凝灰岩
9	M3	I	54	45	31	80	輝石安山岩(加熱赤変)
							(不定形石器)
26- 7	M1-Q4	封 土	53	45	16	27.3	硬質泥岩
8	Gj 57	III	57	41	12	36	珪質泥岩
9	Bd 33	II	52	35	12	39.8	珪質泥岩
10	M3-A3	封 土	45	38	15	31.5	珪質泥岩
11	Bb 33	II	66	26	14	22.5	硬質泥岩
27- 1	M1-A2	封 土	86	25	32	320	珪質凝灰質泥岩
2	表 探		51	42	7	18	硬質泥岩
3	M3-Q3	封 土	78	56	10	58.4	硬質泥岩
30- 1	M1-Q3	封 土	38	13	6	4.15	珪質凝灰質泥岩
2	M3-	封 土	32	14	4	3	鐵石英
3	De 54	I	49	19	5	5.2	淡色極細粒凝灰岩
4	C区	I	35	26	7	9.4	珪質泥岩
5	M1-Q3	封 土	32	36	11	10.9	珪質凝灰質泥岩
6	M1-Q3	封 土	34	36	7	7.5	珪質凝灰質泥岩
7	M1-Q3	封 土	(30)	23	4	5.3	淡色極細粒凝灰岩
8	M3	封 土	28	23	4	3.9	淡色極細粒凝灰岩
9	M3-Q3	封 土	29	21	3	3.2	珪質凝灰質泥岩
10	M1-Q4	封 土	25	35	5	6.3	珪質凝灰質泥岩
11	M3 Pit 5	埋 土	(32)	20	7	4.3	珪質凝灰質泥岩
12	M3-Q2	封 土	31	25	4	2.8	珪質凝灰質泥岩
13	M1-Q2	封 土	75	44	10	39.5	珪質泥岩
14	M3-Q3	封 土	31	31	3	2.1	玉 鏽
15	M1 東	II	57	40	11	10.8	淡色極細粒凝灰岩
16	M1	封 土	58	46	10	17.8	珪質凝灰質泥岩
17	M4-Q1	封 土	44	43	13	22.5	淡色極細粒凝灰岩
31- 1	M8	封 土	52	32	9	9.6	珪質泥岩
2	Gj 57	III	27	35	9	9.8	珪質泥灰質泥岩
3	M3-Q3	封 土	34	30	4	3.4	珪質凝灰質泥岩
4	Cj 57	II	50	25	9	10.1	珪質泥岩
5	M1 東西溝	埋 土	74	23	12	19.8	淡色極細粒凝灰岩
6	Gj 54	III	55	25	6	9.9	珪質泥岩
7	Hn 57	III	60	24	12	19.9	珪質泥岩
8	M3-Q3	封 土	80	45	14	46.8	淡色極細粒凝灰岩
9	M3-Q3	封 土	37	48	12	23.8	珪質泥岩
10	Gj 54	I	84	25	8	14	珪質泥岩
11	M1-Q1	封 土	49	33	9	17	珪質泥岩
12	M1-Q2	封 土	65	35	15	32	珪質凝灰質泥岩
13	Gj 57	II	30	35	6	6.8	珪質凝灰質泥岩
14	M1-Q2	封 土	40	29	10	9.7	珪質泥岩

(円盤状石製品)

29-10	M3-Q3	封 土	71	53	14	105	輝石安山岩
11	M1-Pit 3	埋 土	44	44	6	20	淡緑色細粒質凝灰岩
12	M1-東西溝	埋 土	52	49	8	30	淡緑色中粒質凝灰岩
13	M1-Q3	封 土	59	54	11	60	淡綠色中砂質凝灰岩
14	M3	封 土	55	50	10	48	輝石安山岩
15	M1-Q2	封 土	38	35	10	21	淡綠色粗粒質凝灰岩

## 5 類

基部が丸味をもつてゐるもので、両側縁が丸味をもちふくらんでいるものと、棒状に長いものとがある。側縁は押圧剥離が施され、一部、腹面に剥離面を残してゐるものもある。(11~13)

## (2) 石箋状石器 (第25図14、15、図版33-19~20)

2点出土している。石材は硬質泥岩、珪化された極細粒凝灰岩である。両側縁は丸味を持ち、刃部を形成し、先端は尖っている。断面は中央部が最も厚くカマボコ状を呈しており、両面ともに調整剥離が施されている。

## (3) 石匙 (第26図1~6、図版33-14~18)

つまみ部と身幅の広い刃部からなるもので6点出土している。石材は珪質泥岩、プリント各2点、玉すい、珪化されている極細粒凝灰岩各1点である。

外形及び刃部の形態等より2類に分けることができる。

## 1 類

a. いわゆる縦形で、つまみに対する刃が直線的か、わずかに丸味をもつもので両側縁が直線的に平行するものと一方或は両方が弧状をなすものとがある。調整は背面と腹面の一辺或は、二辺とつまみ部周辺にのみ行われている。(1・2・4)

b. つまみ部に対する部分が尖っているもので側縁は弧状を呈している。調整はつまみ部周辺のみに行われ、刃部をつくるための調整剥離がほとんど行われていないものである。(3)

## 2 類

a. いわゆる横形といわれるもので、つまみ部に対する刃部が鋭角的に斜方向にあるもので、背面は三辺、腹面はつまみ部周辺と側縁の一部に押圧剥離を施しているものである。(5)

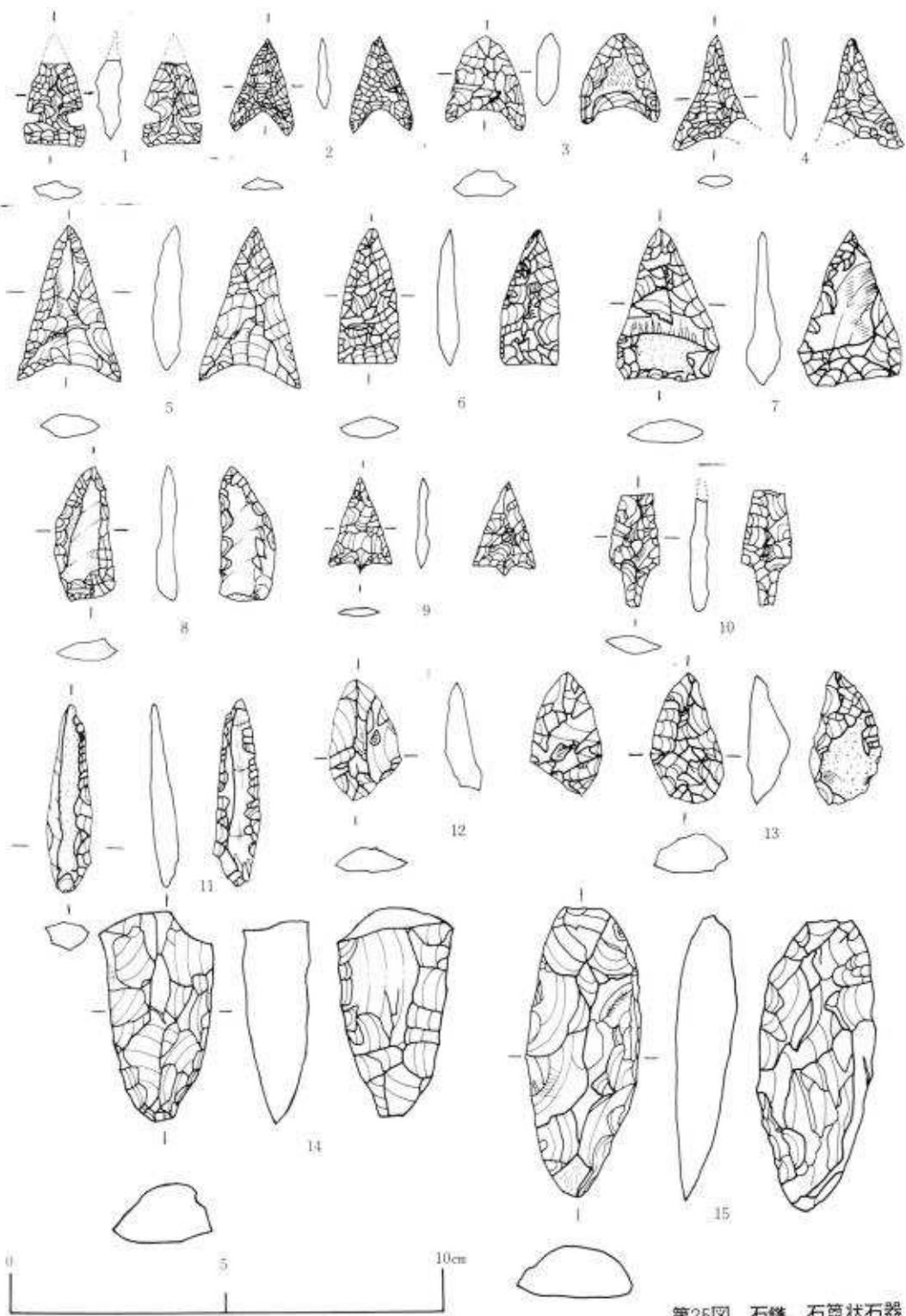
b. つまみ部に対する刃部がほぼ直角をなすもので三辺に押圧剥離が施されているものである。(6)

## (4) 石斧 (第27図4~8、第28図1~3、図版33・21~28)

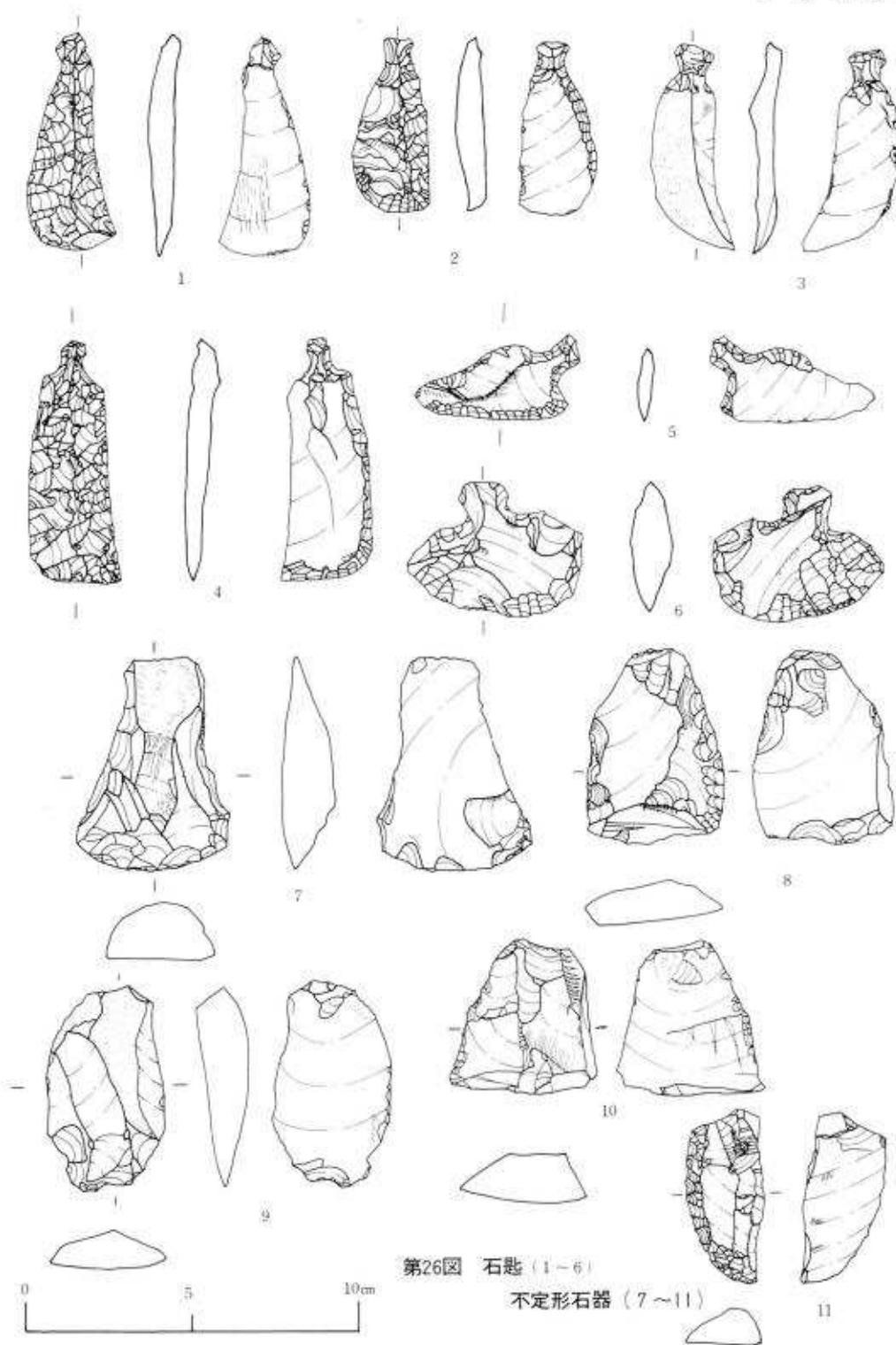
8点出土している。石材は淡緑色細粒石質凝灰岩、淡緑色中粒質凝灰岩各2、プロビライト粘板岩質千枚岩、片状ホルンヘルス、珪化木各1である。外形と断面形態より2つに分けることができる。

## 1 類

外形が台形を呈し断面は面取りが強く行われて角の張る楕円形を示すものである。(4~6) (4)は最大長3.4cm、刃部幅1.8cm、厚さ0.6cmの入念に研磨された小形の磨製石斧で、使用痕、欠損部分がないこと等から実用とみなしがたいものである。

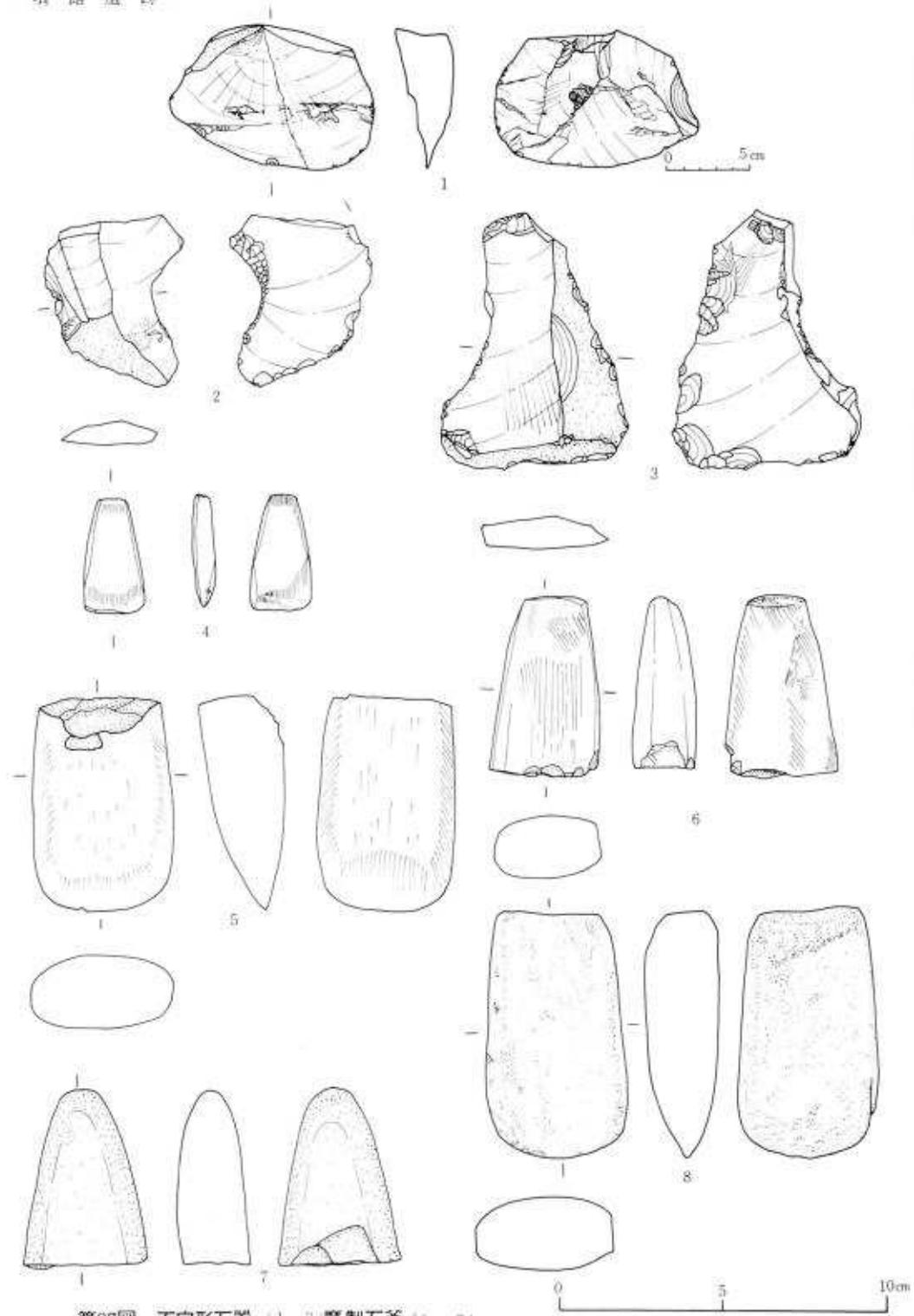


第25図 石鎌、石斧状石器

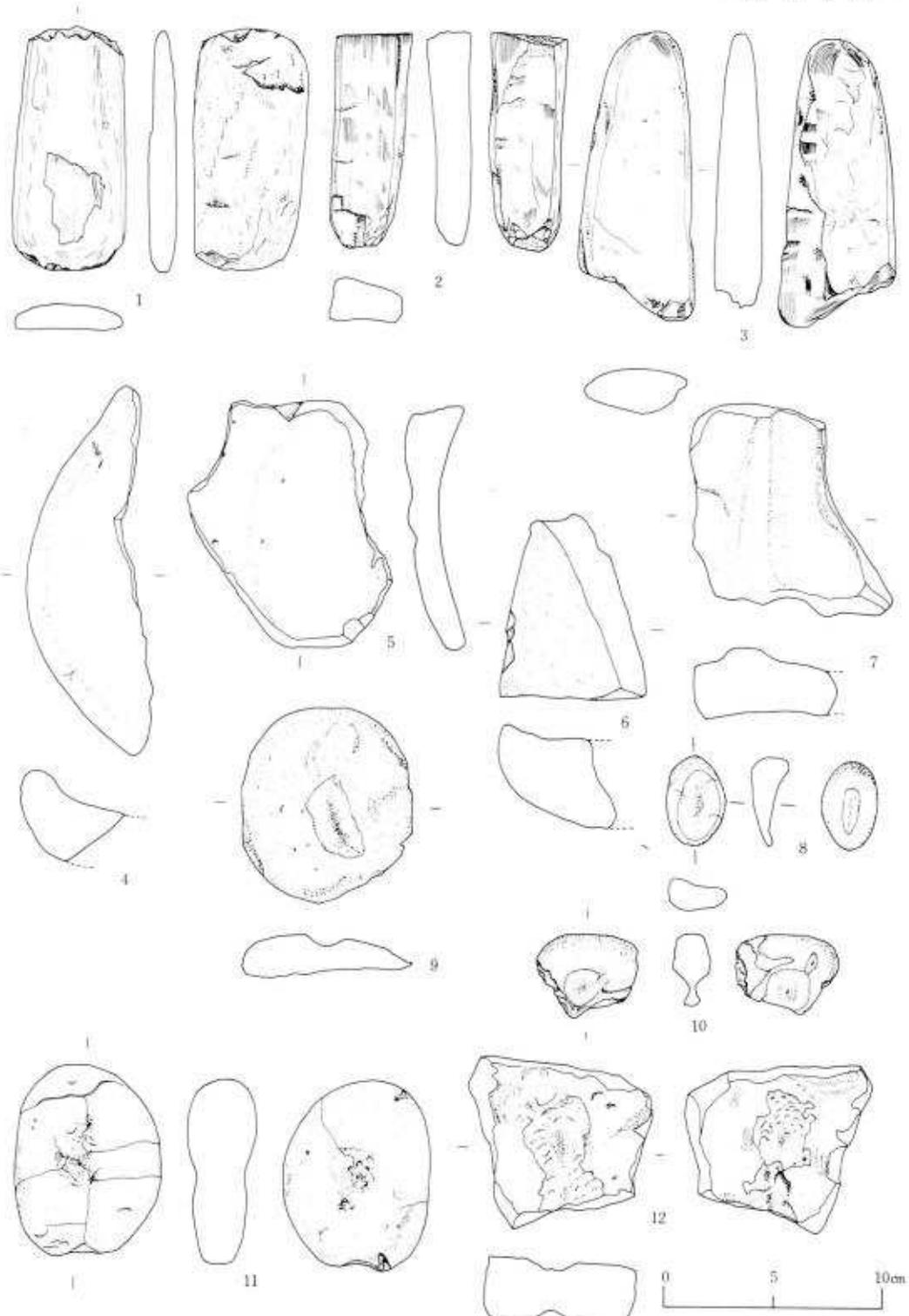


第26図 石匙 (1~6)

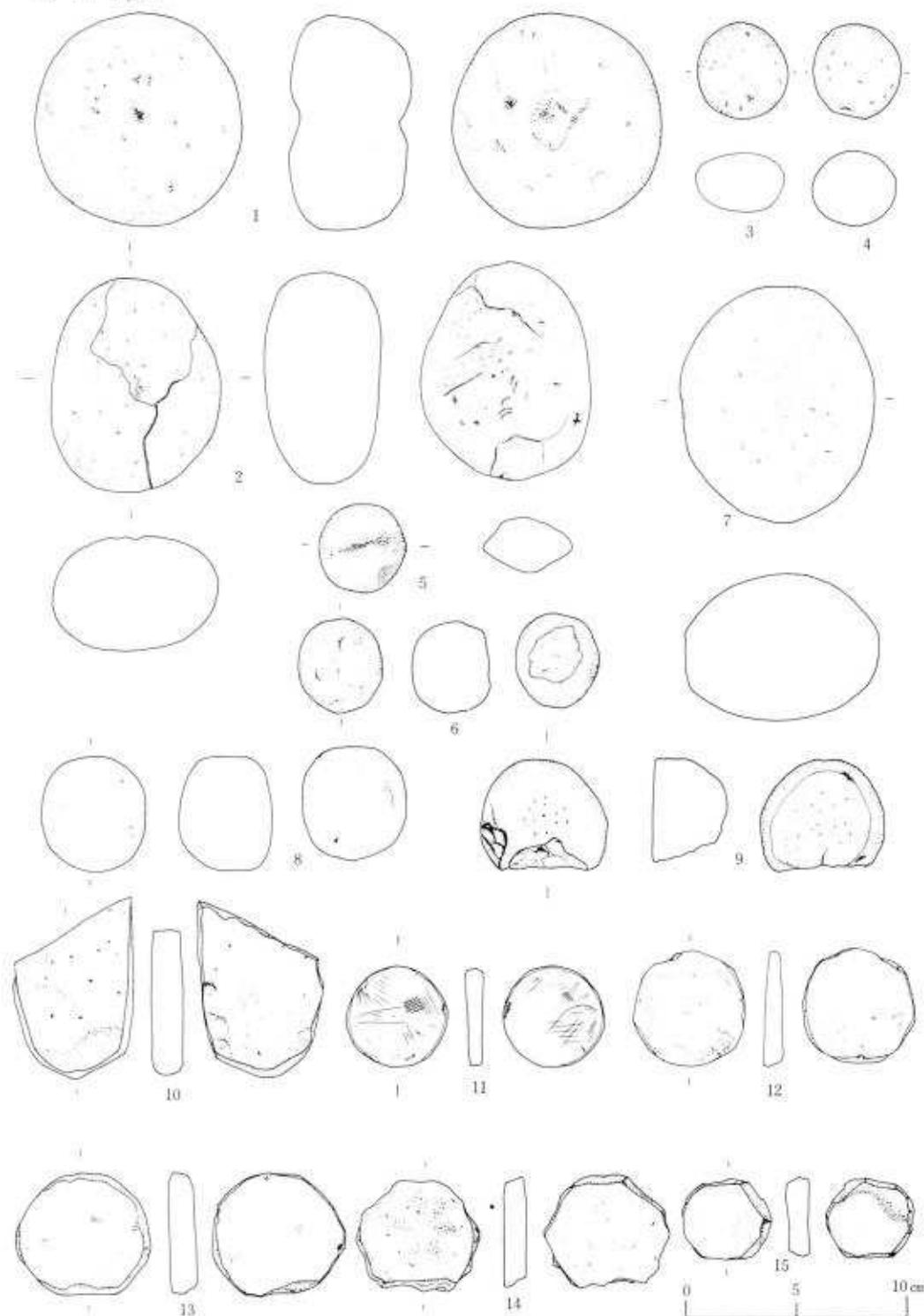
不定形石器 (7~11)



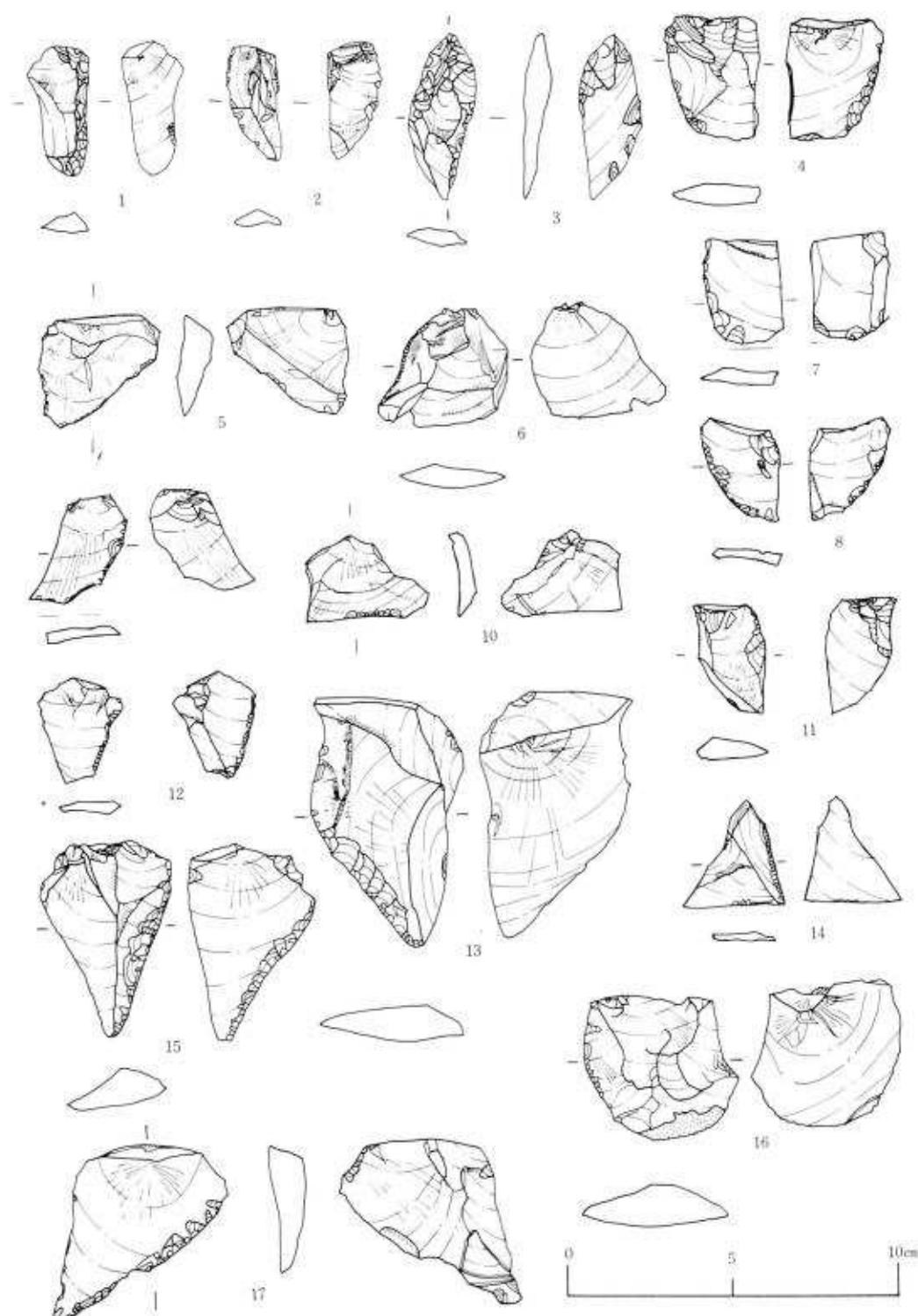
第27図 不定形石器、(1~3)磨製石斧 (4~8)



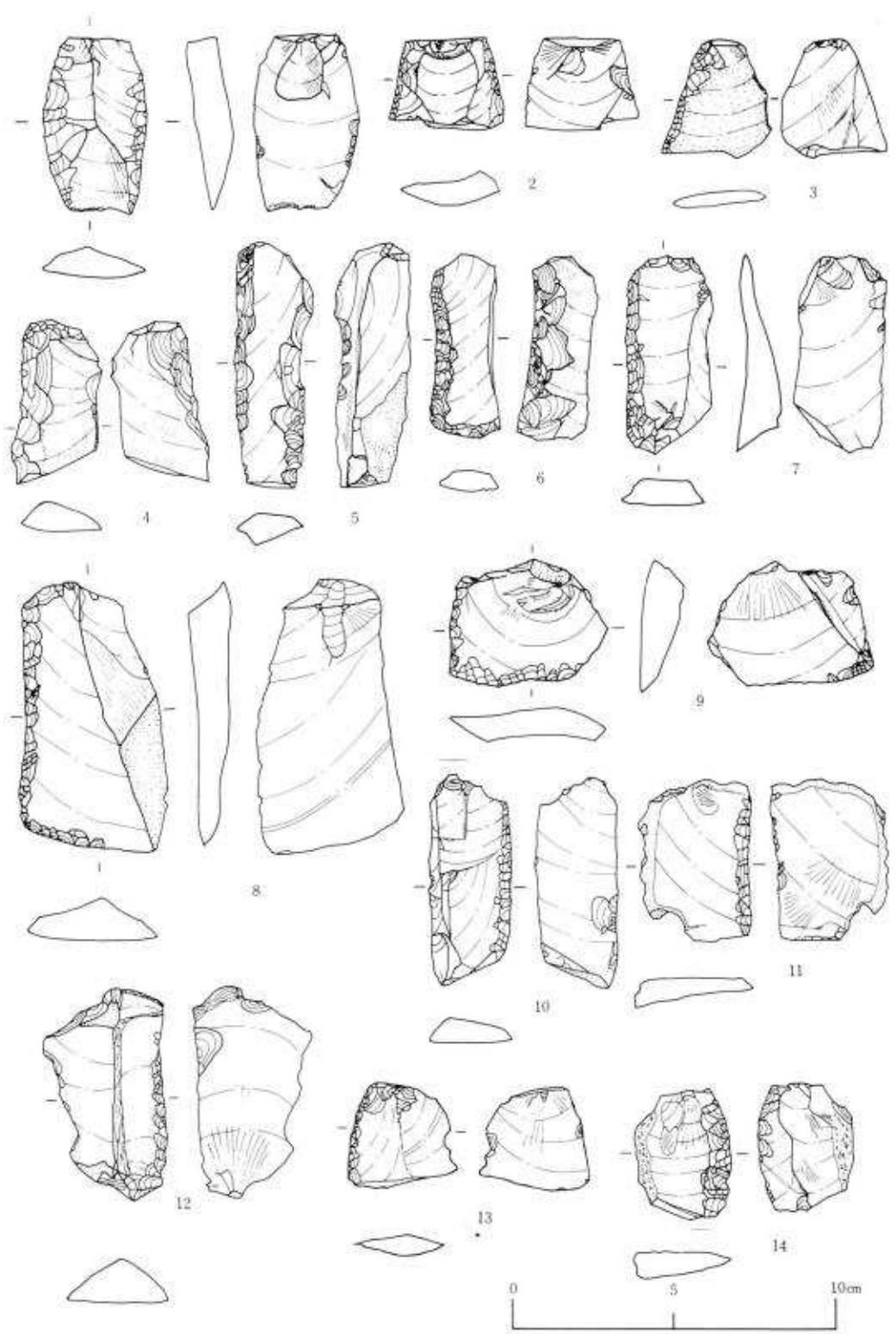
第28図 磨製石斧(1~3), 石刃(4~6), 凹石(7~12)



第29図 凹石 1), 磨石 2~10), 円盤状石製品(11~16)



第30図 不定形石器



第31図 不定形石器

## 2 類

外形の両側縁がほぼ平行にはしる短冊形のものである。断面は刃部の両端以外は丸味をおび楕円状を呈し、扁平である。刃部はクサビ形を呈するものと鋭さを欠くものとがある。

## (5) 石 盔 (第28図4~8、図版34-1~5)

5点出土している。石材は中砂質凝灰岩2点、白色粗粒凝灰岩、輝石安山岩、複輝石安山岩各1点である。いずれもゆるやかな傾斜をもつ縁どりがみられる石皿の破片である。(6)は多孔質の溶岩のブロックを使用した複輝石安山岩製であり、(8)は小形で中央部が緩かな傾斜をもって、ひっこんでスズリ状になっているもので二次加熱を受けて赤変している。

## (6) 凹 石 (第28図9~12、第29図1~2、図版34・6~10)

5点出土している。石材は複輝石安山岩2点、輝石安山岩、白色細粒凝灰岩、中砂質凝灰岩各1点である。一部欠損しているものもあるが、平面形は楕円形を呈するものが多い。断面形は、楕円形及び長方形形状のもの等がある。(10)は両面が極端にへこみ凹部が薄くなっている。二次加熱を受けて赤変している。

## (7) 磨 石 (第29図3~9 図版34-11~8)

8点出土している。石材は輝石安山岩6点、中砂質、白色細粒凝灰岩各1点である。

平面形、断面形は、ともに楕円形を呈するもの、円形を呈するものとがある。比較的小さいものは、円形のツブテ状をなしているものが多い。(9)は磨面が平面的になるまで磨滅しており二次加熱をうけて赤変している。

## (8) 不定形石器 (第26図7~11、第27図1~3、第30・31図、図版35)

剝片の周縁に調整剝離が施され刃部を形成しているもので、擦器、削器的な機能を有する不定形な石器を一括した。総点数は36点である。石材は珪質泥岩10点、珪質凝灰岩質泥岩8、珪化されている極細粒凝灰岩7、鉄石英、硬質泥岩各3点である。

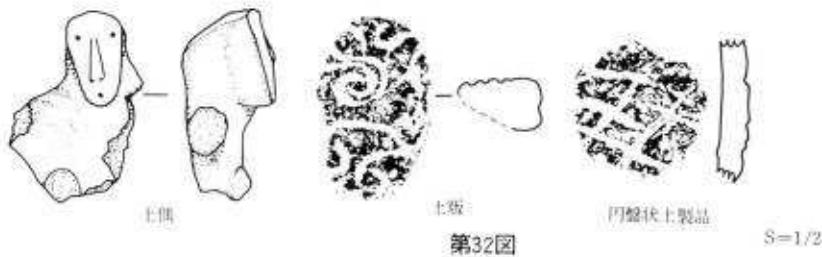
背面、腹面の調整からみると、背面の一辺を調整剝離して刃部をつくり出し腹面は無調整のものが量的に最も多い。

## (9) 盤状石製品 (第29図10~15、図版34-19~24)

7点出土している。石材は淡緑色中粒質凝灰岩3点、輝石安山岩2点、淡緑色細粒質、粗粒質凝灰岩各1点である。板状の石片や扁平な川原石を利用し周辺を打ち欠き、磨く等の加工をして楕円、円形状に仕上げたものであり、縁辺は全周を研磨しているものと、一部打ち欠き部分を残しているものとがある。平面は、いずれも研磨され滑かに仕上げている。(11)は表裏ともに擦痕が認められる。

(10) 土製品 (第23図、図版25-8~10)

- a. 土偶…頭部と胸部の一部が残っていたもので、顔面は面長な逆二等辺三角状を呈し扁平である。目、口は小さな刺突により表現されており、鼻はわずかに隆線で表わされている。胸部には椀状の乳房がついている。その他、両耳、頭部等の表現はなく平滑である。後期に属するものであろう。
- b. 土板…沈線により唐草風の文様が表現されているもの的一部分である。晩期に属するものであろう。
- c. 土製円盤…網目状撚糸文を施した土器片を打ちかいてつくられたものである。時期は不明。



第32図

(11) 底部 (第33図、図版28-19~28)

体部と分離して出土した底部資料は、相当数にのぼるが、それらを大きさ別に分けると径約5.5cm~15.5cmまで大小かなりの差が認められる。また、底面に観察される圧痕は底面を調整して圧痕の不明確なもの他、木葉底、網代底、笹/葉底等がありその中でも網代底が比較的多く網み方にも多様性が認められる。

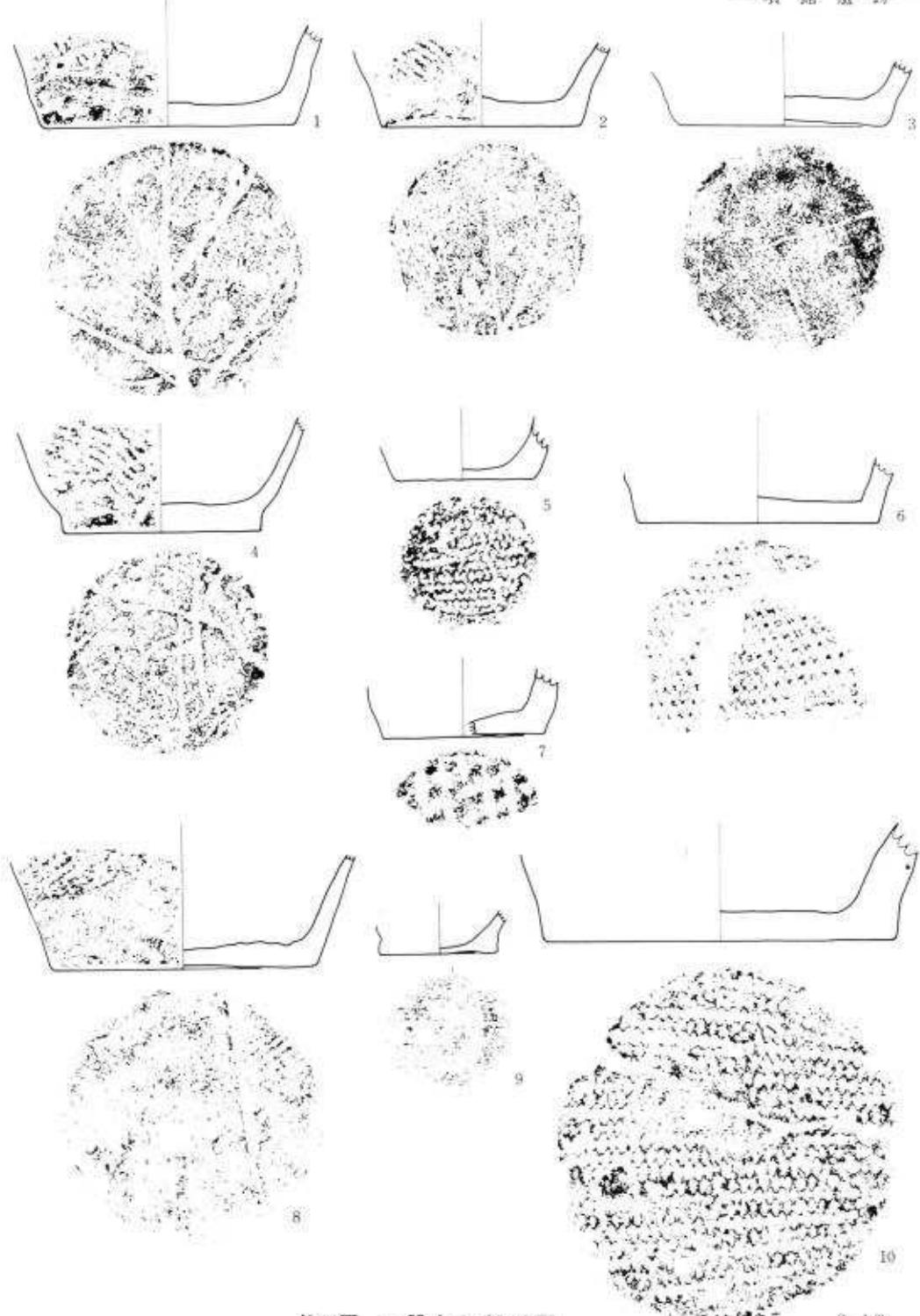
底部の形態は中央部内面がわずかにあがるものと底面がやや外方につき出す特徴をもったものとがある。

(要 約)

本遺跡の調査によって出土した縄文土器について若干編年的位置についてみると、する。

第1群土器は量的に少なくその内容は判然としないが、波状山形の口縁に爪形文、ボタン貼付文の周囲に刺突を加えたものは大本6式に、そして、平行沈線と連続山形文、撚糸圧痕文に刺突を加えたもの等は大本7b式に比定できるものであり縄文時代前期後葉及び中期中葉に属するものであろう。

第2群土器は、後期初頭及び中葉に比定される土器群である。第1類は門前式と類似のものである。門前式の特徴としては隆起線による縄文の区画、すり消縄文、連鎖状隆起線文をはじめ沈線によるS字、逆S字状、渦状文等があげられるが破片なため連鎖状文の要素のみしか分らないが、それに類似するものとみて大過ないであろう。類似のものを出土している遺跡には



第33図 土器底部拓影図

S=1/3

## 一 墳 館 遺 跡 一

前述の門前の外に岩手県陸前高田市堂ノ前貝塚、花泉町具鳥貝塚、北上市八天遺跡、滝沢村卯遠坂遺跡等がある。  
<sup>(注2)</sup>  
<sup>(注3)</sup>  
<sup>(注4)</sup>  
<sup>(注5)</sup>

次に、第2類は隆起線文、ボタン状貼付文、沈線による鉤状文等の文様パターンを有するもので、これ等の類例は具鳥の第Ⅱ群第2類、八天の第Ⅲ群3類等にみられるもので、その他、崎山弁天、卯遠坂等に広くみられるものである。  
<sup>(注6)</sup>

第3類は、門前の第Ⅱ群3類、崎山弁天Ⅳ群3類等にその類例が認められるものでその文様から堀之内I式に類似するものである。

第4類は、破片も少く文様構成も部分でしか判断できないため無理もあるが、磨消による平行繩文、曲線的磨消繩文を構成する沈線に沿って或は、その磨消帶の中に刺突をもつこれらの土器は繩文後期中葉に属すると思われるもので、崎山弁天第V群5類、八天Ⅳ群6類等に一部その類例が認められる。

次に、第Ⅲ群土器についてみると、どちらかというと典型的な半齒状文が退化し簡略化されたもの、それらが口縁部の平行沈線と刻目に移行する過程とみられるものが多く、また、磨消繩文による雲形文などの流れのある曲線文から直線的なものが目立つ施文がなされており、更には平行沈線化の進んだもの等型的には、大洞C)～C式及びA式に比定されるものであろう。  
<sup>(注7)</sup>  
<sup>(注8)</sup>

なお、石器については、アメリカ式石鎌を除いてこれらの時期のいずれかのものと併行関係にあるものであろうが、既述したように時期的には不明である。

(注1) 内前貝塚岩手県陸前高田市教育委員会 昭49  
(注2) 堂ノ前貝塚岩手県陸前高田市教育委員会 昭47  
(注3) 具鳥貝塚岩手県花泉町教育委員会 昭46  
(注4) 八天遺跡、遺物篇・図版篇、北上市教育委員会昭53、昭54  
(注5) 東北従貢自動車道関係埋蔵文化財調査報告書I 岩手教育委員会昭53  
(注6) 崎山弁天遺跡岩手県大迫町教育委員会昭49  
(注7) 本書所収  
(注8) 東北従貢自動車道関係埋蔵文化財調査報告書VI 岩手県教育委員会昭54

## 3. 弥生時代の遺構と遺物

### (1) 遺構

#### Bf27住居址状遺構(第13、34図)

[遺構の確認] 第8号墓の封土を除去した後、基盤面の南東隅で検出したものである。

[平面形] 北西方向は不整形、主体部は隅丸方形状。

[規模] 南北3m±×東西3.5m±、深さ0.3m(0.7m)

[断面形] 壁は緩かな傾斜をもつて立ち上る深皿状である。

〔覆 土〕 焼土のある面より下の埋土は、地山の明褐色土の汚れた褐色土が主で固くしまっている。焼土より上の埋土は黒褐色のシルト質土で炭化物を微量に含む。

〔底 面〕 地山面、焼土ののる面ともほぼ平坦である。

〔炉、その他〕 床面とみられるところに焼土があるのみで柱穴、その他の施設は認められない。

〔年代決定資料〕 焼土ののる面より下の埋土より木葉底の他磨滅の著しい縄文土器片が出土し、焼土ののる面より上部から第35図、2・4の土器の他、少量の撫糸文の土器が出土しており、これが一応、決定の資料となる。

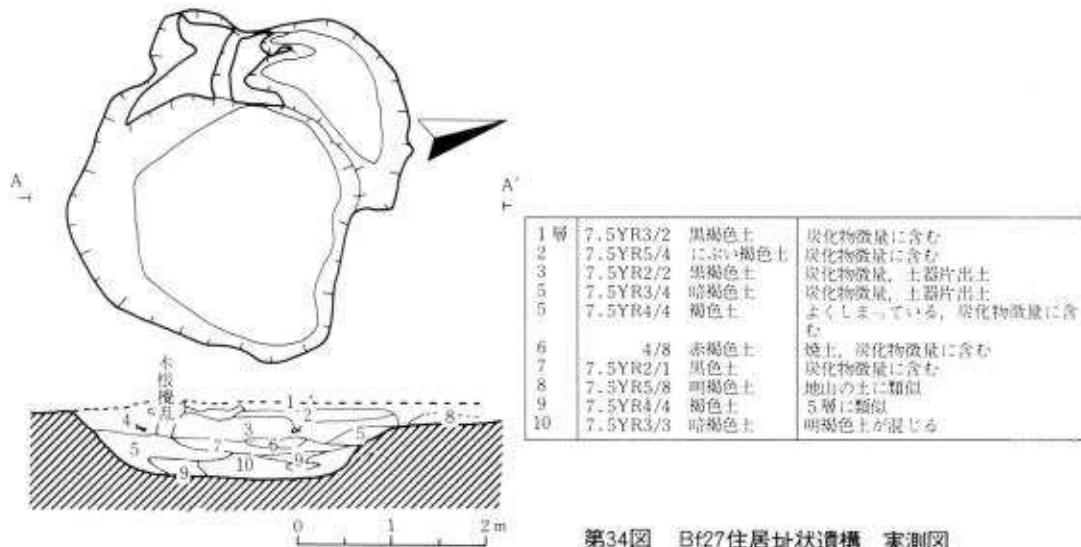
〔性格等〕 焼土は存在するが、柱穴その他の施設が認められず形態的にも、構造的にも名称としては住居址状遺構としたが、住居跡としての要素に欠ける点が多い。焼土面近くの埋土より出土している土器が弥生期とみられるもののみであることから弥生期或はそれに近い時期に属するとみられる遺構であるが性格的には不明といわざるを得ない。また、下部の埋土の状況から縄文期に使用された可能性もある。

## (2) 出土土器 (第35図2-4、第36図、図版25-3~5、32)

弥生時代に属するものとみられる土器の出土状況は、Bf27遺構埋土中より出土した壺形土器(第35図4)及び壺形土器の(第35図2)底部とみられるものの出土を除けば、他は、土壙中や第2層の黒褐色土中に包含された形で出土したものでその総数は約100点である。地域的には調査区の北側D・E区の西に寄った地域からの出土が多い。いずれも、そのほとんどは小破片であり形のまとまったものとしては前述の2点の他Ebグリットを中心に出土した壺形土器(第35図3)がある。文様、地文等の違いからそれぞれ分類し、その特徴を述べる。

### 1 種 汎線を主とするもの

- a. 平行汎線、変形工字文に類似するもの いずれも平縁の口縁部の破片で(12・14)は口縁に沿って平行汎線をめぐらしたもので14は2条の汎線の結節部にボタン状の小コブを有するものである。15は、変形工字文に類似する文様を有している。  
胎土は細砂を含むものであり焼成は、浅黄橙色を呈し比較的良好である。器高は薄手であり、小形土器の破片とみられるものである。
- b. 同心円、弧状汎線をもつもの (1)は平行汎線を用いて同心円、連弧文を施文している壺形土器胴部の破片とみられるものである。(2~5)は肥厚気味の平縁の口縁に沿って平行汎線をめぐらしそれに更に弧状の汎線を加えたもので深鉢形土器とみられるものである。(6)は互に向い合った三重の連弧状汎線とそれに沿って刺突列点を加えたもので、地文は間隔のある継位主体の撫糸文で壺形土器の胴部とみられるものである。(第35図2)は、下向きの連弧文を汎線と磨消により胴部下部に施したものであろう。(27~33)は、



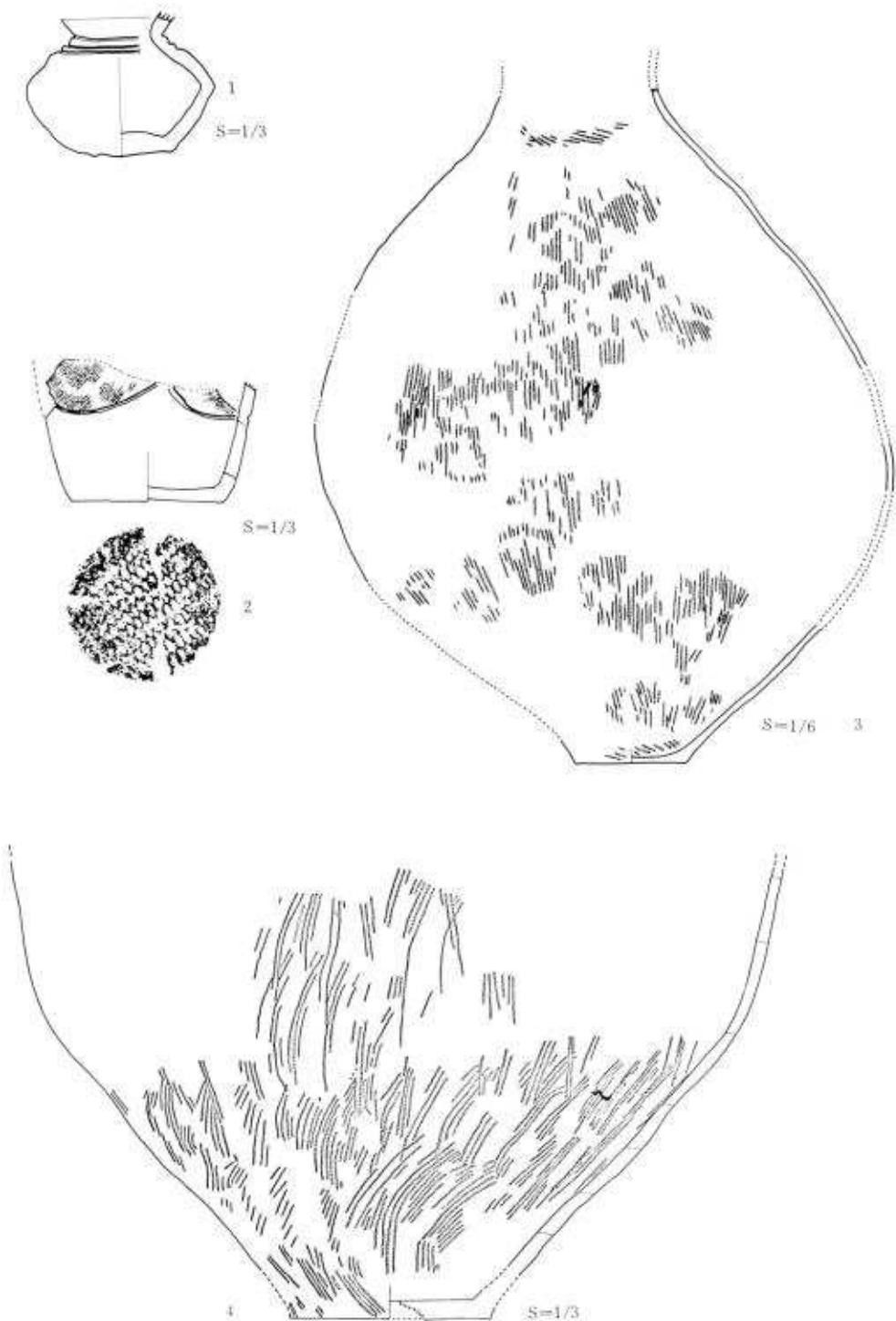
第34図 Bf27住居址状遺構 実測図

縦位、斜位の撚糸文の地文に弧状沈線と竹管による刺突を加えたものである。胎土はいずれも粗砂、石英をわずかに含む。焼成は褐色、黄褐色を呈し良好なものが多い。

c. 山形波状文の沈線をもつもの (16~26) は沈線により波状（鋸歯状）及び直線を口縁にめぐらしているもので、(21)は沈線の下に刺突列点を加えている。地文は無文、細繩文、撚糸文等がある。胎土は細砂を含み焼成は浅黄燈色、褐色で良好なものが多く器厚はいずれも 5mm 前後と比較的薄手のものが多い。

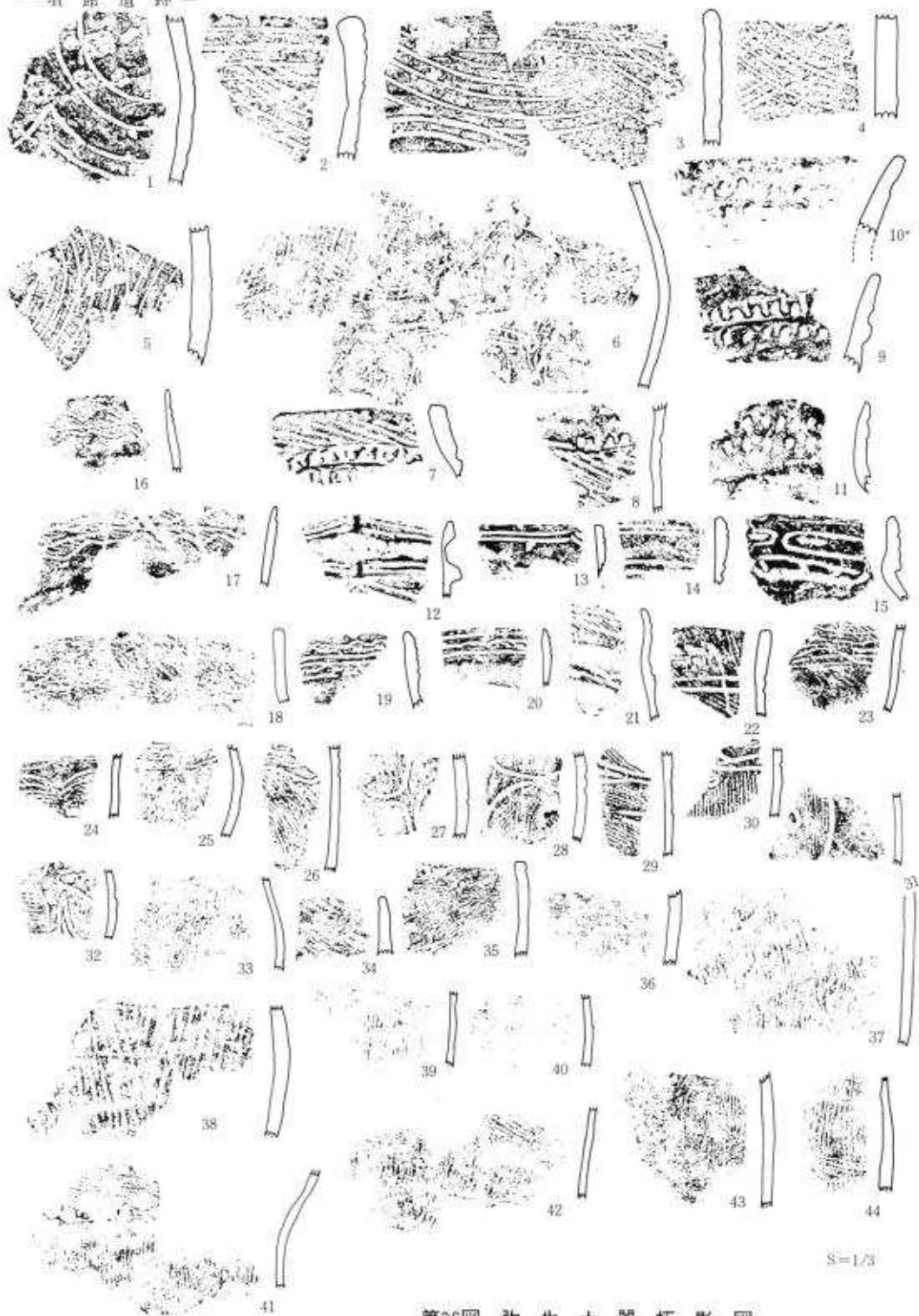
2 類 交互刺突、刺突文をもつもの いずれも外反気味の口縁部の破片で平縁及び山形状のものがある。(7~8) は地文の細繩文に交互刺突浮文を施したもので(9)は無文のものに交互刺突浮文及び刺突文を施している。(10~11) は無文に刺突文を施しているもので複合口縁状を呈しているものもある。これらは、いずれも壺形土器の口縁とみられるものであり他の文様のものと組合されるものと思うがここでは一要素として分類した。

3 類 繩文、撚糸文のもの (第35図3) は口縁部を欠いているが胴部中央近くの強く張る大形の壺形土器で、縦位の間隔のあいた撚糸文を押圧しているものである。口縁部及び底部近くにはいずれも斜位の繩文が施され、口縁部と頸部の境は無文帶になっている。(最大胴径50cm、底径9.8cm、現存器高(58.5cm)胎土は石英、粗砂を含む。焼成は普通で赤褐色を呈し、器厚は8mm~10mmである。(第35図4) は上部半分が欠損しているがやはり最大胴径が中央近くにあ



第35図 出土土器実測図

— 墳 館 遺 跡 —



S = 1/3

第36図 弥 生 土 器 拓 影 図

ると推定される壺形土器である。縦位の撚糸文が間隔のあけた短い縦の弧状（したれ柳状）に施されている。底部近くにはやはり屈折した斜繩文が施され底部にもわずかに繩文が残っている。（底径8.8cm、現存器高22cm）胎土は細砂を含む。焼成は良好で赤褐色を呈している。器厚は4mmと薄い。内外面にスヌ状のものが付着している。（34～44）は、口縁部に横位の撚糸文を不規則にびっしり押圧し頸部はわずかに無文、胴部には縦位の撚糸文を施しており（41～42）、その他、比較的間隔のあいた縦位主体の細繩文、撚糸文を施した胴部の破片である。胎土は細砂、厚手のものは粒砂を含むが焼成は浅黄橙色、褐色、赤褐赤褐色を呈し一般に良好である。

#### （要 約）

今回の調査で発見された弥生時代に属するとみられる土器について、その所属時期を他の類例と比較しながらみることにする。

器形としては壺形土器以外については小破片なため確かではないが、おおよそ鉢形、甕形土器等の器種が存在すると想定される。

次に時期的なものについてみると、1類(a)の平行沈線及び変形工字文に類似するこれらの特徴を有するものとして、青森県二枚橋遺跡<sup>(注1)</sup>、県内においては二戸郡火行塚遺跡<sup>(注2)</sup>、江刺市力石Ⅱ遺跡<sup>(注3)</sup>等にその類例がみられるものであり、これらの土器は弥生時代中期初頭に属するもので宮城県における大泉式、岩手県南部における谷起島式に類似した要素をもつものと考える。

次に1類(b)、(c)及び2類、3類における特徴をあげると次のようである。

- ① 口縁及び胴部に同心円状文、弧文（連弧文）の用いられているものがある。
- ② 重層連続山形文、波状文の施されているものがある。
- ③ 口縁部に波状口縁とみられるもの、複合口縁状のものがある。
- ④ 口縁部に交互刺突浮文、刺突文がみられる。
- ⑤ 繩文、撚糸文は条が縦走している場合が多く、頸部及び底部近くには斜位の繩文（撚糸文）の用いられているものがある。
- ⑥ 弧文と竹管の組合せによる施文がある。

一方、中村五郎氏によれば天王山式土器の特徴として次のようなことがあげられている。<sup>(注4)</sup>

- ① 口縁の突起の発達
- ② 交互刺突
- ③ 条の縦走する繩文
- ④ 体部文様帶下端の下向きの弧文（しばしば連弧文）

これらの特徴と墳館出土の土器を比較してみるとかなりの共通した部分が認められる一方で口縁の突起の発達の認められないこと、交互刺突浮文が簡略化されたものが多いこと、細繩文、撚糸文については比較的間隔のあいた縦位の条が施されていること等の相違点が上げられる。

以上のようなことをもとにしてその類例を求めるに、中村氏が天王山式の後続型としている「踏瀬大山式」<sup>(注5)</sup>や興野氏が発表された「大穴遺跡」<sup>(注6)</sup>のそれとより類似した要素を多くもっている